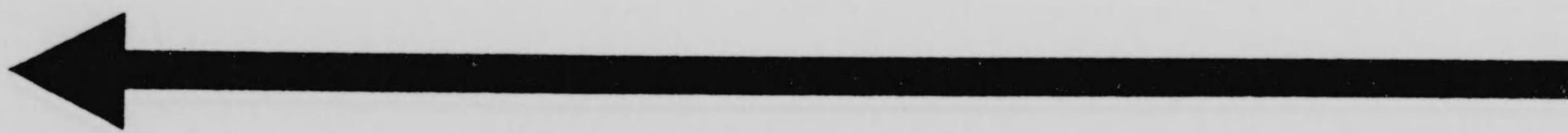


363

260



始



風俗研究會編纂

一國
一奇
面白風俗
嘸

363-260



面白風俗噺

大正
6. 9. 15
内交

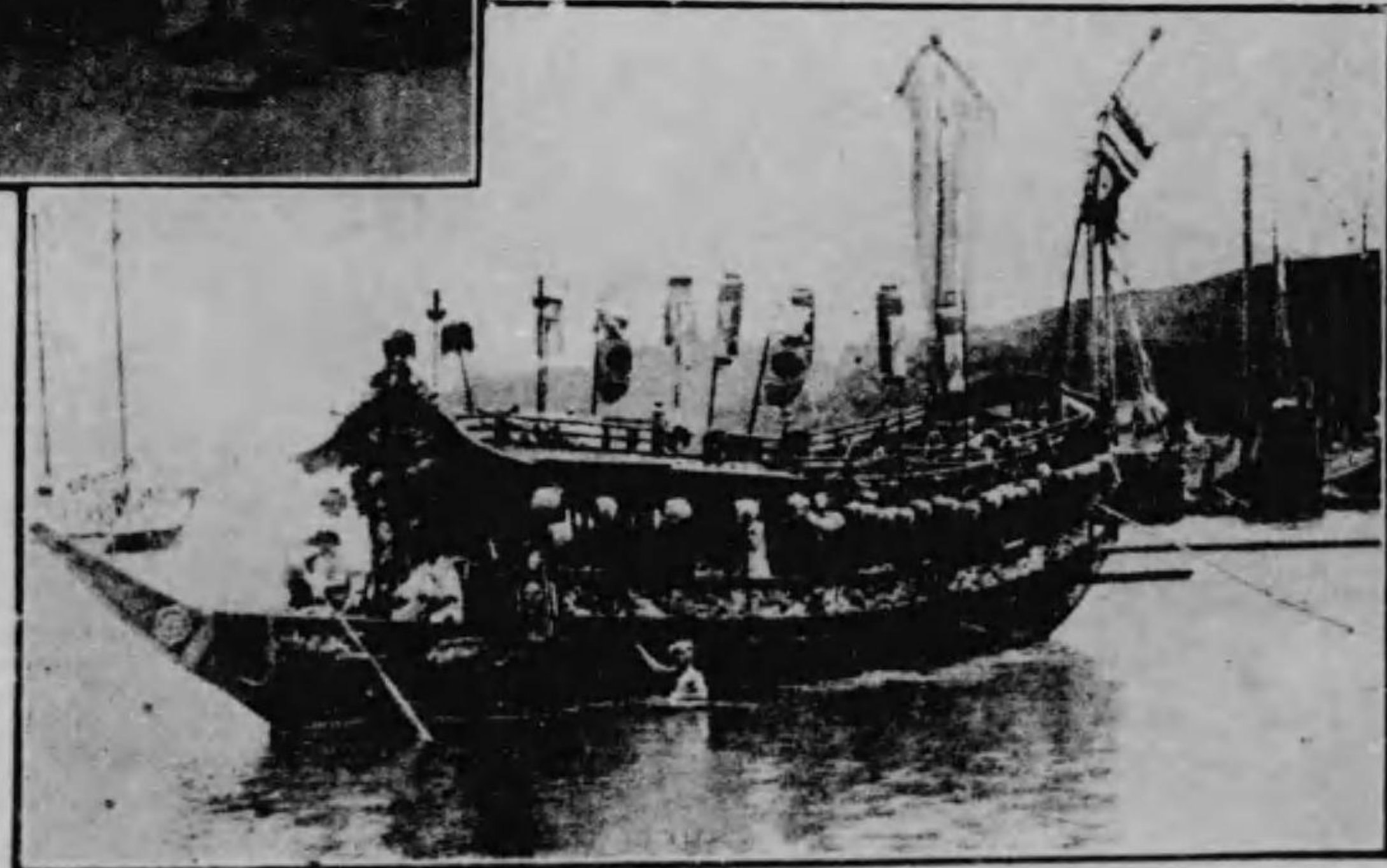
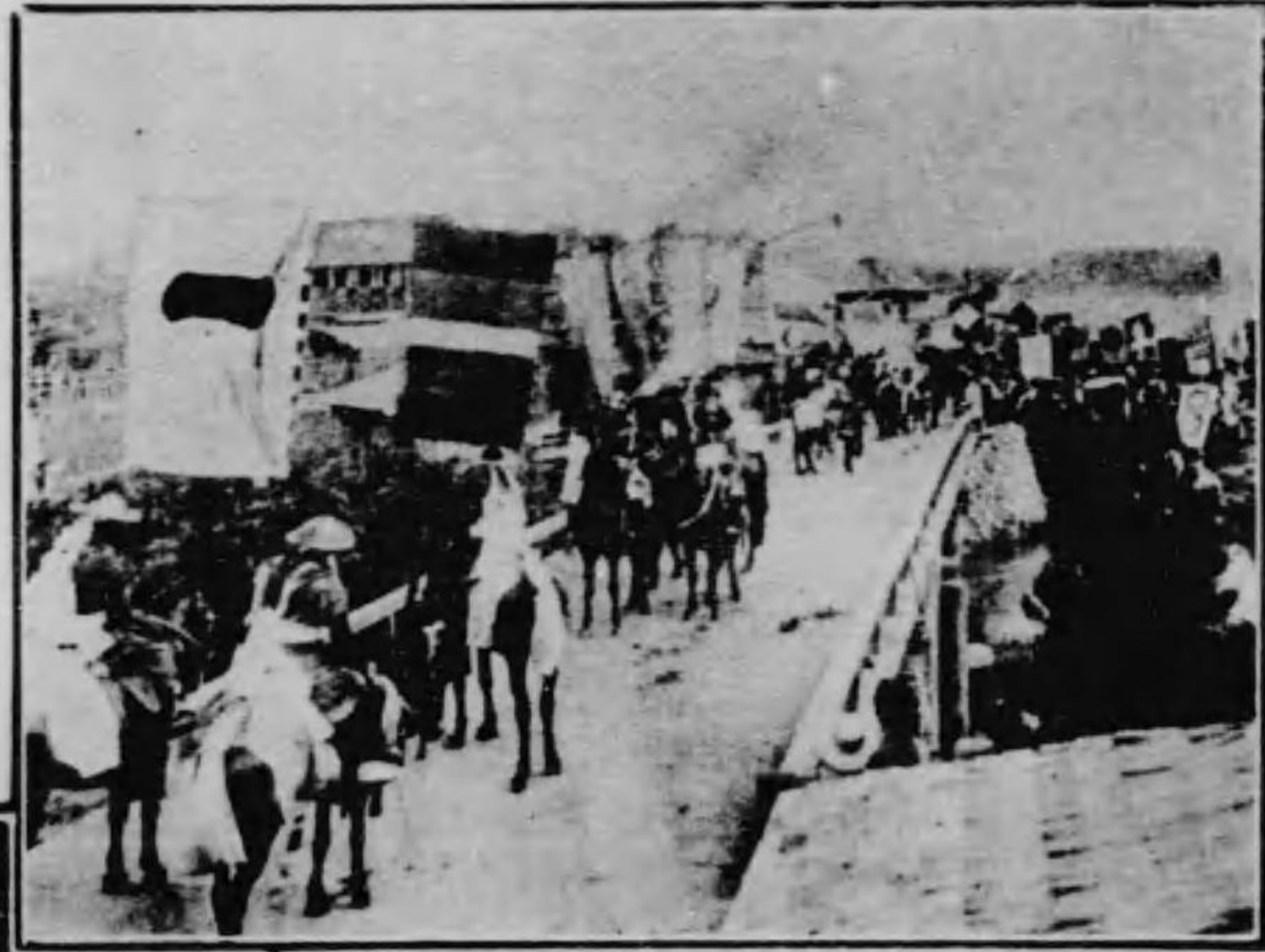


序文にかへて

移風易俗は古聖人も難しとする處で、觀風察俗は爲政者の心を用ふべき處である。近時これ等に關する研究、漸く世人の注意を促すに至つて傳説口碑奇習等の史料を採集する者多く、仔細に地方々々の風俗をたづね、其由來を探究した著書も出るやうになつた。傳説口碑奇習等には、或ひは奇絶快絶を叫ばしむるものもある、或ひは破顔三笑願を解かしむるものもある、又は野鄙倦厭たるべきものも無いではないが、其片影には其地理歴史が潜んで、政治宗教に關聯するもの、人情の機微に接觸するもの、味ひ來れば津々たる趣味の横溢しないものは無いのである。然るに教育の普及に従ひ奇風異俗も、文明の空氣に觸れハイカラ風に吹きまくられ、特殊の俗は段々一掃されんとする傾きと成つたので、我等

てへか 文序





相馬の馬祭 三崎の舟祭 鳥追

てへかに文序

同人間に其研究を起した。着々材料を収集せしうちで、最も趣味ある習俗を一國一話づ、撰擇し、面白風俗嘸々題して刊行するに至つたは、唯消閑の談柄とするのみでなく、同好の士が觀風察俗の資料に供せんとするるのである。

大正丁巳盛夏九十度以上の熱窓の下に
研究資料を調べつゝ、同人を代表して

瘦鶴道人識す

目次

脊中合の松飾……………(東京)……………一

○ 新年の笠祭……………(京都)……………五

十日戎の寶惠駕籠……………(大阪)……………六

筑摩の鍋女……………(近江)……………三

袖米乞食……………(丹波)……………一六

初揚の蛸の足……………(攝津)……………二〇

由良の鐵漿附……………(淡路)……………二三

○ 國府宮の裸體祭……………(尾張)……………二七

元日の朝參り……………(越後)……………三三

御田踊り……………(紀伊)……………三五

亥の子まんでんしよ……………(阿波)……………三六

掃除日の墨塗り……………(下總)……………四二

蛇穴の汗掛け……………(大和)……………四六

宮崎の玉せり……………(筑前)……………五〇

紙鳶會の奇観……………(肥前)……………五四

十五夜の綱曳……………(日向)……………五七

初午の厄落し……………(志摩)……………六一

門火と鼻つき餅……………(備前)……………六五

巳の日の雑煮……………(伊豫)……………六九

八の戸のいぶり……………(陸奥)……………七三

誘拐し婚禮……………(豊前)……………七六

鳥小屋の爆聲……………(常陸)……………八〇

樽入れ樽開き……………(安藝)……………八三

雌雄の左儀長……………(山城)……………八七

箆笠で水祝ひ……………(周防)……………九一

黒石の蘇民祭……………(陸中)……………九五

山中のおくせん……………(加賀)……………九九

日本一の大提灯……………(三河)……………一〇二

火祭の押繪競争……………(越前)……………一〇六

山中の牛供養……………(出雲)……………一〇九

明石の大ごと……………(播磨)……………一一三

大黒と福の祝儀……………(讃岐)……………一二七

中村の馬逐ひ……………(磐城)……………一三一

鳥追ひ……………(信濃)……………一三四

闘牛の惨劇……………(隱岐)……………一三八

針歲暮のお焼き.....(能登).....一三二

お祝の爪揚げ.....(土佐).....一三五

さいとう拂ひ.....(相模).....一三九

餅賣と節季候.....(陸前).....一四三

小供が神主に代る.....(羽前).....一四六

松飾りの奪合.....(肥後).....一五〇

白眼の達磨市.....(武蔵).....一五四

どんたくの松囃し.....(筑前).....一五八

花廻りの美観.....(根室).....一六二

島田の大奴.....(駿河).....一六五

丹生川の白刃飛び.....(伊勢).....一六九

山入り鋏入り.....(下野).....一七三

金輪投の遊び.....(薩摩).....一七六

豊年祝はうじやり.....(上總).....一八〇

奇抜なはさみ詣.....(日高).....一八四

婿殿の居候.....(伊賀).....一八七

尻摘み祭.....(伊豆).....一九〇

花嫁の突落し.....(越中).....一九三

放生會の煙止め.....(若狭).....一九六

娘の身代米一升.....(備中).....一九九

お祝の石地藏.....(石見).....二〇二

馬上の伊勢音頭.....(美濃).....二〇四

道筋の出し物祝ひ.....(因幡).....二〇八

馬方も魚賣も女.....(對馬).....二一一

福山の山……………(備後)……………二二四

草鞋を腰に提げる……………(伯耆)……………二二七

鳴物で雷を追ふ……………(上野)……………二二〇

曉天の田植式……………(甲斐)……………二二三

謠曲で婚禮……………(岩代)……………二二五

狐狩らずの狐狩……………(丹後)……………二二八

卯の當の酒宴……………(但馬)……………二二二

謠曲と七度吸物……………(遠江)……………二二四

佛送りの草船……………(羽後)……………二二七

新年の行事……………(沖繩)……………二二九

老婦少女の舞踏……………(臺灣)……………二四二

……………目次終……………

一國面白風俗噺

風俗研究會編

脊中合の松飾

(東京)



東京で最も奇なるは脊中合せの松飾であらう、正月には何處でも種々變つた慣例のあつたもので、東京にも多少あつたが今では全然廢たれたが、古老の話を聞くと元日の白々明けに、一家の主人が「柳の下の御事は」と口を切ると、女房を始め家内一同が威儀をつくろひ「されば其の事、お目出度候」と挨拶し、それから顔を洗ひ雑煮を祝ふた例もあつたし、又商家などでは元日の出錢を嫌ひ、如何なる事があ

つても元日は金を出さぬ家もあり、今でも此の習慣は遺つてゐる家が幾干もある、
そして二日は買初めに大きな物を買ふと云つて、魚川岸へ鯨を買ひにやつたものだ、
鯨といつたつて一尾買ふのでは無い、只だ鯨の肉を買つたのである、二日から金銭
の出入は平氣でするけれども、此の鯨買ひの歸るまでは金を一文も出さぬ例は、大
きな商店に行はれた風俗である、又今も尙ほ東京一般に行はれてゐるは、元日には
掃除をしない事である、で、大晦日の夜にはおそく大抵の家でバタ／＼掃除をして
元日には帚を持たない習慣は遺つてゐるが、是れ等は奇習として取立て云ふほどの
事でない、けれども松飾りを春中合せにするは、誰れも聞馴れてゐるから何でもなく
珍らしくも無いやうな氣がするが、十分奇風俗として東京を代表するだけの價値を
有してゐるのだ。

東京で春中合せの松飾りをする處は何れかと、改めて説明するまでもない新吉原
の遊廓である、新吉原の本飾りと云へば必らず春中合せにするのだ、此の名物とし

て謠はれ囃された古例も、一時は廢れて名のみに残つてゐるが、近頃また之れを復
活して春中合せにお飾りをするやうになつた、之れが何ういふ飾りかと云ふに、廓
内の往來の真中へ向ひあつた娼樓が松竹をたてるのである、普通松飾りと云へば何
れも我が家の前、即ち入口に、我が入口を後にして外面に向ひて立てるが例である
に、此の遊廓の本飾りばかりは、これと正反對に我が家の入口の方へ正面を向けて
立てる、それも入口に接した前ではない、ズツ離れた往來の真中に持ち出して立
てるのだから妙である、之れでは門松と言ふ名に反してゐるのだが、遊廓の儀式だ
と云へば青筋を出して彼れ是れ云ふも野暮の骨頂であるから、まア理窟などは抜き
にして置く、處でその飾り方は何うだと云へば、松と竹を立てるは世間並に敢て違
ふ處はない、そして之れに板注連を張るのに、丁度人の頭とすれ／＼位に張り渡し
其の真中のところへ各樓の徽章の入つたもの、又は屋號を大きく書いたもの、番傘
を開いて結び付ける、我が家の方を正面にしてゐる、それが双方より往來の真中

に自分の入口の方を正面として立てるのだから、お飾りは即ち春中合せにピッタリ引附いてゐることになるのだ、是に於いて春中合せの松飾りの名は出たのである。この春中合せの松飾りに就ては、大店でやつたのでない横丁の小店のみでしただと云ふ説もあるが、今こゝで其様考證めいたことを彼れ是れ言はなくも可し、始めは左様であつたかも知れないが、後には一般に行はれるやうに成つてゐるから、殊更に小店に限つたものだと断る要もないさ、處で序であるから維新前の元日、新吉原の遊廓で花魁の初道中があつて、仲の町の茶屋へ寄つたときには、必らず附き従つてゐる禿に押繪の立派な大羽子板を持たして居た、花魁が道中と稱して遊廓を歩くに、元日に限つて羽子板を持たすと云ふは他にない事で、此の遊廓のまた一奇習であるのだ、之れは餘り古い時代よりあつたやうでは無い、何でも文化文政頃よりこんな事が初まつたのであらう、兎に角に春中合せのお飾りは奇習で、元日になると花魁道中の羽子板と、仲の町のお茶屋へ青簾が一行一體に掛るは美観で、一寸他にない奇な風俗である。

寸他にない奇な風俗である。

新年の釜祭

(京都)

京都といふ處は職人の多い地であるから、従つて、之れを使用する家もまた多い譯である、この職人を使用する家を職戸といつて、職戸の中にも種々あるが、職業用として釜を使ふ職戸は、本紅染家、絲練家、ふかし物家、飴家などが主なものである、是れ等は常に大竈を備へ、火を焚かねば職業が出来ない稼業であるので、常に釜を大切に取扱ひ、釜があつてこそ飯が喰へるのだと敬意を表し、決して之れを粗忽には扱はない、大工が道具を大切に作る如く、料理人が庖丁を選ぶに注意する如く、釜には多大の敬意を拂つてゐる、それで年の暮になる竈築きと稱して、竈を塗り直したり又築き直したりする、一年中に破損した處でも出来れば修繕はするけれど、大抵は常に修繕などする事稀れで、年の暮れになつてから、まだ結構に使

用の出来ると思はれるものまで、塗り直したり築き直したりして春を待つ支度をす
るのだ。

平生はその家々に依つて異なる點はあるが、毎月必らず荒神祭と云つて神官を
招き積ひをさせる、之れを竈積ひといつて、釜を使用する職業とする家でないまで
が、素人の家でも此竈積ひは戸々に行はれたものだ、之を専門にクル／＼市中を廻
り歩いた神官に類似した者や、山伏法印のやうな者もあつたが、之れ等は既に跡を
断たけれど、所謂職戸で神官を聘して行ふ竈積ひは、今も繼續されてゐるさうだ、
之れには何等の形式もない、只だ神官が竈の前で祝詞をあげるまでだが、新年の初
めに行ふ釜祭といふものは、式も一定してゐれば職戸では是非行ふものである。
何様忙がしい職人でも大晦日仕事で打切り、新年になると元日や二日三日で仕
事にかゝる者はない、何れも屠蘇の機嫌に平生の苦を忘れ、老も若きも暢りと暮ら
すが、その三日に此の釜祭は行はれるのである、當日は夜のまだ明けきらぬ中から

釜祭をする家々にては大きな鏡餅を竈の前に供へ、荒神松に榊を棒げ、一抱へもあ
る大きな柳の木に餅花と稱して、餅を小さく丸めて枝もたわ／＼に着けたものを、大
きな壺に活けて同じく前に据ゑ、又睨み鯛といつて鯛を一対新藁に結び合せたるを
供へるのである、供へもの其他式場の準備が成ると、若者頭がカチ／＼カチ／＼
と拍子木を鳴らすを合圖に、店の者は一同釜の前に敷いた藁の上に着座する、是に
於いてかねて招聘されてゐる神官は勿體振て碀ひにかゝる、それが終ると皆一同に
聲をそろへて『目出度し／＼今年も忙しく沸いて／＼、沸きかへれ——』と唱へる
のだ、夫れが済むと次が三聲の拍子木カチ／＼と鳴る、若者頭の次位にある釜
炊頭が年々いろいろ工夫を凝した社疋を着し、長き竹のさきに橙を刺通したものを
持出して踊る、その状は別に滑稽といふでもなく又壯重といふでもないが舞ひなが
ら『御得意繁昌／＼、御用は富士より山なし、釜はどん／＼焚き出し、目出たい々
々、釜たき目出たい／＼』と歌ふのである、是れにて式は終り、當日招待したお客

を座敷へ案内して大酒宴となるのである。

この日一日は無禮講であつて上下の隔てをしない、飲めや唄へで遊び戯ふるもあれば、また己かしく勝手の事を爲して暮すもあり、夕暮まで何事も忘れて笑ひの聲に動揺めきると、番頭が「お開き」と叫びて、竈の前に供へた大鏡餅を車に乗せ、座敷へ曳き出して來ると、袴に肩衣をかけた扮装のもの大斧を振かぶつて、鏡餅を開き之れを來客に分配するのだ、お客は各自にこの餅を貰ひ千鳥足でヒョロ／＼と歸るもあれば、醉漢を助けて出る下戸もあり、跡は俄に寂寞して大風の吹き止んだやうになるのだ、夫れから當日の祭は店の者の行ふに任せ、假令主人でも一言一句指圖が出来ないのだから、總て式場の飾りつけは素より、御馳走の献立に至るまで店の者が協議によつて成る、當日のみは主人の権力のない事夥だしいのである。

十日戎の寶惠駕籠

(大阪)

大阪で有名な行事である、誰れも知りぬいた處の事であるが、また一の奇風俗であるのだ、戎の社といふは今宮にも堀川にもあつて、共に小さな祠で平常は振り向いて見るものもない、犬の兒すらも影を見せない荒涼さであるが、一月十日の祭日は十日戎といつて怪我人のある程の繁昌、ことに其の前後も九日の夜は宵戎と云ひて參詣する、十一日の朝は残り福と云ひて慾の深い連中が出懸けるも面白いでないか、一寸東京の酉の市に類して一層賑かなのである。

この社での賣物は、箕につけたるお多福の面、二つ結びし大俵で、女童の片言交りに謠ふ十日戎の歌は、この情景をよく言ひ盡して餘りなした、即ち「鯛はせ袋、とり鉢、錢がます、小判に金箱、立烏帽子、入れ樹財布、東熨斗、笹をかついで千鳥足」とは誰れが言ひ始めたのであらうか、兎に角慾が先頭に立つてお參りをする神様、其の身が一年中の幸運を頼みまゐらす戎様を、何たることだ龔にして退け、龔戎といふさへ罰當りの囃言であるのに、思ひ／＼に勝手三昧の熱を吹き出して

眞つ正面から拜んだばかりでは空耳走らせ、己れは聾だよと云れては詰らないと、何でも勘定高い大阪人の氣質だとして、之れを心元なしと態々社の裏手へまはり、ドン／＼ドン／＼社の羽目を敲いて、小さな節穴から中を覗きこみつゝ、「お戎さん、お戎さん、來ましたせ、よう覺えて、下されや」と念を押して往く者もあると聞く。其の賑ひは大阪第一であると云ふ。

この日その雑踏の中へ寶惠駕籠といふものが出る、之れが一層にその雑踏を盛んにする大阪名代のものだ、寶惠駕籠とは島の内難波新地の藝子どもが、飾り立てた駕籠に乗つて今宮の戎へ參詣する駕籠の名である、是れは何時の頃から始つたのか更に解らない、そして何者の創始になつたのか夫れも解らないのだが、言ひ傳へてゐる處では寶永年間、堂島南中町にあつた妓樓を曾根崎邊に移した時、遊廓が邊鄙になつたから自から人氣も落ちたので、人氣を集めて土地の繁昌を圖るためにと、垂駕籠の垂れを外して屋根より柱までを紅白の絹で綾どり、美しく仕立た上に晴の

衣裳を着た遊女を載せ、天満天神へ參詣した廣告的手段の遺風が、今の十日戎と變じて今日の隆盛な行事の一つと成つたのである、此の説が確か何うか知らないが先づ斯う云つてゐるのだ。

處で今の寶惠駕籠といふものゝ大袈裟なことは一通りでない、之れに乗る藝子は先づ白襟黒紋附が普通で、素より延喜を貴ぶ彼れ等社會の事であるから、早く參詣すれば夫れだけ幸福が餘計に占められ、利運が澤山に得られるとして、早きを競ふて參詣する風習があるのだ、そこで第一番に參詣したのを一番駕籠と云ひ、彼れ等の最も名譽とするところで「今年が一番駕籠としたせ」と自慢の鼻を高くするものだ、この駕籠には棒の先きに引綱といつて、紅と白と淺黄の三筋の縮緬を結びつけ、揃ひの法被を着た幫間や、樓中の若者が數十人、同じ染色の手拭を打ち振り／＼して曳綱を曳くのである、駕籠を遣るにも宙を飛して駆抜けるのでなく、要するに其の乗人の全盛を街ふが目的であるから、お練でそろ／＼歩いて何處の何某といふ廣告

を旨としてゐる、であるので曳綱を引張るにも音頭取りがゐて、一曳きしては音頭
を取ると、一同が異口同音に「寶惠駕籠ホイ、寶惠駕籠ホイ」と叫びつゝ躍り狂ふて
参詣する、之れを五十挺倍しと云ふのである、昔日は長襦袢一つになつて駕籠に跨
り、行く／＼蜜柑などを撒き散らした奇抜なものもあつたさうだが、今はそんなのは
無い眞面目一方で、この寶惠駕籠に乗る藝子は中々尋常では出来ない、餘程よい後
援者がないと不可能である、二番駕籠といふも三番駕籠と云ふも、全盛を街ふさま
は更に變りはない、兎に角素張しい勢ひで大坂以外には見られない、一風變つたお
祭りである。

筑摩の鍋女

(近江)

筑摩の鍋祭りと云つて古來名高いものだ、瀧澤馬琴の歳事記にもあり、俳諧の題
にもあつて昔は再婚の女は二枚の鍋をかぶり、三婚の女は三枚の鍋をかぶり、神幸

のお供をしたさうであつたが、今は八九歳の少女が鍋女を勤めてゐる、其の祭禮は
何處であるか、近江國坂田郡入江村大字淺妻筑摩の鍋祭りであるのだ。
歳事記には四月一日或は四月午の日とあるが、今は毎年五月八日の午後四時頃拍
子木の合圖に、此の有名な神事は行はれるのである、之れに携はる行列のお供一同
は、村の北端なる御旅所に集つて繰出す順序は、第一番が神劔十本、第二番が太鼓
四個、第三番が金棒曳十五人、第四番が上多良村山法師五人、第五番が中多良村山
法師五人、第六番が下多良村山法師七人、第七番が筑摩村山法師十二人、第八番が
神女八人、第九番が踊り奴二人、第十番が鍋冠り八人、第十一番が伶人、第十二番
が鳳輦、第十三番が神官、第十四番が曳山である。
今歳事記にあるものを挙げると「近江の國筑摩の庄は大膳職の御厨の地にして、
此の地に御食津の神を祭る、この神は稻食を掌どるに依て、男女婚を爲す時は祭禮
に必ず釜鍋を戴きて神に奉ず、不幸にして少壯の間に寡となるときは、再び嫁する

女もあり、かゝる輩は其鍋二枚を用ゐ、三たび嫁するものは三枚を戴きて神幸に候す云々』とある、是れ鍋女の名の起る處であつて、行列中の山法師といふ各氏子の村々から、七八歳の男子をして勤めさせるのである、其の扮装は何れも大柄の襦袢布子に白縮緬の袴を十字に斐どり、白の手覆に紺の脚絆をつけ、重ね草鞋を穿いた極めて小間しやくれた姿で、それに薙刀または錫杖などを突き、顔は假面のやうに白粉を濃く塗り、尚ほ青髭をかくもの、黒髭を殿めしく飾るもの、或ひは奴髭の頓興なるさまなどを描き、向ふ鉢巻をして母衣を脊負てゐるのだ、母衣は昔の陣中に用ひたものと同じ形であるが、此の祭禮には繻珍あるひは緞子の女帯二筋を交又して、白縮緬の腰帯で結びつけてゐるのだ、是れに一本の旗と紙製の花の枝數本を配置してある、お祭の母衣に女帯を用ふるもまた面白くないか。

また同じ行列に出る神女と云ふは御神子のことで、俗に之れをハシコウと稱へてゐるのだ、尚ほ踊り奴といふは兩掛持であつて、二人相並んで最も滑稽な足取りで

歩き、見物を笑はす道化形で、古くはこの踊り奴と稱ふるものは無かつたさうである、何でも近世に加へたもので、壯嚴の行列中には相應しからぬやうである。

また此の祭禮に古來から名物となつてゐる鍋かぶり、即ち筑摩の鍋女は、往年花嫁さんが鍋をかぶつて羞しさうに出たものであつたが、今は七歳八歳ぐらゐの少女と變つた、それは最う大分古いことである、近世この村では少女が八歳になると、必ずこの鍋女に出る習慣で、貴賤の別なく一度は此の役を勤めるを名譽とし、又義務としてゐるのだ、其の衣裳は古いところを見ると、白小袖に白繪子の前帯を締め鍋をかぶつたものゝやうであるけれど、近世の姿は大に相違してゐる、即ち赤い小袖の上に萌黄色の水干を着し、緋の縫模様ある裾袴をはき、手に扇を持ちゐるもの、八人出づる定めである、其の被るところの鍋も昔は眞物の鍋を被つたのであるが、今では紙でこさへた張子の鍋で、四人は角のない鍋をかぶり、四人は角のある鍋をかぶる事になつて居る、そして此の鍋被りに出るものは毎年四月八日、神官が玉串

を神前に捧げて人撰する、指名された子女は此日より神聖犯すべからざるものとして、一家これを尊重し父兄でも苟くもしない、家人とは一切別扱ひをなし精進潔齋して、當日行列に加はるのだと云ふことである。

袖米乞食 (丹波)

これもまた一種の奇風俗である、何れの地方にても死者に對する回向供養は、大抵懇ろにするは總ての人情であるが、丹波地方に於ける供養の仕方はまた格別に異なるものがある、先づ一家に死者があるとすると、其の長幼老若について無論取扱ひの相違のあるべきは知れた事だが、一家中に於いて親の死するに當つて、其の子が乞食をせねばならぬと云ふ奇風があるのだ。

葬式等は格別に變つた事もなく、初七日を最初として三七日、五七日と時々勤めは懇ろにする、扱て七々日、即ち四十九日の晩は子たるもの、勤めは實に意外で

ある、それが土地の風習であるから、誰れも怪しみもせずまた夫れを孝子とも云はない、之れをしなければ世間並に世渡りが出来ない、人より爪弾きされて交際してくれる者が無くなるのだ、意外な勤めとして何様ことをするのか、死んだ佛の子が乞食に出るのである、如何に物持の息子で家に萬金を積み、多くの奴婢を使ひ旦那様と云はれてゐるものでも、親に對する最後の勤めとして乞食をせねばならぬのである、是れに出るものは四五十の人もあれば、或ひは十歳以下の小供もある、只だ男子ばかりの義務でない女でも親に對する此の最後の勤めは辭すことが出来ない、常に深窓に閉籠つて人に顔を見られた事のない者でも、此の場合には乞食となつて他人の門口に立たねばならぬのである。

昔は中々喧しい習慣があつて、着衣とてもボロ／＼した物を着し、一見眞の乞食と均しい服装をして出なければ成らなかつた、そして他人の門口に立つて「何うぞ袖米をやつておくんさい」と哀れつばく乞はねば成らなかつたのである、決して

人をして代理させることは許さぬ、斯くの如きことをするは死んだ親に對する不孝となり、亡者も浮ばれずして地獄へ落ち、奈落の責めを受けて何時までも苦しみ、阿鼻叫喚の修羅の巷に迷ふと言ひ慣はしてあるのだ、如何に習慣風俗とは云へども身に襦袢を纏ひ、他人の門口に立つは男子といへども容易の業でない、況して妙齡の婦人に於いてをやだ、然れどもイザと成れば是非ない譯で、資産ある家のものでも貧乏人の娘でも、幾百年から遣り來つたのであるが、今でも其の習慣は廢らないで行つてゐるけれど、昔のやうに服装などは喧ましくは言はない、只だ形式にのみ止まつてゐるやうである。

されど資産家の息子でも令嬢でも、其の場合には出は出るものゝ、親類とか又は懇意な家とかを指して行くので、決して縁故なき他人の門口に立つて「袖米をおくんなさい」と云ふことは全然無くなつた、行くものゝ方でも來られる者の方でも豫め解つてゐることで、男にしても女にしても極めて質素な扮装をなし、問ふべき家

をかねて通じおき、コン／＼と其の家へ入つて「袖米をおくんなさい」と口の内でも何でもよい、聞えやうが聞えまいがグ／＼と云へば、來られる方では最う來さうな時分と待つてゐるのだから、足音がすると整然用意をして控へてゐるのだ、ソリヤお出なしたと佛壇へ供へる茶碗に米を盛つて、態と破つておく障子の穴から出してくれる、外に待つてゐる者は之れを袖口から受けて貰ひ、直ぐまた次の家へ出懸ける、其處でも用意は整つてゐる、又初めの如くして茶碗に一杯の米を貰ひつゝ、何うしても三軒以上は廻らねばならぬので、大抵三軒を廻り了るとホツト息を吐いて駈歸る、袖口より受けるので此の米を袖米と云ふのだが、さて之れを何うするかと云ふに、此の苦心を忍んで貰ひ集めた米を炊いて佛壇へ供へると、新しい亡者は其の功力によつて地獄に落ちかけて居るものも救ひ上げられ、極樂へ往きて毎日々々の責苦を免れ、身は佛に均しい光榮を受けるといふ迷信から來てゐるのだが、現代人の目から見ると馬鹿／＼しさの行止りである。

初揚の蛸の足

(攝津)

蛸の足といへば忠臣蔵の芝居で、彼の由良之助が茶屋場でいたいて喰ふ蛸肴を聯想されて來るが、之れは其様架空なことでない、又一種の奇風で面白い習慣であるのだ、攝津の御影町といへば酒造で有名なところ、醸造家が軒を並べて幾百萬の飲酒家を喜ばせ、お内儀さん連をして手古摺らす原料を製造してゐるが、此の地の酒造家に於いて新酒が出来ると初揚げの式といつて、盛んに式を行ふものである。此の初揚げ式といふは、毎年一月下旬から二月月上旬にかけて、新酒の醸造が全く出来ていよいよ賣出しとなる前に行ふ、醸造家に取つては最も愉快に、當年の出來榮を祝ふ式で、何れの家でも盛宴を張つて目出度くと喜ぶ日である、誰れも知ることく清酒は若し出來損ねたら、莫大な損失をして或る場合には資産を傾け、身代を棒に振らねばならぬ事もある、それが無事に醸造が出来て賣り出されるとい

ふは、醸造家に取つて此の上もない目出度い事であるのだ、で其のお目出度を祝つて盛んにお客をして、出來あがつた新清酒を振舞ひ馳走するのである、扱ていよいよ幾日に初揚げの式を行ふとなると、主人は賓客に招待状を出したり使者を走らせたりして、成るべく多くの人を集めるを名譽とし、料理方は二日も三日も前から御馳走の用意にかゝつて、家内中まるで火事場のごとき騒ぎである、斯うして準備萬端を整へ當日となるを待つて居るのだ、當日になると招かれたお客は追々と繰込んで來る、主人は羽織袴にて之れを迎へそれ／＼に設けの席へ請じた上、恭やしく一同に挨拶する、招かれた客よりも今日の喜びを述べて一應の挨拶が済めば、今度は立派な二の膳附きの膳部が敷かれる、主人は是に於いて今年醸造した新酒を自から持ち出し、先づ上席の客より順次に酌をして衆人の鑑定を請ふ、人々は仔細に之れを口中に含みて其の味を見るのだ、上戸は素よりの事であるが、下戸でも利酒といふものはする、そして却つて下戸の方

が利酒をするには上手な者があるとか云へば、お客は何れも去年の新酒と今年の新酒との醸造工合を考へ、味の善し悪しから香氣の可否を論じ、色の濃薄など思ひ々に批評を下して主人の満足を興へる、それが唯だお世辭一遍で結構な出来でございます、誠に好く出来ましたとお座成りを云つて、主人を喜ばせるのみでない、此の鑑定ときは互ひに其の思ふまゝに意見を述べのなさうだ、而して先づ今年も大層よく出来てお目出度うございますと、客は口々に主人へ祝詞を述るのが初揚げ文切形である。

之れが終ると用意してある酒は、藝妓仲居が席上へ運び出して来る、さア是れから盛大な酒宴に移り、座敷は次第に陽氣になつて来れば、笑ひ聲は何處からとなく起つて賑やかになる、三味線の音は承塵の塵を踊らせ、鼓の響きは門外に洩れてますます陽氣になる、上戸も下戸も浮き立つて唄ふものもあれば踊るものもあり、主人は其の間に立つて幹旋を力め、藝妓や仲居は日頃の手腕を現して浮せ立てるので

來客は十二分の歡を盡すが例である、當地で初揚げの式ほど盛んに陽氣な宴會は他に類がないと稱する程の盛況で、豫想以上の大宴會であると云ふ事だ、夫れから此の初揚げ式には何れの家にも、一番初めに出す取肴は必ず蛸の足一切を出すか例となつてゐる、之を出すには何か理由があるのかも知れないが、古くより仕來りになつて居るのなさうだ、唯だこの蛸の足一切の肴を最初に出すと云ふ事が、初揚げ式の折に限る譯でなく、婚禮の式でも開店の祝ひでも又は轉宅新築の披露でも、何でも箇でも祝事に關する宴會には蛸足の肴を第一に出すが、この土地の習慣になつて居るので、祝宴の席にこの肴が出ないと目出度くないやうな感じがするとか、慣例と云ふは又妙なものである。

由良の鐵療附け

(淡路)

如何なる邊鄙までも文化の行き渡つた近時には、野蠻な風習も自然に一掃されて

また昔日の如き事は失せられたれども、猶ほ往々遺風の存して不名譽の標本を示すは歎すべき事である、是れ等も今は其の漸く一洗せんとして弊風も改まつたやうであるが、猶ほ一部分には昔時の野蠻的志想が去らず、吾れも人も怪ますして不面目を行ふは、淡路の由良地方に於ける鐵漿附けである、昔は女が鐵漿を附けたは一般のことで、地方によつては今でも亭主を持つと鐵漿を附ける處もあり、女が鐵漿を附けたとて敢て野蠻だとも一概に言はないけれど、由良地方の鐵漿附けは確かに一の悪弊と云はれるのだ。

由良の港は淡路島の東南端に突起する處である、砲臺を築かれてから繁昌する市街となつて、今では戸數も二千餘ある一小都會のやうに云はれる、由來この土地の女は男子を凌ぐ勢ひがあつて、女ならでは夜も日も足らぬやうに囃されて居る、夫れも亦た無理のないことで女の働きは、實に他國人をして一驚を喫せしめるさうだ、殊に下層に生活する女に至つては其の勞働の程度は、遙かに男子を後に控着せ

しめ、殆んど顔色なきに至らしめるが、夫れが古い習慣であるから土地の者は異としないが、山に行けば柴を刈りる普通の女でも、二十貫から二十五貫位のもは、頭上に戴き悠々鼻唄をうたひて歸つて来る、斯ういふ勞働をして男子を凹まして居るだけ、それだけ其の勢力も凄しいもので、放縱なること他地方の女に見ることの出来ぬものがあるのだ。

是れ等は多く土方や荷擔ぎをする勞働女である、又相應の家庭にある娘のごときに至つても、餘程嚴格な家庭でない限りは、最も忌はしい悪弊の漲ぎつて年頃になると殆んど清淨無垢な、品行方正などの者は一人も無いと云ふ位である、夫れが何様風に墮落し行くかと云へば、若い娘たちは夜遊びに出るを親も許し自分も夜は必ず遊びに出るものと心得てゐる、唯だ夜遊びに出て更行く空に倉皇と歸るのかと思へば、彼れ等の夜遊びは意外の念入りで、三々五々氣の合たる同士隊を組み、町内を放歌し歩くのみならず、情人と手を携へて他家に宿泊するのだ、家では夜更けて

娘の歸らぬときは他に宿泊するものと極め、親たちは平氣の平左で更に意に介せない、猶ほ一層に人を驚かすは年頃になつて情人の一人二人もない者は、此の娘は何とした意氣地なしたらうと、親々が却つて小言を云ふのだとは、開いた口も閉がらない始末である、然ほど墮落して自然主義が行はれても、一日嫁して鐵漿を附けるに於いては、如何なる事があるとも情夫をもち、姦通をするなどの醜行は決してない、何れも貞節を守つて良人に盡すも不思議なやうである。

又娘の中で放縱する時代にも自から制裁はある、娘が一青年と血を燃して戀に落ち、互ひに深く契つてゐながら、又更に他の男と情を通じ密會するとか、或ひは握手して泊り歩きなどする事が曝露したり、或ひは一旦情を交へながら理由なく破約する場合には、其の青年は朋友を頼みて一團と成り、娘の家へ不意に闖入して父兄の支へるをも構はず、無理無體に引き摺り出して擔ぎ來たり、常に泊りたる家とか又は知己の許とかにて、否やも應も言さず鐵漿を附けさせるのである、此の場合に

なつては娘も拒むことが出来ない、さうして青年の方に猶ほその娘に未練の執着して居れば、其の儘止めおいて父兄へ懸け合ひて妻にするのである、又意地擔ぎと稱して娘の筋合の悪いとき、或ひは嫉妬の嵩みて可愛さ餘つて憎さが百倍と云ふ時の如きは、矢張り前のやうにして擔ぎ出し、無理に鐵漿を含ました後追つ放して歸宅さする事もある、此の意地擔ぎに逢つては一代の不名譽とされ、之れを疵娘と呼びて一般から輕蔑されるので意地擔ぎに逢ないやうに心懸けるさうだ。

國府宮の裸體祭

(尾張)

「國府宮祭り取り徳、取られ損」と云ふことが、尾張國中島郡の俚諺にあつて近國へ聞えた野蠻な祭事がある、祭日は陰曆正月十三日、寒風ヒュー／＼と吹き荒る、頃で、白木綿一反を腹巻にして禪一貫の裸男が、ヨイシヨ／＼と掛聲勇ましく國府宮の社前に集るのだ、唯だ集合するのみならず、各自にポカリ／＼社前を流

れる大江川へ飛込み、寒いさむい最中に水垢離を取つて、其身に負はる當年の厄を拂ふと云ふ迷信である、是れを儼迫人と云つてゐる。

神社の方には又儼負人と稱する犠牲になつて、萬人の厄を一身に背負て立つ殊勝な人物がある、之れは自から望んで儼負人に立つのでない、誰れだつて他人の厄まで背負て立つのは厭である、頼まれても御免被りたいは人情であるが、其處にはまた村内に舊い約束があつて、其年四十二の厄に當つた屈竟の男を選び、否も應もななく犠牲に擧げて了ふのだ、この迷惑極る犠牲に擧つた男は、三七日前より宮司の許で、淨火で煮焚したものを喰ひ、一切の不淨を身邊に近づけず潔齋し、祭りの前夜即ち十二日の夜社殿にて修禊をうけた後、境内にある儼負堂に入られて一夜を明かし、翌朝になると若者に護衛せられて、幾千となく集まる儼迫人の群中に投せられる。

之れを待受る裸一貫の若者はヨイシヨ〜と、一時にドット推寄せ儼負人の手で

も足でも、身體の何れの處にでも、手さへ觸るれば當年の厄が逃れると云ふのだから、其の騒ぎは大變なものである、で、儼負人は大勢な人々に觸られても痛みを感じないやうに、豫ねて用意をして、頭髮は素より腋の下の毛も〇〇の毛まで残らず剃落してゐるけれど、何千となき若者に翻弄されるのだから堪つたものでない、右の方へ引張られてグラ〜と轉げさうになれば、ヨイシヨ〜の掛聲して左の方へ引き仆され、自分の身體は立つてゐるのやら、轉がつて居るのやら解らず、前後に揉まれ左右に押し仆されしつゝ、或る時は人頭の上に横臥し、或る時は大勢に踏み

にぢられて生命から〜である。
斯くの如くして群集に翻弄され、一切の厄難を一身に頂戴した儼負人は、漸く神前へ擔ぎ込まれる時は、最う身體もヘト〜になりて、如何に強健な男にても殆んど半死半生の有様にて、總ての知覺を失ふて只だ自分は夢でも見てゐる如く、フラフラとして何の考へもなく、歩くともなく坐るともなく、ポツとして了つてゐるが

神前にあつて休息すれば稍や人心地つき、儼負堂を出でしよりの事を追懐すると、轉た怖ろしき感じに包まれて、吾れ知らずブル／＼と身軀を生ずるに至るさうである、而して深夜寂寞として萬籟音なき頃、漸く明きの方に向つて放たるのでありと云ふ、此の役廻りに當つた者の迷惑は思ふべしである。
處でこの推寄せて來る裸一貫の若者等は、凡そ一定の場所より外へ出ることを許さない慣例になつてゐるが、此の行事を見物せんとて集るものは、混雜極りない中に帽子を被り襟巻を爲す者、また手拭の頬冠り、頭巾など被る者あれば、誰れ彼れの容赦なく若者が飛び掛つて、ヨイシヨイの聲勇ましく奪ひ取るのだ、之れを取られても抵抗するを許さず、怒り争ふを許さないから即ち「取り徳、取られ損」の俚諺を生ずるのである、で、中には取られるを承知で、態と襟巻を爲し行きて取られ又手拭を被り行きて奪はれる男女もある、是れ等はその取られたものに厄を塗り付け、自分の厄を落したりと喜び嬉しがるのだ、そして此の神事も維新前までは裸一

貫の若者に抜刀を許してあつたので、必ず祭禮ごとに怪我人を生じたさうである、明治以後は抜刀は嚴禁し、且つ近頃は裸體も許されないやうになつて、奇抜な趣きは薄くなつたけれども、猶ほ昔日の面影は止まつて野蠻的風俗の間に、一種不可思議なる味を保つてゐる。

元日の朝参り (越後)

越後國蒲原郡邊にては一月元旦の未明に鎮守の神に参詣する風俗がある、是れは男子の受持ちであつて、七歳以上になると此の慣例を行はねばならないのだ、寒中の朝まだ夜の明けない身を切るやうな寒い／＼風をうけ、凍てつく雪を踏んで参詣するは随分難儀だ、それも血氣壯んな若い者なら左程にも思ふまいが、まだ年齢もいかぬ小兒や老人も、男子たる以上は此の行事に参加しなければ成らぬのだから、中々苦しいであらうと都會の人士は想像するが、彼れ等は却つて平氣に例年の勤め

として遣る、而も雪は卅巴と降りしきる中なども、簑笠を身に纏ひて一部落の者が相助け相勵みて参詣するのだ、一人や二人でテク〜出懸けるのでは、如何に雪に馴れ巖丈に鍛へあげた地方人でも、辟易するであらうが多数の力で勵ましあふから左して苦にもならず雪中も厭はないで、老人小兒までが勢ひよく出懸けるのだと云ふ。

此の朝参りは尤も早いので、元日の朝はその家に使はれる奴僕や下婢は、午前三時を打つと起きて出て支度する、東京などになると大晦日の夜は大抵寝ない家が、多い、午前三時はまだ宵のやうな気がして掛取りが弓張提灯を提げ、何うかお拂ひをと来る時刻であるけれど、田舎へ行くとは其様ことはない、大晦日も夜更しをして居ないので、召仕ひも一睡の夢に入るのだが、漸く身體の温まる三時には最う起きるのである、奉公人に續いて家内の者は小兒に至るまで四時には起きる、そして女どもは食物の調理にかゝるのである、けれども此の土地は三ケ日の間は一切の掃

除をしない、食物の如きも其の時に煮炊せねばならぬ物の外は、大晦日に三ケ日の食物を調理して置く習慣だから、それは極めて簡単であつて手数は懸らない、男子が朝参りをする前にお雑煮を祝ふのでない、歸つてから一家揃ふて雑煮を祝ふのだから、寛々と調理をすれば宜いのである。

前にも云ふ通り男子は七歳以上のものは、若い者でも老人でも一家の者は擧つて氏神詣をする、主人は羽織を着袴をはきてチャンと支度が出来る、傭人は賽物といつて、お供、御神酒、賽銭、蠟燭の四品を携へ、小兒でも老人でも禮服を所持する者は、皆それを着飾つて暗を突いて、寒い朝風に吹き曝されて出るのだ、片田舎の事であるから一部落は二十戸ある處もあれば、又三十戸のところもある、又小字などになると二三戸より無い處もあれば七八戸ある處もあつて散在してゐる、で、氏神は多く山腹か原野などにあるので、民家と隔たつて居る、末社は各部落に散在して六七社乃至十二三社、または二十社以上に至る處もある、之れへ参詣するには一

部落の者は一定の場所へ寄り、隊を組んで参詣するのだが雪國の事ではあり、寒威猛烈であるから防寒の用意はまた嚴重である、ハイカラ側になると外套を着るが、多くは蓑や蓑帽子といつて萱またはクゴで編た帽子の下に蓑の附たもの、徳萬帽子と云つて棕櫚の皮または藁で造つたものを被る、足には何れも股引をはき深靴といひ藁にて造くる雪にはく長靴をはくのだ、例年この頃には雪は二尺より三尺積つて野も山も田も畑も、チヨロ／＼流の小川に至るまで雪に埋り白皚々たる銀世界だ、それにも何處も結氷してゐるから氏神へ一直線に雪の上を歩いて行けるので、案外近く幾組も／＼雪中に點々と黒き影を動かして進み、鎮守の社頭に行くと古松老杉亭々として寂々たる、晝も小暗き社殿も今朝ばかり幾百となき蠟燭の光明に、煌々として白晝の如く輝きて神々しい、各部落から我れも／＼と参詣する村民の踵は續きて織るやうだ、そこで持参した御供、御神酒、お賽銭、蠟燭を點して燈明を捧げ一拜し了ると、今度は末社を拜し歸宅すると直ぐ家内に祀る神様にお詣りをして、是れ

から家内一同打ち寄つて元日の雑煮を祝ふのである。

御田踊り (紀伊)

紀伊國有田郡八花園村の梁瀬、北寺などでは、毎年舊曆正月に御田と云ふ雑樂を行ふのである、主な踊り手は智と舅の二人であるが、其の外に田刈一人、田植子五人、太鼓打一人、笛吹一人、牛一人、巫子一人、座持十人、晝飯持一人で組織されてゐるのだ、そして踊りは春田打ちから水向け、牛呼び、牛洗ひ、肥さがし、苗代踏み、祝詞、種蒔き、水干し、福女踊り、智舅のあらそひ、田植、神祭り、田刈り、稻こき、粃すりまで農家一年中の行事を真似、その年の五穀豊熟を祈るのである、口碑に傳へるところでは京都から来たものだといつてゐる、そして其の起因は餘ほど古いやうである、舅、智、田刈の服装は頭に納豆烏帽子を被り、鍔直衣のやうなものを着け、袴は高く括つて白足袋をはき、白の手襷を十文字に斐どり、腰に

は鍔のない脇差をさしてゐる、また顔や手足は白粉をぬり木製の鍬を以つて踊るのだ、尚ほ田植子は女の風で色の花やかな打掛を着て花笠を被る、花笠は普通の菅笠であるが縁に青赤白の三色に染め分けた、長さ三尺位で幅四五分の四手を垂れ、笠の上には椿や菊の美しい造花を三本つける、又晝飯持は村内の最も美男が女服を着て丸帯をお太鼓に結び、頭には鬘をつけて簪をさし緋の鉢巻をするのだ、その他は變つた風もして居ないのである、是れ等が踊るさまは奇觀で見物が群集する。

又この御田の舉行される夜、踊り手の支度する中に裸苗と云ふ行事がある、若者にて行はれ昔は裸體であつたが今は襦袢を着てゐるが、一人の音頭取り太鼓を打ちて踊歌を唄ふと、一同がエーヤトウ〜と始めは緩く後は早口に唱へ、鎮守の社殿を圓く押し廻るが、此の時見物人から悪口雑言を浴びせかけられ、随分口汚なく罵るも構はないけれど、只だ盗みをしたと云ふ事だけは絶対に禁じてある、當地方では悪口することをコナスと云ふ處から、御田の時十分にコナシて置くと秋にな

つて、コナシが多いと夫れで悪口を盛んにするのだと云ふ、米や麥を收穫して粃にする事をコナスと云ふ處から來た風習である。

又同國山保田といふ地方にて行はれる御田踊りは、一寸前のは行き方が違つてゐるから訝である、此處では毎年舊正月九日行ふことで、前の年の正月十日以後に生れた小兒を連れて氏神に參詣するのだ、其の行列が極めて妙で餘ほど面白い、先づ行列の眞つ先には氏神の社名を墨くろく〜と認めた幟を、高く差し上げて持たせ、次には神社の神主が仔細らしく幣束を捧げて静々と歩む、次には太鼓を叩くものがドーンドーンと打ち鳴らして行く、次に美しい造花を捧げるもの、其の後に去年の正月十日以後今年の九日までに生れた小兒を背負するもの、その附添人たちが盛装して従ふ、續いて一家のもの親戚や知己が大勢列を亂さず宮參りをする、途中は太鼓の拍子に連れて、互ひに聲をそろへて唄ふ歌は「熊野山きり部か王子の櫛の花、よろづの人の笠のうはざし、ソヨナ」と囃し了れば、また朗々と歌ひ出して「白

驚のとまりは何處ぞ、八幡山岩瀬の下な若松の枝、ソヨナ」と云へば「同がソヨナ
く」と囃し、また「この寺の簾にかけたる角鏡、曇りはらして御覽せよ、ソヨナ」
と唄へば太鼓は之れに合せて調子を取り練り行くのだから、途中は兩側に一杯の人
垣をつくつて見物する程で、何處の宮詣りは立派であるとか、彼處のは唄のうたひ
方が拙かつたとか、思ひ／＼に評してドツと笑ひ狂ふのだ、此の一行が氏神の社に
着くと、暫らく休息した上で今度は御田踊りをやる、之れは無論自分等が行ふので
ない、夫れ専門に踊るものがあつて神諫めに奏するので、花笠を戴けるものと、鋤
や鍬などを以て出るものが數人集つて踊るのだが、有田邊に行はれるものとは餘程
簡單である。

亥の子まんてんしよ

(阿波)

陰曆十月の亥の子には地方により、種々の變つた風俗があるやうだが、阿波國海

部郡牟岐村地方には、餘り類のない古習が遺つてゐる、新しい空氣の通ふことの遅
いだけに、今だに古い習慣が行はれてゐるのは面白い、此の土地では亥の日は十月
の中に二度あることゝ、三度あることゝあるが、今假りに三度あるものとして牟岐
村地方の習慣を説明すると、同地方には其の職業によつて亥の子を祝ふ日が異ふ
のも妙だ、そして最初の亥の日を本と云ひ、中の亥の日を中と云ひ、後の亥の日を
末と云つてゐる、之れを祝ふのに各自の職業に従つて祝ふ日が定まつてゐる、例へ
ば農夫は稻の根と穂を祝ふ心で、本と末則ち初めと末の亥の日を取る、商人は資本
の意にて中の亥の日を取り、漁夫は網の中また釣の先と云ふ意から、中と末の亥の
日を取るやうに日を決めるのだ、而して其の祝ふべき亥の日には供物と祝食として
餅や牡丹餅や何でも各自の好むところの御馳走をこさへる、小豆飯に大根膾と柚は
必ず一般にこしらへる。

此の亥の子の日の夜になるや、子供または若い者は各々一團を爲して、各戸毎に

立つて『亥の子石』と云ひ、地盤固めの石のやうなものに幾筋かの繩を結びある物を携へ、ドシン／＼と地響きのするほど搗き鳴らし、拍子を取つて唄をうたひ、餅や牡丹餅を貰ふて歩く奇習がある、夫れが乞食やなんぞの賤しい身分でない、立派な家の息子でも餅貰ひをして歩いて平氣である、處でこの一團がある一軒の家の前に行くと、其の中の一人が先づ口を切つて「一つ祝ひまんてんしよ」と云ふ、蓋し亥の子を祝ふとの義である、すると家よりは「祝へ／＼」と挨拶をするのだ、是に於いて一團の音頭取りとも云ふべき者が、聲を張り揚げて「うれし目出度の若松さんへ」と謠ふと、他の一同が之れに和して同じ文句を繰返して囃し立てる、すると音頭取りが美聲を發して「枝も榮えて葉もしげる」と云ふ、一同がまた繰返して囃し立てる「いよのーひやうたんえ、は、えいと／＼」と云ふを一曲の了りとする、最も唄はいろ／＼あつて長いのも短かいのも澤山あるやうだが、只だお目出度のと笑止いのとの二種で、節には一種獨特の妙味がある。

初め一つ祝ひまんてんしよと言ひ入れたとき、祝へ／＼と來れば何の仔細もないが、家に由ると之れを拒絶することがある、左様すると悪口雑言が始まる、若し平生快からず思はるゝ家などでは堪るものでない、罵詈譎殆んど停止する處を知らずと云ふさまである、一團は少なくとも五人六人、多いのになると三十人四十人の大團隊もあるのだ、其様連中にかゝつたら如何なる者でも辟易する、又小供團になると無邪氣で至極笑止いのもある、吝嗇の何のと云ふ意味でなく、悪洒落をする人などは、子供團をして散々謠はせおきながら、態と禮物を與へない事があつたり、又は悪戯に丸い石や土餅などを掴ませて、ハ、ハ、と笑ふ事がある、小供たちは悪戯をされた忌々し紛れに、一同聲を揃へて悪口する其の言葉が無邪氣だ、即ち「餅くれん家は、鬼生け、蛇生け、角の生えたる子生け」と叫び行く、呪咀も斯うなつては笑止く聞えて罪がない。

何れにしても目出度謠ひ了ると、家内からは餅と牡丹餅を恭々しく朱塗とか黒塗

とかの盆に盛り捧げ出るので、斯うなると妙なもので土地の風習でも、元來物乞が目的でないから、之れを貰ふと云ふ事が氣羞かしく、大抵は逡巡みして「おいお前行きな、いや貴様行け」と譲り合ふが例である、併し出したものを貰はなかつたら反對に叱られるので、順番に顔を隠してソツト袖を出し「はい、何うぞこゝへ」といふ始末である、此の村では年頃になり若者連中に入れば、素封家の息子でも水呑百姓の伴でも、名主の坊ちやんでも必らず二度や三度は、此の亥の日のまんてんしよに出なければ成らぬのださうな。

○ 掃除日の墨塗り (下總)

辨天様で名高い下總國東葛飾郡富勢と云ふ處に、一寸變つた習慣がある、それは村内の若衆連が集合して銘々に庭の掃除をした後で、酒盛を開いて村内で智養子になつた男の顔へ墨を塗るのだ、婚禮のとき智様や花嫁の顔に墨を塗り、又は祝ひ事

のあるとき墨を塗ると云ふ習俗は、地方によくある例で之れも亦た其の奇習の一つである。

富勢村にてお智さんの顔に墨を塗るには、少々手数の掛つた遣り方で中々念が入つてゐる、此の村では毎年二月十六日「持寺」と云つて、年寄連中が寄つて念佛を唱ふる事があつて、随分盛んなものであるが、其の翌日即ち十七日は若衆連が、一年中待ちかねて羽を延して歡樂に耽ける「掃除日」である、掃除日とは如何なる事をするのかと云へば、此の日になると朝早くより、村の若衆が大勢集つて庭の掃除をする、當日集合する處の家は勿論、その外各自の庭なども朝のうち手まはしよく帚ではくもの塵取で塵埃を運ぶものや熊手のやうのもので掻み集めるものなど、夫れ／＼手分けをして大勢で遣るから、大抵朝のうちに村内の掃除は清潔に出来たのである、掃除が出来たと成ると若衆はバラ／＼家に歸つて、さア午後からが楽しい骨休めだと支度にかゝる。

いよいよ午後に成れば若衆連はゾロゾロ出直して来る、そして酒の用意をして夫れ／＼座に着くのだが、何しろ大勢の事であるから左右に居流れて、酒の持ち出されるを片唾を呑んで控へる、此の時當日の世話役と云つて村内での口利、まア若衆頭とでも云ふべきものが、幹事役の若衆を指圖して黒塗の大きな椀を二個、臺に載せて其の場へ持ち出し席の中央に置いて引き退がる、續いて銚子を運び出す順序と成るのだ、何を云ふにも大きな椀に酒を汲ぐのだから、小さな徳利などでは間に合ない、銚子と云つても一升入りとか二升入りとか云ふやうな大きなものだ、是れ等の道具はチャンと備へてあるので、先づ是れも真中に一時置くを合圖に、世話役が簡單の挨拶をして、其のお椀の盃は一個は右側、一個は左側と云ふやうに上席より順次廻しはじめ、何が扱て咽喉をグビ／＼云して待つてゐる處だ、最初の者が椀をうけ浪々と酒をつがし、舌打ち鳴らしてグツと飲み乾して次へまはす、次の者も同じく飲んで次へ／＼と廻つて、一順酒がまはつた時に末座にゐる者が、ツ、ド立

つて豫て作り設けてある、張子の三尺ぐらゐもある大松茸と榊の葉をいれた籠を席上へ持ち出し、自から唄をうたひつゝ隠し藪の踊りを一ツ二ツ踊る、その唄は何でも勝手な物でよいのだ、踊りが終つて元の座に復ると、今度は盛上げと稱して末座から例の椀で酒を呑み始め、漸次上座へ廻して首席の者が其の盃を受け、飲み終つて下へ置けば左右の側から誰れでも構はず、席を立ちて出で前の如く唄ひ踊るのである。

この二度目の踊りが始まる時、去年の二月より此の方、嫁を迎へたものか、聲入りをした者かあると、其の男は忽ち大勢のものに押へ付られて、顔に墨くろくろと塗られるのだ、其の場合は逃げる事も何うすることも出来ない、そして此の席では墨を塗られることを覺悟して來てゐるので、抵抗する者もないさうである、只だ墨を塗られるばかりでない、御念の入つたことには、其の墨を塗られた者の花嫁を引張つて來て、亭主の顔の眞黒に成つた處を見せ、ドット一囃しはやして笑ふ、

大抵の花嫁は顔を眞赤にして早々逃げ出してしまふ、其の次は三度目に腕が左右に廻り終ると、べといふ拍子をして當日の世話役を座敷の眞中で胴揚げにする、これにて當日の式は終るので、跡は無禮講の飲めや謠へやの大騒ぎとなり、夜の更けるも知らず遊び狂ふのである。

蛇穴の汁掛け

(大和)

地方の神事には随分面白いのがある、是れ等も確かに其の一到に數ふことが出来る、村内の者が一張羅の着物を着飾つて、鎮守様へ參詣すると、味噌汁を頭から掛けられて着物を汚し、女どもは正月とお祭にしか結はない大切な島田髷に浴び、べンを搔くかと思ひきや却つて之れを喜ぶ奇風がある。

それは大和國南葛城郡秋津村蛇穴と云ふ所で、毎年陰曆五月五日に行はるゝ汁掛け祭である、此日其の村の重立ちたる家にては、三斗三升三合の味噌汁をこしらへ、

村中の小供をお客にして振舞ふ、此の座敷には鋤や鍬やその他農業に用ふるところの種々の道具を處狭きまでに並べ飾るを例とする、さて此處へ招かれて来た小供は、鰹腹味噌汁の御馳走になつた上、自分の喰つた箸を互ひに投つて當て合ひをする、其の騒ぎの無邪氣なること狼藉なること一通りでない、それが一段落つくと今度は、小供等が並べてある農具を手當り次第、奪ひ合つて擔ぎ逃げ出すのである、そして其の持出した農具は皆小供の物として了ふのだ、素より小供の奪ひ取るに任せであるのだ。

是れさへ一寸變つた風習であるに、又神社に於いて一層奇抜な習慣がある、當日の祭禮には村内の若者は豫め、周圍三尺丈十間餘の蛇を、柴を束ねて造りおき、之れを村中引き廻して後鎮守なる野口神社へ持ち行き、柴の蛇にて社を取り巻くを合圖に、村内の小供は男でも女でも皆あわてゝバラ／＼他村に逃出すのだ、この時一方では社の前に味噌汁を入れた、四斗樽をエツサ／＼エツサ／＼と若者が擔ぎ來て

五六本となるや残らず鏡をぬきて蓋を開ける、ワット云ふ聲と共に參詣の群集は犇々と其の周圍に寄つて来る、味噌汁の樽を守つてゐる若者は、程を見計らつて手に腕を持つて味噌汁を、群集の中へザブリと撒くと、頭から汁をかけられてペド〜になり、雫のボタ〜垂れ小鼻を傳ひて口のあたりへ流れ来るを、舌甜づりしつゝ前に進むもあり、また仕立おろしの着物を穢されて汚染のつくをも厭はないで、ワイ〜と騒ぎつゝ勇み喜び、その汁の餘計に掛けられた者ほど、身體が健康になつて悪事災難を逃れると云ふ迷信から來るのである、此の味噌汁を掛けられる爲めに遠きは二三里もある處より、態々着物を汚しに出て來る律義者もあるさうだ。

この汁掛けが濟むと神官はそれ〜の式を了りて、當日の神事を執り行ふうち、若者は他村に逃げ往きし小供を迎ひに赴き、大勢をぞろ〜引連れて歸村すれば、あとは賑やかに太鼓の音勇ましく村の祭となるのだが、此の神事には斯ういふ起因

がある。

此の村は元二室と云つて一寒村であつた、昔々村内豪家の一人娘が役の行者に戀をした、ヤイノ〜を極めたが行者は之れに應じない、娘はよくある奴可愛さ餘つて憎さが百倍とかで、戀のかなはぬ腹癒せに行者を取り殺すと大蛇になる、行者は法力でこれを井中に封じ込めた、で蛇の穴と書いてサラギと讀むのだと云ひ傳へられてゐる、此の祭禮に大蛇を出すは斯うした縁故に因ると云ひ、又味噌汁をかけるに就ては之れも傳説がある、曰く豪家の娘が行者に戀をして、毎日〜化粧して口説き立てるとき、極めて率直な下男があつて『お嬢さん〜、貴女が幾干行者に惚れなしても駄目だ、行者さんは女嫌ひだからウンとは云ひつこなしさ、夫れに貴女の容貌ではなアお氣の毒ながら思ひ切つしやれ、とても嫁つ子には成れますまい』と齒に衣させぬ意見をしたを、娘は大層怒つて側にあつた味噌汁を取るより、下男

の頭から浴びせかけたが、此の下男は村内で健康者の手本とされてゐた處から、何

時の頃よりか祭禮のとき味噌汁を参詣の者にかけて、汁掛祭と稱するに至つたのだと云ふ。

宮崎の玉せり (筑前)

筑前國粕屋郡箱崎に鎮座ある宮崎八幡宮に玉取祭と云ふのがある、土地のものは方言に玉せりと云つてゐるが、玉を糶合ふの義である、此の祭事は大古から傳へ來たもので、社傳に據ると毎年正月三日宮崎八幡の神前に石で造つた玉を備へ、之れを本宮から五丁隔つた末社惠比須社へ持出し、参詣人に授けんとするを打集ひたる數千人が、我れ先に取り得んと押合ひ揉合ひ、競ひとりて其の年の運氣を開かんと祈つたものである、此の祭事の古く傳はつた事は當宮の敷地に、玉田と云ふ田地残るも當時祭禮の料に供せられたもので、今現に行はれてゐる玉取祭の式もそれによつて居るのである。

現今の玉取祭に用ひられてゐる處の珠は、何時の時代か明かでないが一木某、山口某の祖先が宮崎八幡に参詣するとして、潮井の砂を探らんと宮崎の濱邊へ來たとき不思議にも二個の木で造つた珠を拾つた、その一個は徑二尺二寸、今一個は徑二尺五寸が海上に浮び、浪の打ち寄せる儘に磯邊に轉輾するを認め、拾ひ得てこれを女珠男珠と稱して此の宮に奉納したのだと云ひ傳へるのだ、また一説には明應三年正月三日原田種門といふもの、宮崎の濱にて拾ひ取り八幡宮へ奉納したとも傳へる、何れにしても宮崎の濱邊へ波に打ち揚げられたものを拾つて納めたものである、處で古例によつて今でも毎年一月三日に、之れを拾つたと云ふ一木、山口兩家の後裔が禮服を着して、この男珠を本宮の拜殿に於いて珠洗ひと號し、温湯に浸し茶釜を以つて洗ひ清め、これに又宮酒をそゞぎ掛けた後、それへまた油を塗つて惠比須社へ持ち出すと、神官が祝詞を奏し糶人に投げ與へてゐる。

この糶人といふは皆屈強の壯年ばかりであつて、何れも裸體で切り立ての下帯を

締め、海水を浴びて身の汚れを洗ひ落すか、或ひは井水を被つて身を清めるかして
 今でこそ散髪であるけれど、昔は髪をほどき亂髪となつて寒天を物ともせず駈け集
 るさまは、全然狂人の如き風がある、四邊近所にマゴ／＼して居たら突き飛ばされ
 跳ね返へされて飛んでも無い痛い目をせねば成らないのだ、而してワイ／＼惠比須
 の社頭に群集して、神官の祝詞が済むを待ち構へてゐる、此方ではそれ／＼の式を
 形のごとく行ひ了つて、彼の男珠といふ二尺五寸のものを群集の中へ投げこむので
 ある、其の時我れ勝ちに之れを拾ひ取らんと争ひ狂ひ、幸に手に觸れることがあつ
 ても何しろ大きい珠でもあり、一抱へもあることだから容易に抱へ切れない、また
 幸ひ抱へたと思つても横合から奪ひ取らんと力争すれば、珠には油が引いてあつて
 ツルリ／＼と滑つて轉げ出してしまふ、左様すると又珠の上へ七重八重に重なりあつ
 て、奪ひ合を始め彼方へコロリ此方へコロリと轉げまわる毎に、ワアワアと叫び力
 を極めて争奪するのだ、其の中に力の強い腕つ拳のあるものが漸う押へると、ソレ

珠を取らすなと大勢のものが上より乗り掛け／＼、其の男を抑へつけて珠を奪はふ
 とする、抑へたものは珠を確り腹の下に入れて外敵を防ぐ光景は、實に物凄いやう
 で氣の小さいものはヒヤ／＼と手に冷汗を握るほどである、斯くなる場合には同じ
 村内のものは之れに加勢して、他村の妨害を防ぎながら殆んど其の男を珠と一所に
 轉がすやうにしながら、ヂリ、／＼と本宮の方へ進むを、又奪ひ取らんと突貫する
 もの、護衛の村人を拂ひ退けんと奮闘するもの、鯨聲をあげて聲援するものもあり
 騒擾に騒擾を重ねて一步進んでは二歩押し戻され、戻されてはまた進みして漸く本
 宮樓門の處に至れば、此處は最早決勝點にて如何ともする事が出来ない、珠を抱へ
 た男より恭しく神官に渡せば、神官はこれを直ぐ神前に供へ祭典を執行するのだ、
 此の日參詣の見物は遠近から群集し、同地方にまた比類なき盛況を呈し、般賑を極
 めることは昔も今も變りないさうである。

紙鳶會の奇觀

(肥前)

肥前國長崎にて盛んに行はるゝは紙鳶會である、紙鳶會と云ふは紙鳶を揚げて鬪争し勝敗を決する遊戯である、古來紙鳶を飛ばして遊ぶ風習は諸國一般にあることである、中にも三州豊橋の如き土佐の如き大紙鳶を揚げる處もあり、其の他にも之れを弄ぶは珍らしくないが、長崎の如く盛んなるは他に類例なきことである。

紙鳶會に用ふる紙鳶を此の地では呼んでバタと云ふ、其の製作の如きも極めて簡單にして、方形の紙に僅かに二本の骨を以て作る、其の形は俗にイカと稱するものに似て、角なる紙の隅から隅へ十字形に竹骨を渡し、縦なる骨は上部を火に炙つて曲げ、掛けおくに便利なやうに成し、横骨には糸を張つて弓となすのだ、糸目は十字形になつた骨の處と下の隅に二本つけるのみである、小さいのは一尺位で大きいのに成ると六尺四方位で、それ以上のものゝ無いは争鬪を専らとするからであらう

又之れを飛揚するに用ふる糸はビードロと稱して、糸に硝子の粉を糊にねつて塗抹したもので、長さは大抵十間以上三十間以内に限られてゐる、中には糸に鐵線を用ふる者もあれど、之れは卑怯な方法として度外視されるのだ、扱てこの紙鳶の大小を十二文、二十四文、三十二文、六十四文、百文など云つて等級を設けあるが、是れ等は昔の價をその儘に今も稱して紙鳶の大小を云ふのだらうと思へる。

紙鳶會の定日は毎年三月十日、十五日、二十日の三回で、十日には文筆峰、十五日には風頭山、二十日には浦上新田の三ヶ所で飛揚するのだ、又三月の三日と四日には市中の屋上或ひは物干等にて放揚したものであるけれど、電信架設以來は市中で紙鳶を揚げることを禁せられ、今は前の三日間に定められたのである、會の當日は市中の男も女も盛装をこらし辨當をこしらへ、我れもくと會場へ押し掛けて互ひに驕奢を競ふは、宛も江戸時代のお花見と云ふ光景である、で、藝妓などを連れて全盛な遊山を誇るものは、此處にも彼處にもあつて其の盛況には一驚を喫する程

であるさうだ。

やがて定まる時間となつて一人紙鳶を飛ばし出せば、續いて幾百となく紙鳶は空中に放揚される、十分に風を受けて揚がり切ると名物の争闘が開始されるのだから互ひに交叉してその糸を切断せんと争ふ、幾百となき紙鳶が絡みあつて轉輾するもあれば、一方に傾きて墜落せんとするもあり、入り亂れた中へ奮激突貫するもあつて、實に壯快を極めつゝある中、糸を切断されて翩々と風に翻へつて飛ぶを見れば勝誇つた方は一度ドット関をつくつて歡ぶ、見物は拍手するもの関の聲に和するもの、一時は山岳爲めに鳴動するやうだ、興漸く深くなれば右にも左にも颯々として落ちる紙鳶は、風に木の葉の弄られて飛ぶやうで奇觀此の上もない、此の切断されて墜落する紙鳶は何人にも拾ふに任せる、若し持主が之れを拒むが如きことあれば、吝嗇と嘲けられて其の町内の耻辱となるので、切断されたら其の時より所有權のないものとし顧みないのだ、で、此の飛び來る紙鳶を取らんと長竿の頭に枳殻を

つけた物を擔ぎ、西に東に駆けまはるもあり、又屋上に登り木の上によちて拾ひ取らんと争ひ、往々一物を數人に奪ひ合ふて喧嘩になることもあるが、斯かる場合には紙鳶その物より糸の一端を捕へ握つた者の勝利に歸す制裁がある、そして勝利者の判然しない時は其の紙鳶を破截して了ふのだ、此様さわぎであるから毎年三月になると老人も若い者も、一般に紙鳶で夢中になつて了ひ、互ひに新しい印標を造つて番附までをこしらへるのだ、長崎の人々が此の紙鳶會前後に浪費するところは、下流の者でも一人十圓ぐらゐに達し、中流以上になると三四十圓以上百圓にも登るもの多い、殊に藝妓などを連れて贅澤遊びをするに於いては限りもないのだ。

十五夜の綱曳

(日向)

陰曆八月十五日の夜、お月見と稱して月前に種々の供物をさゝげ、一家團樂して月を祭り、或ひは詩歌俳諧などを遣つて興するの例は、日本には古くより行はるゝ

事であるが、日向國南那珂郡飯肥町にても此の日十五夜の行事をする、其の行ひ方は他の地方と格別の異なる設けもしない、當日は朝早くから戸毎に餅を搗き、日暮を待つて縁先きに机を据ゑ、此の上に搗いた餅や柿栗甘藷などの類を、何れも數十五個づゝ盆に盛りたるを載せ、幾個も供へた傍らに薄を花瓶に挿して捧げ、今宵の月を祭るのだが、供へ物のうちに普通芋を用ふるのに、此處では甘藷を盛るも一寸妙に感ぜられる迄である。

十五夜の行事のみでは別に奇でも何でも無いけれど、此の夜に行はれる遊戯が他に例のないので珍しいのだ、飯肥町のうちに又本町今町など云ふ處があつて、其の町々に住む十五歳以下の小供が、群り寄つて左右に別れ綱曳きをする行樂がある、是れが全町を騒がせ近郷近在より見物が群集し、晝夜へ掛け大層賑はふのである、此の十五夜前になると土地の小供等は藁や竹などを諸方から貰ひ集めて、堆かくなる迄に積み重ねて置く、やがて其の日になると小供の父兄たちは打寄つて、貰ひ集

めて置いた竹を細く割るものもあれば、その割つた竹を編むものもあつて、此の割竹を編んだのを心にして其の周圍に繩を縋ひ、長さ五六十間以上もある大綱をこしらへて遣る、其の騒ぎは朝早くから大變なもので、全町殆んど總出と云つてよい程の大掛りである、小供の遊戯としては念の入り過ぎて位だ、夫れも其の筈である、小供の遊びばかりでない、夜に入ると大供までが狂ひ出して勝た負たと争ふのだ、斯様風に大供も小供も騒いで、出来揚つた大綱は町内の片隅にクル／＼と巻いておく、何しろ太い綱が五六十間もあるのだから、大人の丈ほども高く成るさうである。

いよ／＼綱も出来ると小供等は夕方になるのを待ち焦れてゐる、太陽が西に落ちて涼風が吹き出す頃になると、最う小供はチットして居ない、襦袢一枚になつて新しい手拭で後鉢巻をする、思ひ／＼の色布で手襷を十字に斐取るもあり、又手襷を掛けないのもあるけれど、兎に角身輕な扮装をして彼方からも此方からも、バラバ

ラバラ／＼と忽ちの間にワイ／＼と寄つて来る、積み重ねてある綱を引き出すや、サツト東西に別れた小供等は我れも／＼と大綱に捕つて、總身に力を籠め「えんよーやつさい」と一方で掛聲勇ましく綱をグ／＼曳けば、また一方でも「えんよーやつさい」の聲を張り揚げて力任せに曳き戻し、曳きつ戻しつ、戻しつ曳れつして勝負を争へば、見物はまた最負／＼に聲を張りあげて聲援を與へる、小供は一生懸命ヅル／＼と曳き付ければ又浮き足立つてヅル／＼と曳かれ、一勝負つけばワツト鯨聲を揚げる、その響きは天地も崩れるやうであるのだ、夫れが本町から今町へ行き、又今町から本町へ来て、再び勝負を争ふのである、夜になると小供連は疲れて綱を投げ出す、今度は己れ等の番だと云ぬばかりに壯年の者が、飛び出して来るが何れも身軽な支度だ、數十人また數百人づゝ双方に分れ、綱を握るや直ぐ「えんよーやつさい」の掛聲は物凄いやうに四方へ響き渡つて、其の壯快なること何とも筒とも云ひやうのない程で、兩側に押合ひへシ合て見る見物人も、綱を曳きつけられ

る方へドサ／＼と雪崩を打つて轟めささわぎ、自分等も綱曳でもするやうに狂ふは他國に於いて見られない盛況である、で、近郷近在は素より遠く數里の處より態々見に来る者もあり、餵肥の町は人で埋ると云はれる賑はひを極む、若し當日雨天の時は其の翌日に延ばし、其の日もまた雨なれば其の次の日と、雨天順延に當ふを例とし、往昔から今日に至るまで未だ一年も休んだ事が無いさうである。

初午の厄落し

(志摩)

志摩の國の西南端の半島形をなした處に、御座と稱する戸數僅かに二百ばかりの一小村落がある、土地の人氣は至極質朴で太古の民族風があつたと云ふが、近頃では何様津々浦々でも交通の便は拓け、文明の空氣が棚引いてゐるから、また昔日のやうな純朴な風は見る事が出来ないけれど、都會の風俗に比べては雲泥の相違があつて、何となく村民の舉動がオツトリして居るさうだ、此の御座といふ處に古來

より厄落しに一の奇風があつて、現代にも尙ほ其の遺風がある。
 都會などでも厄落しとて一種の迷信は今も往々行はれてゐるが、大抵は大晦日即ち除夜の晩とか、または節分の夜に限つたやうになつて居る、併し此の土地では夫れが初午祭りの日に行はれてゐるのだ、初午は矢張り二月である、陰曆を用ふることは勿論であつて、太鼓もたゞけば職もたてる、赤飯も炊けば油揚げも供へるは變りがない、そして男女の厄年と云ふはこれも何處でも同じこと、男は二十五歳、四十二歳、女は十九歳、三十三歳としてある、昔は何れの地方でも男女ともその年になると、厄落しと云つて手拭を落したり、また金錢を態と落したりしたものであるが、此の土地の厄落しは餅を落すのである、厄餅といつて餅を搗いてお籠にとり之れを四ツ辻に落すのだ。

其の順序を詳説すると、男でも女でも厄年になれば、今年は厄だから用心せよと他人よりも注意を受け、自分も身を謹みて萬事に戦々兢兢々として思案なげ首と云ふ

状態で、一寸とした悪いことがあつても、ソレ厄年だからと云ひ、神佛に詣で、祈念するなど、中々大騒ぎを遣るほどだから、其の年廻りに成つたものは、初午になるを待兼ねて、厄落しの用意に怠らないのである、いよく最う三四日で初午になると云ふ日取が来れば、少しにても財産のある者は、村中へ盆大の餅を配つて厄を願つと云ひ、競ふて餅配りをする程なれば、素封家と指を折らるゝ者に至つては猶更のことである、誰れとても厄を願たれて心地のよい筈はない、他人の厄を引受けるなど、は感心した譯でないから、此の厄配りに對する返禮として、樽開と云つて村民一同を招待して酒食を振舞ふのだ、則ち自分の厄の一分を引受けて貰ふ禮心地で御馳走をする譯であらう、樽開きは厄餅を配ると引續きて執行ふので、大抵は初午の前々日に盛んに大酒宴を催すが多いさうである。

さて明くれば初午といふ前夜に至り、其の厄に當つた人々は、別に搗いて厄餅を小脇に抱へこみ、提灯を持つ子供を前に立て村社へ參詣する、それが此方からも一

組、彼方からも一組と云ふやうに、田圃道や畑道を提灯が幾個もく暗を縫ふて通る、その目指すところは何れも村の鎮守様である、それが必らず鎮守様に参詣せずとも、途中四ツ辻になつた往來へ、小脇に抱へて來た餅を落し、これで今年の厄は落した、厄を拂つたと云つて後を見ずに家に歸ればよいのだが、其の厄餅を落すところを他人に見られては何にも成らぬと云ふので、東から來る提灯がセッセと飛ぶやうに走れば、西から往く提灯は態とゆるゆる歩いて、先方の辻に落し行くを見ざるやうにすれば、又南から來るものは横道に反れて提灯の通るを待合し、北よりする者は迂回な途を取つて飛んでもない四ツ辻に出るなど、此の厄餅を落すにも中々容易の苦心でないさうである、漸う思ひのまゝ辻にて厄拂ひ厄落しを終れば、早く歸宅する、家には親戚朋友など待ちゐて、先づ目出度く今年厄は拂はれたと祝儀を述べる、さアまた是れから祝ひ酒となつて飲めや唄への大騒ぎ、井を叩くものもあれば、鐵葉の罐をガン／＼ガン／＼打つものもあつて、夜の明けるまでも酒

宴を催すが例であると云ふ。

門火と鼻つき餅

(備前)

地方の婚姻儀式には随分奇なる風習があるが、備前の岡山地方に行はるゝものは又大分風變りな習慣がある、葬式に門火を焚くといふことは古く行はれた俗で、淨瑠璃にも彼の松王が我が子を菅秀才のお身代りに立て、野邊の送りをするときに門火くと云ひ、その他にも此様例は幾干もあるが、婚禮に門火を焚くの例も古くからある事だけれど、都會の人々の目には珍らしく思ふやうになつた、此の古い風俗が遺つてゐるも面白い。

岡山地方では今でも舊習を追ふ家では、嫁御寮が其の生家を出づると云ふ時に臨み、バット一煙り門火を焚いて送り出す遺風があるのだ、此の門火を焚くには何でも火さへ焚けば好いと云ふのではない、其の家が藁葺の家根であると、家根に葺い

てある藁を一掴みつかみ出して夫れを焚くのだが、若し藁葺でないときは、一掴みの藁をかねて屋根の上に揚げ置いて、イザお嫁さんが出ると云ふ時に、その藁を下ろしてバット燃すのである、是れは只だ燃すばかりで別段に式などはないが、嫁さんが家を出ると途中には、此處の辻や彼處の横などに見物が大勢集つて、口々に褒めるもの、貶すもので賑ふは、何れの土地でもあることで珍らしくないけれど、此處に集つてゐる年寄りでも若いものでも、男女の差別なしに手に／＼に砂を掴み、お嫁さんの害にならないやうに投げ付ける、そして途中この砂振舞を多く受けるほど花嫁さんの名譽となるも妙である。

扱て愈々縁家へ乗り込むと、此處ではまた盛んに砂や石を投げられるを例とする處が其の縁家が常に近所の人々に憎まれてゐるとか、或ひは交際のわるい家とか云ふと、土地の者は此様ときに敵討をする氣になつて、砂は素より小石などをバラバラバラ／＼投げ込む、其の中に瓦の缺けを投げるものがあると、忽ち遣れ／＼と云

ふ聲が何處からとなく起る、さア斯うなつては堪つたものでない、手あたり次第に大きな石まで投げるので、門は壊される障子の骨は滅茶々に折れて了ふのだ、之れに對して苦情を云ふことも出来ない、無論損害要償などを求めることも出来ない集つて来る者は大勢であつて誰れが石を投げたか知れないし、中には馬糞などを盛んに投げて、ドット鯨聲を揚げて引揚げる亂暴狼藉を爲し、之れを制せんとして怪我をする人などのあるは常事である。

この騒ぎが一段落つくと、花嫁さんの乗り込んだ家では、かねて親類や縁者からお祝ひに貰ふた、紅白の餅または豆を搗きこんだ餅を、寄り集つてゐる見物の群にバラ／＼バラ／＼と撒く、之れを拾はんとして轉げつ倒れつ、泥だらけになつて争ふ騒ぎは物凄いほどである、外では此の騒動を演じてゐる間に、内では花嫁さんが媒介人に手を引かれて、羞しさうに其の設けてある嫁の座に着くと、此處でお膳を敬やしく持ち出してお嫁さんの前に据ゑるのだ、このお膳が頗る振つたもので、

無論云ふまでもなく立派な本膳であるが、上に乗つてゐるものはお椀が只だ一ツ、それには飯を山盛りにして二本の箸が真中に突立てゝあるのだ、丁度佛前に供するものと同じであつて、而も大きなお椀に盛れるだけ高く盛上げてあるから、實に見事なものである、これを鼻つき飯と云ひ、外には汁もなければ副食物となる馳走の一品もない、斯うしたものを花嫁さんが喰べねばならぬかと云へば、強ち喰べないでも好く、一口箸をつけても只だ箸をつける真似ごとをするばかりでも宜いのだ、此の儀式が滞りなく終ると、今度はまた座敷が改まつて三々九度の式を擧げる事になる、その式は別に變つた事もなく普通の如くであるが、それより祝宴に移つて例の通り高砂やの謠ひが初められ、之れを切つかけに歡聲湧き座敷は破れかへるやうに賑ふ、そして目出度くでお開きとなるのだ。

巳の日雜煮

(伊豫)

土地かはれば品かはるで、其の土地くによりて習慣風俗の異なるものだ、伊豫の東部に位するところでは、毎年舊曆の十二月になると、初めての辰の日の夜、其の年に死亡のあつた家へ、近所の者や親類のもの、または日頃心易く往來するものが出懸けて『今晚は御當家には思ひがけない巳でございましたが、御茶でもお飲みなさいましたか』と挨拶に来る、此の訪問をうけた家では、人々の來るのを待ち受けてゐる事として、主人が飛び出して『これはく能うぞお知らせ下さいました、是れより用意もいたします、何うぞ御一所にお出で下されますやうに』といそく挨拶を返して、来てくれた人々と共に菩提所に赴き、新佛の墓を掃除してその前で火を焚き、かねて用意をして携へ往く餅一個を焙つて、同行した人々に『さアまづ貴方から』と云へば、其人は『イヤ、私しよりは何某さんが佛に近い身寄でございませう、先づくお血縁の近いところよりお初め下さいませ』と云ふと『それでは貴方さま』ハイ私しよりも其許様がお近いではござらぬか『左様く、然らば皆様

「お免下さいませ」と云ふやうな譯で尤も新佛に近い身寄りの者より、墓前で焙つた餅を一缺かいて食する、今度は貴下だ、夫れから手前だと段々と一缺づゝ食し、来た人だけで一個の餅を引揚つて喰ひ、それで此の夜は御苦勞さまでと各々分れて歸家するのだ。

處でその翌日、いよ／＼巳の日になると、新佛のある家では朝早くより法事の支度に忙しい、昨夜寺參りをして呉れた人の家へは素より、寺へは來すとも新佛の懇意にした人、親類縁者へ向つて「今日は某の巳の日でございますから、何うかお出で下さるやうに」と使者を彼方此方へと走らせる、迎ひを受けた人々は「御丁寧に有難うございます、後ほど參上いたすでございますらう」と返答して、夕方からぞろ／＼推懸けて來るのだ、田舎の事だから義理固い、迎ひが來なくとも今日は何處の巳の日だ、今に使ひが來るだらうと用事があつても萬障差繰つて待合す位だ、迎ひを受けたからは何を置いても必らず出懸ける、若しこんな時に使者を遣るべき家を忘れ

でもすると夫れこそ大變、大問題が起つて近親は手のコッポを摺つて仲裁に飛び歩くものである、お客をするにも席順が中々喧ましいので、大抵その土地／＼で年寄の物馴れた人の差圖をうけ、何某の次席は誰れ、誰れの次は彼れと席次も老人が亭主に代つて定め、漸うツラリと並ぶと其處へ主人方が出で「今晚はいさゝか巳の日の眞似ごとをいたしまする間、何うぞゆる／＼召食がつて下さいまするやうに」と挨拶する、左様すると上席に座する者が一同に代つて禮を述べ、斯くしてゐる内に段々と膳を運び出して來るのだが、それは餡の入つた餅を雜煮にしたものである、勿論他にも料理は出る、酒も出すけれども今夜の主なる御馳走は此の雜煮であるのだ、立派な門戸を張つてゐる家ならば、相應の御馳走もして此の雜煮はホンの形式に過ぎないが、然もない貧家などでは漸うこの雜煮を振舞ふが關の山である、斯ういふ儀式に類する事になると地方人は律義眞法に行ひ、一反の田一畝の畑を持たない農夫でも、尙ほ且つ佛の爲めに此の巳の日を行ひ、之れを死人の祝ひ日だと稱し

てゐるのだが、中には貧困にてお客の出来兼る水呑百姓なども随分ある、斯うしたのになると多くは地主などが助力を與へて、形ばかりでも佛の爲めに法會を行はすもので、常には無慈悲な地主でも斯様時になると、其の費用を拒むことが出来ない習慣があるさうで、若し夫れを拒む時は、他の者が救助しおき收穫を地主へ收めるときに引去り、負債を償却するは公然の例となつてゐる村もあると云ふ事である。

八の戸のいぶり

(陸 奥)

いぶりとは百姓が耕作の眞似をして豊年を祭るのである、陰曆の正月十五日十六日に行はるゝ八の戸の年中行事である、十五日になると「阿母ア苗取りや來た餅やるべいか、飯米やるべいか」と云ひまた「爺も婆も明日ア十六日だ、八の戸さ、いぶり見に行くべいか」などいつて、老人も若いものも、男でも女でも皆盛装して見物する習慣がある、中々盛んなもので村内の素封家や地主などになると、相應に費

用も要するさうである。

其の行事の様子は十五日には苗取りと云つて、村々の若い者五人六人また多いのは十二三人も一團となり、笛を吹く太鼓を敲く手平鉦を打つなどして、戸毎に「ヤイ〜此家の旦那様の苗はよい苗だ〜」と口々に囃し、組内の三四人が藁の小束を右手に握つて、腰をかため苗を取る眞似をする、それが極めて眞面目であつて極めて落付てやるのである、左様すると又一方には囃し方があつて「取りませう〜苗を取りませう、コボ〜、タン〜、きりツとやつて置いてやれ」と聲を揃へて囃し立てるのである、此のコボ〜、タン〜と云ふのは水の音で、きりツとは束ねるさまを云ひ、斯ういふやうに二三度やると今度は其の數をかぞへる段取になるのだ、之れがまた面白い「一ツ三ツ九ツ三百五百、おゝ取つた〜、千三百八取つた其方なんぼ取つたけア、己れア三千十百さ、今度は嬢様の貯田取るべい」とまたまた初める、其の式が濟むと此のいぶりを遣られた家の亭主と嬢から、餅、飯米、錢

のやうなものを貰ふて、次の家へ移りてまた賑やかに同じ事を行ひつゝ歩くのである。

十五日の夜は殆んど之れで盡きるほど、夜も更けて何うかすると明け近くまで騒ぎまはることもあるさうだ、其處で翌十六日になると、村々の若い者は三十組くらゐに分れて一組づゝ集合し、何れも華美な着物を着て頗る賑やかに、二尺ほどもある竹にいろ／＼の色紙を張つたのを持ち、尙ほ天下泰平何々村安全と文字を書いた旗をおし立て、例の太鼓をドン／＼鳴らすもの、笛をヒュー／＼と吹き、鉦をカン／＼と打つものなど、互ひに負けず劣らずドン／＼カン／＼ヒュードンカンと陽気に打囃しつゝ、近傍の町村を田植ちや／＼と云つて押し歩くのが、是れまたいふりである、老幼男女の競ひて見物に出るものは是れであるのだ。

其の一組のうちに三人は大きな烏帽子に夷比壽、大黒、松竹梅、鶴龜など綺麗に彩色したものを被り、着物は縞縮緬にて腰切りのものを着し、手には三尺棒に鈴を

つけたものを持ち、他の組員はその三人を擁護するものゝ如く取巻き、そしてそれが丁度音頭でも取るかのやうに、歌を唄へば一同が聲をそろへて「いさ／＼」と叫び囃し立て、其の調子に乗つて鈴を鳴らし、頭を奇妙に打ち振り／＼して頗る不思議な舞を奏するのである、一わたり此の舞が済むと今度は赤い頭巾をかぶつた舞手が「何を舞ふたらよろしかろう、大黒舞と囃せのウ」と節をかしく云ひて、殊更に鼻をヒョコ／＼と動かしたり、口を細くして曲げたりする滑稽のあらん限りを盡して、見物をドット笑はせる、此の道化は中々上手で其の態度から噴出したくなるものなどあり、餘程巧みなのがあるさうである、此の滑稽に腹の皮をよらせた跡が、三味線太鼓でグツと壊けた追分とか都々逸とかを唄ひ或ひは踊る、是れぞ若い者等が隠し藝を出して村内の阿魔ツ子にアツと魂消さする處である、隠し藝の競技會がすむと今度は茶番狂言が開始され、兎に角一段落がつくと是れでお役目御苦勞／＼と云ふ事になるのだ、斯うなると其の家の主人は御苦勞さま／＼を續けさまに述べ

飯米、錢などを與へた上で、ふんだんに酒食の馳走をせねばならぬのである、兎も角此のいぶりは八の戸に於ける唯一の年中行事である。

誘拐し婚禮

(豊前)

野蠻時代には随分女を誘拐して、無理無體に我が心に従はした、威嚇壓制的に結婚を遂行した例はある、女も自分の意志に反するけれど、是非なく屈從して其の儘に、思はぬ良人に面白からぬ生涯を任せて、紅涙を吞んで暮すものが幾干もあつた今日から考へて見ると愚の至りである、自分の意志に反する結婚を強られて、それに甘んじて居るも哀れな次第であるのだ、新しい女と云はれる連中などには到底も辛抱の出来る藝でない。

文明の空氣は何様山奥までも棚引いてゐる、大正時代に猶且つ其様非文明的の結婚があらうとは思はれない、如何に僻陬の地だからとて受け取り難いが、實際に於

いては未だ全く其の風習の跡を斷つことが出来ず、往々野蠻なる誘拐し婚禮の行はれる處があるは不思議である、それは何處であるか、豊前國小倉町に長浦といふ處がある、人家は漸く五六十戸に過ぎない一小部落で、前面に渺茫たる玄海洋を控へ打寄せる波は磯邊の岩を洗つて、潮風に揉まる、松ヶ枝は振面白く傾き、飛び交う千鳥の聲も耳馴れては何の興もなき、賤が伏屋に漁業を以つて立つ荒くれき浦人のみだから、日常のこと兎角に雑風景にて、文明の野蠻のと云ふやうな考へあるものは幾人もなき土地だ、で、萬事が自から荒々しく、且つ短刀直入的で他郷の者が足を容るゝと驚くことが多い程だから、従つて婚禮にも猶ほ昔ながら誘拐し手段の行はれてゐるのだ。

茲に一人壯者があつて、ある家の處女に戀をする、其の戀が相思の中であつて、眼が口ほどに物を言ひお互ひに意志の通ずる場合はスラ〜と結婚も出来る、當人同志も喜んでお嫁に成りませう貰ひませうと約束は成立するが、其の間に一つの障

碍が生ずるとさア何うも目的を達することが難い、假令ば女は承諾する、否や／＼ながらも承諾しても親々が不承諾を云ふとか、又女に既に情人があつて横戀慕を嫌ひ、之れに應じないとか云つて望み遂げることが出来ない、けれども其の女に愛情を捨てるに忍びない事になる場合、戀する壯者は、密かに自分の朋友二三人に事情を打明けて、何うか一臂の勞を貸してくれと頼むのだ、斯ういふ時になると朋友は其の男の飽までも、思ひ込んだ女を妻にして末長く暮らすことを誓はした上、然らば宜しと手を藉して彼の女を誘拐しても添さうと快諾する、斯うなると其の女を隠しておく家を先づ第一に選定し、それが是れで可しと定まると今度は連れ出す機會を待設けるのだ、如何に野蠻的の行爲を平氣の平左で行ふ處だからと云つて、突然女の家へ飛び込んで擔ぎ出して來ることも出来ない、何れ鎮守の祭禮とか盆踊りとか云ふやうな時を覗ひ、其の女が外出するを尾行して否やも應もあつたものでない、豫定しある隠れ家へ連れ込むのである。

斯う成ると最う戀は九分まで成功したのである、思ひ焦るゝ壯者は女に向つて切なる思ひを諄々と口説き立て、女として最初より意のある男でない、殊に誘拐されたと云ふ鬱憤があるので、直ぐ快諾を與へる者は更にないのだ、斷られるだけは斷つてと中々首を縦には振らないを、根氣よく歡心を求めて口説き立て、否やと云つたとて嫌はれて引下がるのでない、否やと云つても斷ると云つても執念く口説き承諾をする迄は幾日にも一室の中に押込め置いて、ヤイノ／＼と口説き根氣競べをするのだ、さア左様なると女も大抵は根氣負けをして、心には進まず否や／＼ながら結婚を承諾するのだ、女より承諾の言葉を聞くや壯者は满面喜びを泛べて、朋友の許へかけ付けると、夫れでは御意の變らぬ中にと早速女の親へ結婚を申し込む女の親も當人が承諾したと云ふからは之れを拒むことも出来ず、何か相互の大耻辱となる如き事件のない以上は、此處に若者の戀は成立ち戀女房との結婚をするのである。

鳥小屋の爆聲

(常陸)

新年の行事には少年が引合に出で、種々の事を爲すのが多い、何れの地方にても無邪氣な小供が幅をして居る、常陸國多賀郡邊より磐城あたりへ掛けて、行はるゝ行事にも矢張り少年が御前立ちと成つて、儀式を行つて居るのだ、此の地方の小供は舊曆の正月となると鳥小屋と云ふものを作る。

鳥小屋を作るには村内の小供が集まつて、山林へ分け入り頃合の松や雑木などを伐り取り、是れを材料にして水のなき乾いた田の中、または畑の作物のない處などへ掘立て小屋を立てる、そして小屋の四方は藁を貰ひ集めて圍ひ、風除けをこしらへて寒氣を防ぎ、入口には蕙を一枚かけて扉とする、之れを鳥小屋と稱し新年に小供の遊び場所としてある、で、山林に入りて材料を取るに何れの山、何れの林に分け入るも此の時は持主も叱ることなく、小供の爲すが儘に任して少しの干渉もなけ

れば、樹木を伐り倒して運び出しても之れを咎める者はない、防風用に使ふ藁の如きも近邊の農家へ貰ひに行けば、何れの家でも喜んで其の持ち行くに任せ、天下晴れての小供の世界になるのである、此の時ほど彼れ等は羽を伸して元氣よく活躍し父兄の束縛を離れ長上の尊敬を棄て、勝手氣儘に振舞ふとも自由であるのだ。

斯く遊樂に耽ける場所、鳥小屋が出来揚ると今度は小屋の真中に爐を作る、爐を作れば木炭が必要となる、薪が必要となる、是れ等も夫れ／＼手分けをして村内を巡り戸毎に貰ひ歩き、一日分なり二日分なり焚き捨てるだけの用意をする者もあれば、爐には自在鉤を吊して釜をかけ、鍋をかける、此の釜や鍋は村内の有志から借りて來るのだ、是れで湯を沸す準備も物を煮る準備も整ふ、左様なると又一群は村内を廻つて、米を集める、味噌を貰ふ、或は錢を得、野菜類を持ち來る、又魚類なども手に入れて、此の鳥小屋に於いて少年のみで炊事までを爲し、物を煮る焼く、飯を焚く味噌汁をこしらへるなどして、一日三食とも此の小屋にてする、材料が盡

きると又村内を勸化して貰ひ来て腹を脹らし、我が家へ歸るは夜も更けてよりホンの寢に往くまでで、元日より十四日までの間を斯ういふ風に面白く遊び暮らすのである。

此様鳥小屋は百戸位の一村落なれば三四ヶ所も出来て、氣の合ふた友達同志が集合してゐるのだから、偶には喧嘩や口論も起らないではないが、此の時に限つて喧嘩でも其の他の事件でも皆仲裁者が預る慣例である、それで大喧嘩をしたり罵りあつて騒ぐことは殆んどない、最も楽しい喜ばしい天國を出現するのだ、土地の老人共でも最う一度鳥小屋で遊ぶ年齢に成りたいと、小供の時の愉快さを語つて羨んでゐる程である、此の楽しみも十四日の夜と共に盡き、翌日小屋を焼捨て、灰にして了ふのだ。

十五日の朝になると小供たちは、未だ夜の明けの中より村内を西に東に駆け回つて、各家々の注連飾を取り集めるのだが、前にも述べた通り一村内に此の鳥小屋は

幾個もあつて、注連飾を集める競争が勵しく行はれる、それは注連飾を多く集め得ただけ其の小屋の名譽となり、小屋に居たところの小供の手柄になるのだから、此の時は五歳六歳の小供までが未明より、甲斐なく扮装して注連飾に奔走する、そして夜明け頃になると村内のお飾りは一ツもなく成つて了ふ、左様するど各小屋々では、集めた注連飾を、小屋の内へ詰めこみくして之れに火を掛けて焼き捨て、夫れと同時に注連飾を外部に蔽ひ、中へ太き青竹を包みし炬火を作つて、稍や年嵩な小供が振廻して居るうち、竹は次第に燃えて節々に至ると凄き爆音を發して壯快を極む、何れもその音の大なるを自慢をするので、彼方でもボン／＼此方でもボン／＼と爆聲四邊に響き渡り、天地も震動する程の中に太陽が長閑な光りを浴せ、一同解散するのである。

樽入れ樽開き

(安藝)

何れの國にも變つた風俗はあるもので、安藝國安藝郡に十二ヶ浦といふ處がある。此の地には古來からの習慣として、村内の女子にして他村の男と馴染みになつて結婚することを許さぬ、絶対に許さないと云ふ譯ではないが、若し他村の男と結婚しやうと思へば、村内の制規を踏んで其の制裁を受けないと、結婚することが出来ない、獨り結婚することが出来ないばかりでない、其の女子は生涯人の妻となつて楽しい家庭を造ることが出来ない、村内の者は無論女房に持たないし、他村へ嫁さうとしても故障が出で輿入をする事が出来なくなるのだ、至極窮屈なやうな制裁ではあるが、又一方には野合を防ぐ一種の手段と成つて居る、何事にも一長一短はあるものであるのだ。

村内の制規とは何ういふ事であるか、夫れは如何なる家の娘でも、村内の者と關係をつけ結婚せんとするには何等の故障もないが、若し他村の者と馴染みを重ねたと云ふ事がバツトすると、其の娘が美人でもあれば岡焼半分に猶更である、假令左

したる美人で無いまでも、ヨリ以上の不美人であるにしても、他村の男と關係が出来たと成ると、村内の壯者は何處の娘は何某村の誰れと訝しい、確かに關係があるらしいと言ひ出すと、其の實否の探偵に着手し、いよく關係ありとの證據があがるや、突飛な村の壯者は面白半分、岡焼半分で、彼の娘の家へ「樽入れ」をしてやらうと相談する。此様相談は忽ちに纏るものであるから、遣るべしと人気が立つと、其の連中が出金して僅かばかりの酒肴を贈るのだ、之れを「樽入れ」と云ふのである、扱て之れを受けた女は其の儘にしては置かれぬ、若し其の儘に取り放しにして置いたなら、自分は一生涯何處へ嫁する事も出来なくなる、愛する男とは無論手を切つて下はねば成らないのだ。

是に於いて此の「樽入れ」に對する返禮法があるのだ、夫れは酒肴を調へて、村内の者に盤臺振舞をするにある、中々容易なことでない、そして其の費用は女に關係ある男が負擔する事になつてゐる、けれども幸ひに男が資産でもある者ならば、

何とでも成る譯であるが、不幸にしてビイ〜風車のカラツ尻であつた日には、其の負擔を全ふする事は出来ない、然りとて其の儘に捨ておく時は女は生涯の廢物と成り了るのだ、此處四苦八苦の困難であるが、斯様のときには女の方の親どもも可愛い娘を生涯寡で暮らさせるは忍びないから、出來得るだけの助力は必らずするそれも資産を有する者だと男の爲に財布の口を開き、又餘裕のない者だと種々の算段をしても『樽入れ』に對する返禮はする。

その返禮は何處でするかと云ふに、樽入れを受けた女はそれ〜の準備を整へて氏神の社へ詣で此處を盤臺振舞の席に充てるのである、無論神官に事情を話して許しを受けるのだ、神官も斯かることは村内に古くよりある習慣でもあり、自分に損益の關係のない事でもあれば異議は言はぬ、女は豫て設備した酒や肴を氏神の社前に運び、田舎の事だから大した御馳走のある譯でないまでも、幾荷もなく芋の煮轉しや何を堆かく積み、酒も樽の儘に鏡を抜いて幾個も並べ、さア之れで用意が整ふ

となれば、神前に額き一禮した後ドン〜ドン〜と力任せに太鼓を打ち鳴らすのである、ソレ『樽開き』の披露があるぞ、我れも行け誰れも来いで、流石に廣い鎮守の境内は老人も若いものも小供もゾロ〜ゾロ〜と詰め掛け、見る見の中に村内の男女で立錐の地も無いまでに群り来て、設けの酒肴を飲む喰ふわ、其のうち振舞酒が廻つて来ると調子づき、踊るものもあれば唄ふものもあり、鎮守の森の中から動搖めきが響き渡つて賑ふのだ、浦人は之れを『樽開き』と云ひ、之れをすれば女は他村の男と結婚しても村内に苦情がないのである。

雌雄の左儀長 (山城)

左儀長又はドンドと云ひて随分諸國に行はれたもので、其の土地により多少の相違はあるのだが、山城國愛宕郡高野村に行はるゝものは、稍や趣きを異にした奇習がある、此の村にても之れを行ふは舊正月十五日であつて、此の日は朝より村内

地家の子供總出にて、鉦を叩き太鼓を鳴らしながら、村内を殘る隈なく巡つて各戸の門松注連飾を集め、之れを若州街道筋字八幡の森の傍に運び、それが殆んど運び終つた頃になると、村内の若者が豫て當村氏神の境内にて伐採した、生木の長さ三四間あるもの六本、長さ一間くらゐの物十數本とを組立て、二基の左儀長を造るのである、之れを雌雄の左儀長と稱して、小供の朝から駆け歩いて集めて來た門松や注連繩を、之れに隙間もなく括し附けて、準備全く整ふころは最う黄昏になるのだ。

そこで地家の者より村長に届け出て、出來形の檢分を請ふのである、此の時村長は麻の社袴を着し、一刀を帶して自分の家の定紋を附けた平丸提灯を携へ、小使を召し連れ來て仔細に檢分を終ると、其處から二丁計り隔つた氏神に參拜し、歸路について其の場所を通り過ぎるを合圖に、二の左儀長へ一齊に火を點けるのだ、其の藁、竹、標葉、裏白などは舊臘から日光に曝され、風に吹きつけられて乾燥して

居るので、火焰は一時にバツト燃え上る猛烈さ、火光は天を焦して白晝を欺むき、バラ／＼と降り來る火の子は紅の雪の如く、其の奇觀なること壯觀なること譬ふるに物なした、此の時に小供等は今年した書初を我れ勝ちに火中に投じ、火焰の爲めに其の高く舞揚れば、手跡が上達すると喜び騒ぐ聲は木魂に響いて凄まじい。斯うして火のまだ鎮まらない中に、若者等は其の年の歲徳神の方位へ倒し、燼殘る生木を引出して之れを曳摺りつゝ、地家頭團兵衛の屋敷へ送る、其の途中一同に聲を張りあげ『團兵衛々々』と連呼して進み行く光景は、殊に勇壯にして活潑な趣きがある、之れを無事に送り了ると、又八幡の森に引き返して此處でメンシヨウの歌を唄ふのだ、この歌は十五六歳より四十歳位までの男子が士分地家の差別なく打ち交り『まこウよ、まアこよ、七福神が寄合ふて福の種を、まアこウよ、まアこよ』と繰返し／＼唄ひ續けるのである、それが一切りで濟むと今度は若者の中で聲自慢のものが、美しい聲を張りあげ、先づ初めに『小野郎がア、メンシヨウ云ふて

さかそ、云ふてさかアそ……」この跡は年毎に文句の變る上に、多くは猥褻な語が挟まれて聞くに堪へないのだ、一段了れば次のものまた前者の聲と己れの美音と比べてくれと云はぬばかりの調子で『二才がア、メンシヨウ云ふてさかそ、云ふてさかアそ……』と唱へるを、また一人が引き取つて『老爺がア、メンシヨウ云ふてさかそ、云ふてさかアそ……』と美聲を振り搾つて謠ひ終れば、之れで今夜の式は果てるのである。

處で此の日若者等はどんな扮装をしてゐるか云へば、晒木綿の手拭にて頬被りをしてゐる、そして其の手拭には各自意匠を凝らして奇抜なのを用ふる者もあれば又情婦などより特に今夜の晴として贈るを得々として被るもあり、又五人十人共同して態々手拭を染めて被るのもあり、若者の苦心は中々一通りで無いものもある、手拭の外に必らず新らしき白足袋を穿くを例とするさうだ、高野村の左儀長と云へば近郷に鳴り響いた有名なもので、其の盛況も尋常でないから見物で八幡の森附近を

埋める程だと云ふ、又この日京都の祇園、御雪、伏見の稻荷、その他洛中洛外の神社にても左儀長の式を行ふけれど、何れも集めて来た門松や注連飾りを只た堆かく雲梯と積み重ね、火を放ちて焼捨るまでにて高野村の如き異式はないのである。

簀笠で水祝ひ

(周防)

周防の山口市を距ること四里ばかりの處に、吉敷郡陶村といふのがある、此の近傍の村落には古來より水祝ひと稱する一種の奇習があつて、今も猶ほ昔の風習が遺り、舊曆の正月十四日の晩に其の古例を行ふのだ。これは陶村近傍に止まつた奇習ではなく、周防または長門の全體に行はるゝ遺風であるが、處に依つては大同小異はあるけれど、大體に於いては同じ行き方で大差はないのである、此處では陶村附近に行はるゝ處の例に依つて記する事にしやう。

水祝ひの行はるゝ前になると各村々の若い者は、切々と藁にて馬の形をこしらへ

る、さうして口に緋を咬へさせ、夫れに大根を蒲鉾形に切つたり或は四角に切つて松竹梅をいろ／＼に挿し、または其の他目出度ものなど品形をこしらへ、準備が整ふと當日になるのを待つ處もあり、又その日の朝より村内の若い者が打寄つて支度をする處もありて、いよ／＼其の夜になれば、或ひは二人或ひは三人づゝ手分けをして、新婚のあつた家とか又は新築の落成した家とか、或ひは素封家などの家へお祝ひに出懸けるのだが、此處へと思ふ家の前に至れば、先づ玄關へツカ／＼と進み行き『どへ／＼／＼』と云ひ『どひ／＼／＼』と唱へながら、豫て作りおいた藪の馬形や松竹梅を挿した大根切れを、ソツと式臺において急いで逃げ出すのである、又家の構造によつて玄關に闖入しがたい處もある、其様家には入口の戸口に立ちて『どへ／＼／＼』『どひ／＼／＼』を唱へて祝ひ物を置き、大急ぎで飛び出して生牆の蔭とか門の傍らとかに隠れて、家の舉動を窺つて居るのである。

この祝ひ物をされた家にては、其の馬の形や松竹梅その他の目出度品々を受け納

め、丁寧に之れを神棚に供へるのだから、之れを載せてある盆をその儘につき返すことは出来ない、盆の上にはお供餅を一重とか又は二重に、金を何程か紙に包みて添へるもあれば、酒の二升樽ぐらゐを盆の上に乗せて、元の處へ出し置くのであるが、夫れも單に祝ひ物に對して是れだけの返禮をするばかりでない、此處が一種の奇風が存する珍習であるのだから面白い、其の返禮の品物を盆に載せて出すまでに、ソレ若い者が來たと云ふと大急ぎで家内者や男連は、玄關や入口の陰へ手桶や桶に水を一杯汲み入れたるを備へ、屈強のものが柄杓を構へ向ふ鉢巻といふ扮装で控へるもあり、又は大きな硯に墨を澤山に摺り溜め、太い筆に十分に墨汁を含めて今や遅しと待ち設けてゐる。

若い者の方では陰に潜みゐて、盆の上に返禮の品が載つて出るを待ち受け、ソリヤこそ出たとするや、隙をねらつて手早く之れを取り去らんと駆け込んで来る、此の時待も構へてゐる家内の者は手桶の水をザブリ／＼と濯げる、墨を塗らんとする

者は、墨汁のボタリ／＼と滴る筆を振りまはして、若い者の顔を目懸けて塗りにかゝる、其の騒ぎは中々大變なもので、双方入り亂れて逃げつ追れつする中に、ザブリ／＼と水をかけられるのだから堪らない、返禮の品を持つて逃げ出すまでには、十に七八は水をかけらるゝか墨を塗られるものだ、で、中には簑笠を着てゐるもあれば合羽を纏ふてゐるもあり、水を打ちかけられても墨を塗られても、着物を汚さぬ用意をして行くのである、これを稱して水祝ひと云ひ一年の行事中で最も興あるものとされて居るのだ。

扱て若い者等は斯くして貰ひし金銭または物品を、其の集会所へ持ち寄るに夜の十時頃にはお供餅の山を築き、祝儀の金も十圓や十五圓は集る、酒も二三斗となる例であるので、村の娘連を手傳ひに頼み雑煮餅をこしらへる、又は料理をさせたりして是れから大酒宴を開き、終夜面白く騒ぎ散らして目出度解散するのである。

黒石の蘇民祭

(陸中)

陸中国黒石村の山内薬師に蘇民祭と云ふものがある、毎年陰曆正月七日の午後四時より執行する、此の行事は中々盛んなもので、實に奇觀を呈するから遠近より見物群集し、境内立錐の地なく押合ひへシ合の騒ぎを演じてゐるのだ、其の主動者となるもの二十歳前後より三十五六歳まで壯年血氣の者で、各村々から集つて来て皆裸體と成り、各々口にジャツサ／＼と叫びながら、堂前の小川へ蛙のやうにザブリ／＼と飛び込み水行を執るのだ、水行を執り了ると濡れた儘の裸體で本堂に參詣し又ジャツサ／＼を口にして水中へ投じて水垢離をしては、本堂へ駈て行くさまは壯快である、近來は若い女も男子に立ち交つて水垢離を執る者あり、何れも湯具一ツに成つて眞白な肌を寒風に晒し、川水に浸して平氣でジャツサ／＼を唱ふるは、他に見られない行事である、斯く川へ飛び込みては本堂へ參詣する時は、堂内には裸

體男と呼ばれる者があつて、水垢離を執つては上つて來る男女に、二三粒づゝの米を與へるを口中に受けて、又た川へ飛びこみ飛びこみすること三十三回に及ぶのである、到底も頼まれて出來る藝當でなく、都會の男女は聞くも身に粟を生じて縮みあがるであらう。

一方では頻りに水垢離を執つては本堂と川との間を、彼方此方と駆け歩いてゐる時に、お堂の兩側には妙齡の女が犇々と列を爲して並ぶ、其の中には随分良家の娘もあれば、又貧乏人の小娘もある、花羞かしき美人も交れば、イヤハヤ二目と見られない醜女もあるは仕方がないが、兎に角鬼も十八番茶も出端の女がツラリと並んでゐるのだから、一種妙な氣分が棚引いて女護の島の女が迎ひに來たかと思はれるが、それ等の女にも亦た心願があつて、宵の口から夜の明けるときまで『揃ふた、揃ふたよ、山内そらふた、上には妙見、下には薬師』と聲を揃へて唄ふてゐるのだ、さてそれが何の心願かと云へば、此の蘇民祭の夜に、東の空の白むまで、此の揃ふた

の歌を唄ひ續けると美音になるとの迷信である、で、音曲を遣る女は競ふて來るから、中には一寸仇ッぽい踏めるのもあると、土地の好事者は云つてゐるが眞偽は保證の限りでない。

夜は正九時になると『火焼上り』といつて材木を高く積み重ねて火を焚く式がある、この火が消えかゝるを合圖に、鐘つき堂にてゴーン／＼と鐘を鳴らす、この鐘の鳴るのは『別當上り』といひ、薬師の別當が本堂に上つて式を開始するの合圖である、此のゴーン／＼の合圖の鐘の鳴る頃には、水垢離を執るものも大抵行を了つてゐるから、ソレ別當上りだと若者は我れ先きに別當の家に押寄せ、門内の庭に群集してワイ／＼と罵り狂ふのだ、其の群集の十分に寄り集りたるときを圖つて、別當は群集の人々に向つて櫂の木で作つた、長さ二尺餘の棒を五十餘本バラ／＼バラ／＼と、群集は我れ勝ちに之れを拾はんと争ふのである、此の棒を拾ひ得たものは、別當を警護して本堂に登り得られるからだ、群集の争ひ少しく鎮靜

するを待つて別當は威儀を正して出る、斯うなると最う棒を争ふことは出来ぬ、現在拾ひ得たもの警護の任に當り、静かに練り出して別當が神前に跪くと、棒を持つ者は之れを打振りくして妙な身振をするのだ、其の中また鐘樓で鐘をつくが、今度は『鬼子上り』と云つて父母の健在な七歳の男兒を背に負ひて堂に登る合圖である、則ち鬼子上りの式にかゝると別當は背負つて來た小兒を受取り、神前にて暫らく祈禱をした後、小さい布袋を群集に向つて投げ與へる、是れが蘇民將來と云ふ守り本尊であるから、この布袋を得やうと例の裸體の壯丁はジャツサ／＼の聲を揚げ、凄い勢ひで奪ひ争ふて揉み合へし合て、何れかが其の實體を得れば、それを得た村は當年の豊作であると言ひ傳へられてゐるのだ。

山中のおくせん (加賀)

加賀の國大聖寺を西南に距ること凡そ三里ばかり、江沼郡山中村と云つて温泉の

出る處がある、兎角温泉場などに男女關係の多いやうで、此の村も入浴者も來れば土地の者は、また他國人に依つて生活する者もあり、人氣は餘り宜しい方ではないが、若い男女の間に行はれる惚れた腫れたの沙汰は絶え間ない、そして其の馴染みとか交情とか云ふ意味の方言が、則ち『おくせん』であつて、又一ツには簡易自由結婚との意味にも通ふのが此の『おくせん』と稱する言葉である。

全體この土地では男女關係が頗る盛んであつて、現代語で云つたなら自然主義の流行する處らしい、或る點に於いては、ト開けて過ぎて居るほど開け、若い女と若い男の交際は何等の障壁もなく自由であるだけ、夫れだけに所謂方言の『おくせん』なるものが、中々盛んに行はれて年頃になると、始んど戀愛熱に浮かされな者は無いのだと云ふ人もある、併しそれは餘りに誇大した言であつて、如何に男女の交際が發達してゐてもマサカ姪風が左様に激しく吹き荒むことはあるまい、是れ等は湯治場の一面より覗いた觀察で、土地を仔細に研究したのでは無いのである。

然れどおくせんの多くあると云ふ事は争ふべからざる事實で、淫微の俗たるは免かれ難いのである。

是れ等の一例を以ても其の一斑を窺知するに足るは、假りに甲家に一人の息子があつて、一寸男振も悪くないし資産も可なりにあるとする、之れに對して一人息子に嫁八人と云ふ傾向があつて、而もそれが「おくせん」に據つて成功せんとする女がある、斯ういふと随分ツウ／＼しい者と思はれるが、該地方の女は大抵男子に對する愛は金にあるが多い、財産を目的にするが多い、眞正の清い戀愛は殆んど認められない、彼れでも果して心から男を思ふ女があるかと思へる位、是れが石川縣一般の風俗の様に思はれる「おくせん」なる者も、亦た此の軌道は脱せないのだ、其の女が利慾の爲の戀であるか無いかは別問題として、兎に角乙家の未婚の女が甲家の息子を思ふたどすると、能く悪口に、三浦三崎は女の何々と云ふが、豈に三浦三崎のみならんやであるよ、山中村の娘はノコ／＼サイ／＼と情夫の許へ夜／＼尋ね

るのだ、男の方から女を尋ねるのは珍らしくないが、此處のは其と反對で、女の方から雨が降らうが風が吹かうが、平氣の平左で尋ねて來るのである、息子の方では其の來るを待つのだ、處で、父なり母なりが夜中女の尋ねて來るのを知らない筈はない、一晚や二晩は知れずにも居やうが、阿漕の浦に曳く網ならねど度重なれば知れるものだ、けれども若い男の處へ若い女の尋ねて來るは土地の風習として怪しまない、却つて女が來ると父母の方で避け、面を合さないやうにして居る、ア、何と云ふ親達ではないか、如何に習慣とは云ひながら随分な奇風である。

馬には騎つて見る、人には添て見るの諺のある通り、好きな人なら千里も一里で女の方からセツセと尋ねて居るうち、互ひに心と心が打ちどけて、それでは女房にしやう、お内儀さんに成らうと約束が整ひて、双方が結婚を承諾すれば何事もなくいよく三々九度の祝盃を擧げるに至るのだが、若し男の側で女に對して冷淡であるとか、又女の方でその男に壓倦が來たとか云ふ場合には、何れからでも「おくせ

ん』を取消せるのである、交際を断絶するには其の断絶せんとする側より、心附けと稱して金子若干を與へるのである、世に云ふ處の手切金であるのだ、斯う成つた場合は何うであるか、悲劇が行はれはしまいかと思はれるが、實に冷々淡々としたサツパリしたものだ、昨夜までも今朝までも愛した男を捨てること蔽履の如くだから驚かざるを得ない、女にして然り、以つて一般の風儀を察するに足るであらう。

日本一の大提灯

(三河)

三河人の自慢するもの、一ツに大提灯がある、これは日本一と云つて誇るに足るものだと云つてゐる、去る明治三十三年五月廿四日明治天皇の岡崎驛御通御の節も天覽に供した事もあつて尤も有名なものである、處は三河國岡崎驛を西尾鐵道に乗換へて僅か一時間で達する、在郷の濱方にあるのだ、先づ其の日本一と稱する提灯の大きさから書き立てると、此の濱方を大寶、上、下、宮前、諏訪、間濱の六組に分けてあつて、各組から鎮守へ一對づゝ奉納してゐる、其の中最も大きいのが間濱組、長さ四間二尺、周圍三間三尺あるのだ、それに何れも文字と繪畫がかいてあつて、文字は何だか随分小六ヶ敷いから止めて、繪だけを記せば大寶組が八咫鳥の圖と金鵝の圖、上組が景行天皇筑紫御征討の圖と日本武尊碓氷峠眺望の圖、中組が天の岩戸の圖、宮前組が大塔宮凱旋の圖、諏訪組が白拍子靜の舞の圖、間濱組が耶馬臺詩の圖である。

何うして此様大提灯を氏神へ奉納することになつたかと云へば、之れには一ツの理由があるのだ、今でこそ此の土地も開けて人家櫛比すれども、五六百年前は三河灣の濱邊で磯打つ浪の寄せては返す音のした處である、丁度その頃の事であつたらう、此のあたりに夜なく海から魔性の者が現はれ出で、田畑を暴しまはることは勿論、時には人畜にも害を與へることが多くなつて來た、それが防禦をすればする程、其の害が段々ひどく成つて今は防ぐに道も無い始末となつた。漁夫や百姓は毎

日々寄合つて何うかして此の海魔を退治しやうと相談をしたが、中々好い智恵が出ないで困り切つてゐたのである、若し手出しをして海魔の怒りに觸れこの上の難儀に及んでは大變だと、誰れあつて退治に出やうと云ふ勇者がない、幾日も小田原評定に日を送るうち、此の上は最う外に手段の取るべきやうがないから、鎮守様のお力を假りて退治をして戴くより外がないと、一同は相談を決して鎮守の宮前で大篝火を焚いて、海魔除の祭禮を執行したのである、神も氏子の難儀を憐みたまふたと見えて、夫れからと云ふものは其の害が無くなつたので、土地の人々は大喜び爾來年々歳々、この神事を繼續して來るうちに、彼方に一軒此方に二軒とチラバラにあつた家も次第に人煙稠密になつて、大篝火を焚くに不便を感じるやうになる、處で篝火に替るに大提灯を奉納したら宜からんと協議一決し、其處で一村落を六組に分け提灯を奉納したのであるが、最初は提灯と云つても其様馬鹿氣て大きい物でなかつた、夫れが漸次競争の結果、今のやうな途方圖もない大きな提灯を

造り、日本一と誇るまでに成つたのである。然れば一度は見ぬも馬鹿二度見るは尙ほ馬鹿なごと里謠に唄ふも面白い、兎にも角にも大きいと云つて並大抵でないから、之れを點けるとき其の柱を建て家根をこしらへるは中々大變の騒ぎで、小家一軒作るほどの手數と材料と費用を要するので、この献燈は氏子に取つて一大負擔であるから、經濟上の關係よりして組員を拘束して容易に他組に移るを許さない、假令は間濱組のものが字上屋敷即ち上組に移轉するとしても、其の人は依然として間濱組員となつて、其の組合の負擔を分擔しなければ成らぬ、若しまた他方面即ち六組以外の地より移住して來る者があること其の身元を引受る人の住する組合員に加入させ、其の組の分擔を爲すやうな仕組になつてゐる、制度の奇なこと奇には相違ないが、大提灯の日本一と誇りこれを吹聴するに力めるも亦た奇である。

火祭の押繪競争

(越前)

越前國坂井郡丸岡といふ處には、毎年舊曆正月十三日十四日の兩日火祭の式を行ふ、昔は町内の秋葉神社に於いて執行したのだが、今は社も頽廢して無くなつたので、之れを町内に移して本町一丁目二丁目三丁目の家持の中で、順番に一戸つゝ其の祭の式場に充て、早朝から座敷正面の床の間に造酒を供へ燈明を掲げ、之れを假りの神殿として行つてゐるのだ、其の家は軒庇の上より二階大屋根の間、即ち二階の表に面する窓を閉ぢ、此處に多く押繪の額を掛け列ねるのである、是れが當日の呼び物で有名な押繪の競争だ。

此の額は大小各種あつて大きいのは横三尺竪一尺七八寸ある、式場に充てられた家は勿論、其の他町内の家にも皆美しく造り上げて持ち寄るが例である、又式場ばかりでない各家にも押繪の額を飾りて、往來の人々に其の出来榮を誇るのだ、押

繪の種類は牛若辨慶五條の橋、景清三保の谷の鑲引、花魁の道中其の他歌舞伎淨瑠璃に因む繪模様、又は各所の圖など思ひ／＼に造つて出すのだから、此の頃になると押繪形また繪形／＼と呼び歩いて賣る商人の來る程で、押繪下地となる紙形を賣る家は出来る、其の紙形といふは厚紙にて造る、武者、藝妓、花魁、娘、小供などさまざまの形がある、一面の額にするだけ一組づゝ成つて便利に出来てゐる、又出来合では面白くないと云つて、自分が造らうとする繪模様を豫定し、紙形を彼れのはれのと取合せて買ふ人もある、それが總て切抜繪のやうに組立ての出来るやうに成つてゐるから、少し器用なものには誰れにでも容易に造られるのだ、

さて十三四日兩日は之れを見んと人々が町内を散歩し、其の賑かなことは年中第一であるが祭場に充てられた家では、居間も臺所も一戸残らず明渡して、之れを町内の者に委すので有るから、家内の者は住つて居られない、大方は近所の懸念な家とか親類に焼出されの如く居候をするのである、で、式場では思ひ／＼に酒肴を整

へるもの、蕎麥を打つもの汁粉をこしらへる者、大騒ぎを造つて晝夜宴樂に耽つてゐるが、家の者も一般の人と同じく客になつて入り、或ひは飲み或ひは喰ひして樂しむも面白い、此様風であるので平生町内の交際が悪く憎まれるとか、何か遺恨を含まれて居る家などになると、酔にまぎれて疊も建具も滅茶くんに損じさせるから、祭りの濟んだ後修繕に大層損害を被ふるさうである、けれども此の時の事に就ては苦情を些とでも云はない慣例で、泣き寝入に成つて了はねばならないのだ、此の行事がある爲めに町内の交際は年中圓滿に行はれ、音信贈答なども手厚く親睦されてゐると土地の人は自慢してゐる。

當日の酒食宴樂の費用は別途經濟として、常に其の支出法が設けられてある、夫れは他の地方より此の三ヶ町内に移轉し來る者は、神酒料と稱して金二圓を町役場へ納め、又町内に出産あるときは幾干、智取り嫁取りした時は幾干と云ふやうに徴收しおき、其の積立金を費用に充て不足を又別途方法によつて補ふのである、然れ

ば十三日の午前からは是れ等の會計に與かる年行事が、祭場と定まる家に集會して積立金を調べ、この日を宵祭と呼びて午後からは酒宴を始めると、町内の者は入れ替り立ち替り出入して飲食するのである、又維新前までは此の式場となる家の前道路の中央に、大きな左儀長を造つて飾りおき、十四日の夜になると全町の町火消が總出で物々しく警戒をしつゝ、笛や太鼓でヒュー／＼と囃し立てる賑かさ、其のうちには時刻は可しと左儀長に火を點ける、煽は炎々として空を焦し火の子は四方に散亂して危険であるが、火消の警戒嚴重であるから出火を生じたことは無かつたけれども維新後は左儀長を燼することは廢したが、押繪の額を造つて持ち寄ることは今も行はれてゐる。

山中の牛供養

(出雲)

雲備國境の山脈が續いて山また山ばかりの窪地に、一農村の大部落を出雲國飯石

郡と云ふ、この郡は三刀屋外十六ヶ村より成り立つて丁度菱餅の形を成してゐる、何れも山谷の間にある處とて娛樂と云へば、氏神の祭盆踊りに過ぎないと思ふけれど、此處には五月の初め若葉がくれに、田植歌うらゝかに響く牛供養といふ最大娛樂の日がある、此の日は他地方へ出てゐる者でも必ず歸村して、村民と樂みを共にする盛大なもので、牛供養の起原は詳かでないけれども、傳へ云ふところでは千七八百年も前からある行事だと、土地の人は郷土の誇りとしてゐる、何にしても餘ほど古くから行はれて居るものに相違はないのである。

往時は伯樂の催したものの由であるが、近時は農家に於いて行ふを例とする、牛供養を行ふには最初村内の束ねをするもの、昔でいへば庄屋、今ならば村長とも云ふべきもの、組頭へ相談をして自分の居村を中央に、隣村の組々へ通知して米麥その他の穀物、また雜品の寄贈を依頼するのである、それには「來る何日私方にて牛供養を執行いたします、牡牛何頭に植女何人御招き申します」と云ひやるのだ

處でこの通知書を出すと隣村から隣村へ傳へ、段々五ヶ村から十ヶ村に知れ響きの物に應ずる如く、全郡十六ヶ村へ忽ち知れる、それがまた近郡へも知れ渡つて來集する者は實に夥多しい人數となるのだ。

催主は其の前より數十人の傭人をして、各村々へ寄贈の物品を受取りに行きて集め、これを自分の家は素より近所の家二三軒も借りて、其處へ貯へて當日振舞の料にするのである、扱てまた催主の庭前には祭壇を築き、神官や僧侶のお迎ひと云つて、之れを迎接する準備を爲すなど支度萬端整ひ、いよ／＼當日となると、豫て設けある祭壇に於いて最初に神官が祭文を讀む、それが濟むと今度は僧侶が般若の轉讀を行ふので行ひ、一旦朝の式を終れば物品寄贈主即ちお客に晝餐の馳走をする酒肴を列ね山海の珍味を並べ中々立派なものだ、是れは即ち當日の前座であつて是れから牛供養の本物となるのだ、各飼主が自慢で曳き來た牡牛、何れも雄大なもので威風堂々鎮勇の姿をそれ／＼の繋留場に休めてゐる、その數百を以て數ふことも

ある、牛は何れも紅絹または赤き木綿に綿を入れた太き紐を首飾りとし、脊には鞍をおき黒漆あれば朱漆あり、思ひ／＼の色彩に金銀にて皆飼主の定紋を附しある、尙ほ鞍の所々には肩鑰なるもの銀色なるもの、金具に裝飾を施し、其の鞍の上に黒塗の竿を立て、竿頭に權の晒皮の總をつけ、定紋打つた木綿または絹の旗を涼風に翻へし、時の来るを待つて居るのである、やがて午後二時ごろと成るやソロ／＼牛供養開始の支度にかゝり、三時ごろより牛には二人の附添人が従ひ、漸々列を爲して會場へ繰り込むのであるが、當日先頭に立つ牛は贈物の最も多かりし持主の牛を以てする處から、贈品を競ふ弊は免かれない、此の牛が列を爲して通る道は注連を張り梵幟を立て神旗を吊し中々の奇觀だ。

牛供養の耕田は山腹の畦田を撰び、笛鼓の音賑かに繰り込めば、牛を扱ふ者は牽手と鼻持は絶えず掛聲をして、他の牛との衝突を避けしめ、正装せる大牛が旗を脊負ひて田の中を馳せ水烟泥烟の飛散する状は、云ふばかりなき壯觀であるが、それ

を代撞といひ十五番あつて終ると、今度は五六十名の早乙女が紅白染分の手拭を姐さん被りにして、色手襷をかけ揃ひの姿で田中に下り、牛供養節といふ田植歌の一種を唄ひて插秧をやるので、之れを指揮するものを左下と稱し、陣笠をいたゞきゐるが其の後には浴衣に五色の手襷をかけ、花笠を被つた囃し方が數十名、三拍子の囃しにつれて身振面白く挿秧する、其の美しさ云はん方なしである、見物は群集するので露店なども澤山出る、大抵夕方までに無事に式を終る。

明石の大どんど (播磨)

播磨國明石の海邊に行はれる大どんどは、昔より尤も有名なものである、毎年舊曆正月十五日の早朝漁民の手に依つて行はれる、此の行事を見んと近郷近在は申すまでもなく、随分遠方からも態々群集するので、さしも廣い海濱は人を以つて埋める盛況を呈するのだ、此の大どんどは各濱々にて一ツ宛之れを組立つるのだから

其の數も十餘所にも成り、夫れが火を點けて火焰バツト立ち昇つて、天を焦す光景は目凄しく、其の壯觀なること名状すべからざる奇絶悽絶である。

斯くの如く大掛りであるだけ、夫れだけに各濱々の漁民どもは、自分の濱方のどの他濱に劣らないやうにと、熱心な競争をするが古來の例で、宛も其頃になると濱方の壯者は殆んど狂者の如く、猛烈な勢ひを以つて門松や注連飾を蒐集する、此の期間は決して何事も手に附くものでない、マゴ／＼すると張り飛ばされたり、撲り合が始まつたり氣が立ち、一般に荒つばい人氣に成つて了ふから怖い、そして漁民どもの活躍を開始するは、毎年三ヶ日を了ふと徐々準備にかゝるので、七種前が尤も激烈な競争を演じ、時に意外な椿事を惹き起す騒動を生ずる事もある、何うして其様騒擾までを起すかと云ふに、畢竟するに各戸に就て門松や注連飾の奪合ひに起因するのだ、それで三日の夜には各濱方の壯丁は各々部署を定めて、四日の朝になると門松や注連飾の蒐集を始めるのだが、此の時は壯丁が三々五々隊を組み

村内は素より市街へ押出して口々に唱へる言葉は、

『おしめわら、くウだんせ、くウだんせ、くウだんせ、くりくだんせ、くウだんせ、一輪か二輪か三輪か四輪か、濫い鳩ほうち出せ、良い鳩内へ入れ、明け六ツに鶏が鳴く、こけこツこう』

斯くの如くであつて、注連飾りを乞ひ歩くのである、夫れが一組や二組でない、兎に角當日どんどの式を擧げる十幾所の漁民が、自分の濱方のどんどを盛んにして、其の大なるを誇らんとするのだから、十幾組が隊を組み黨を結びて押し歩き、市街へ入り込んで来る譯で勢ひ衝突は免れ難い、甲組の一隊が集めた物を乙組の一隊が見附け、之れを奪ひ取つて持ち歸らんと襲撃する、此方はまた防禦策を講じて敵の襲撃を卻け、之れを追ひ拂はんと力戦奮闘を開くのだ、斯かる場合には奮戦するものと、注連飾を奪ふものと豫め手分をして、一方では敵も味方も入亂れて掴み合、撲り合が行はれて混戦状態に入るを圖り窃かに裏より廻るとか或ひは飛び出すかし

て、蒐集しある注連飾を奪ひ去らふとすれば、ドッコイ其の手は喰ぬと此處にも又騒ぎが持上るのだが、結局は弱者が強者に制せられて襲撃した方が強ければ、目的通り敵を追ひ散らして割歌を奏し、折角集めた物を引ッ擔いで引き揚げるも、敵が若し強いと撃退されて虻蜂とらずに追ッ拂はれるのである。

此様騒ぎを遣て集めた注連飾は、飾倉と稱ふる一定の場所に貯へ置き、いよくどんどの前夜則ち十四日の晩の如きは、不寝講と云つて各濱ども一人も枕に就くものなく、飾倉に番をして敵の襲來を禦ぐのである、斯うして翌十五日の朝どんぞを行ふのだが、其の演り方は數十本の竹を竝に組み立て、周圍に夥だしき注連飾を以て纏ひ、竹の先端には紙にて造つた種々な海魚の形を拵へて縛りつけ、小山の如きもの、下から火を點けるのだ、火焰の盛んに燃上るに従つて、竹は激しく音を立て、爆發する、其の偉觀は實に壯重のものであつて、此のどんどの海面に向つて燃え倒れる時は、當年の漁獲が多いと云ひ、漁民どもは喜び狂ふのである、で、大抵は

どんどの海面に向つて倒れるやうに組立て、之れに點火するを例とするさうである維新前には藩の武士が騎馬にて立會ひ、火の燃え上ると其の周圍を騎りまはしたものであつたが、現今はその騎士だけは無くなつたと云ふ。

大黒とお福の祝儀

(讃岐)

是れ等は一種の奇風が、營業のやうになつて今では乞食視されて居るけれど、近時でも正月には流石に之れを乞食せず、福の神として扱ひあるも亦た奇である、此處が人の心持の面白いところであらう、夫れは何であるか、讃岐國高松地方に行はれつゝある事で、十四五歳の男の子が額に小さな大黒天の面を被つて、手に張子の槌を持ちながら「一ツに俵を踏まへて、二にニッコリ笑ひ顔、三にお酒を造りこみ四ツ世の中好いやうに、五ツいつもの如くなり、六ツ無病息災に、七ツ何事ないやうに、八ツ屋敷を建てひろげ、九ツ此方へ倉を建て、大判や小判や一分や二朱や白

銀なんぞが湧て来て、福は此方へどツさり』と節可笑く唄ふて来る、それが戸毎に立つて同じ歌を繰返し、市内を巡るのだ、昔は是れも強ち貧乏人の小供のみの事ではなく、相應に身分のある家の小供でも、初春に斯うして出ると其の年の幸福を得られるとの迷信から、随分出たものもあるさうだが、當時は之れに對する市民も無論乞食扱ひなどはしない、此の時は餅を與へるが例にはなつて居るから、夫れ益なごに載せて餅をくれたものであつたが、近頃は一種の營業のやうに成つて貧乏人でも、最下等の生活をする者が出て来る處から、兎角に乞食視せられて餅の切ツ端や、孔のあいた錢のある頃は一厘錢や文久錢などより與へないやうになつた然れど正月には延喜を祝ふを喜ぶので福の神といはれ、貰ひ物も割合に多くあると云ふ。

また是れと好一對にされてゐるのはお福の祝儀である、此の方は十五六歳ぐらゐの小娘が出るので、大黒さん澤山には來ないし、女の事でもあるから歓迎される傾

きがある、何れ此様ごとに出て来る女だ、決して身分のある者や相當教育を受けた者が出る筈はない、貧乏人の娘で而も莫連の卵子に極まつてゐるのだが、其處が女と云ふ名だけで妙に人氣が集まつて来る、日本の本は岩戸神樂のむかしより女ならでは夜の明けぬ國』と云ふのは此處だらうと笑止い、で、大黒さんとお福とは甚だ仲が悪い、大黒さんはお福を見ると之れを逐ひ拂ふとするが、幾干男でも大黒さんの方は小供だ、お福の方も小娘には違ひが無いけれど、男と女と比べるご此の年頃では女の方が確に理智の發達してゐるから、中々大黒さんの妨害に乗らない、却つて逆襲して大黒さんは這々の體である事さへもあると云ふ。

さてお福の祝儀と云ふは何様風だと云へば、十五六の小娘がお福の面を額に戴き見すぼらしき扮装で寒さうに先に立てば、其の後に年取つた半婆さんが手拭被り柳行李の小さいやうな物を風呂敷に包みて首に掛け、之れに貰ふところの餅や錢を入れて供をするのである。而して此のお福さんの唄ふやうに喋舌る言葉を聞けば、

ものもう、どうれ、西の宮の福でございます、年内には嘸ぞお事多ございましたらう、どなたにも好いお年をお重ねなりましたか、福も好い年を取つてさんじました、之れからお福がお庭ならしの一踊り『さまとさア、手を引合ふて、小石川渡るさよとせ、お福がこけても鼻打たぬ、ぐるりが高ふて中低で、なんでもお福はしなものぢや』ヤレ〜福が踊りました、福にお祝ひなさりませ、福はねつから慾氣はござりませぬ、おほ〜。

此のやうな事を繰返してゐるのである、夫れが口に馴れ切つて極めて滑かにス〜と出る調子は、大黒さんの一に俵を踏まへての言立てより、聞き馴れた耳にでも面白く聞かれるし、其の聲が優しい若い女であるので、何となく艶もあれば、色氣も含まれてゐるから、一層に勢力もあるのであらう、併し此のお福に出る女の顔は決して見るべからずと云ふことだ、顔や服装を見たらお座が醒るからである。

中村の馬逐

(磐城)

磐城國中村の馬逐は古來名高いもので、東北に於ける奇習の一つである、それは毎年七月十二日炎天焼くが如き盛夏の時事に行はれるのだ、舊中村藩の頃は五月中旬の申の日に、野馬を捕へて藩主の先祖の靈廟に獻する嘉例があつて、その前日に行はれたものであるが、近時では七月十二日に行ふことに成つたのだ、今は昔日ほど盛んでないが尙ほ面影を存し、中村の馬逐ひと云へば東北線の汽車は見物の旅客で充満するさうである。

馬逐の前日になると以前は藩主が大將となり、家老が副將となり、全藩の士卒を引率して夜の黎明お城を出たものだ、南へ三里往き鹿島驛で一吋休み、又一里で原驛に到ると兩大將は定宿に就く、其の他の將校は各々役日に應じて町屋に泊るもあれば、又野陣を張るもあつて何れを見ても定紋打つた幕や旗が、風に翻々と儼

つて壯觀を極めてゐる、原驛の西に夜森と云ふ小高い丘陵があつて此處に登ると狩場の全體を見下すことが出来るから、本陣は此の山に据ゑられるので、一に之れを本陣山と稱するに至つた。

いよ／＼當日となつて朝東の空の白むころ法螺貝が鳴る、一同は直ぐ食事にかゝつて武裝を爲す、やがて出陣の太鼓がド、ンドンドンと鳴ると、先陣本陣後陣と順々に繰出して行く、弓や鐵砲や槍や薙刀の團隊もあつて、兵士は何れも甲冑に身を固め、中には陣羽織を著たものもある、大將は金鍬形の兜に緋絨の鎧、連錢蘆毛の馬に金覆輪の鞍おいて豊かに騎られるのだ、近習小姓などは何れも今日を晴れと甲斐／＼しくその周圍を取巻く、エイ／＼の掛聲勇しく徐々と進むうち、旭日は昇つて霧は晴れる、見物の男女は此處の山かしこの丘に梅々と詰掛けて、今日の盛況を見落さじと争ふて居る、合圖の法螺の貝や太鼓の音が響き出すと、小銃や大砲の音が晴れた空に百雷の轟くやうに震動し、黒雲は此處にも彼處にも叢立つて漲つて

来る、今まで何氣なく草を喰つてゐた野馬は、膽を潰して右往左往と逃げ迷ふて五匹十匹と打ち群れて森の蔭やら藪の中から馳け出して来る、ソレ馬が出たと血氣の兵士はそれを追駈け、追ひ廻して一方の柵中に追ひ込もうとする、馬はドッコイ其の手は喰ぬと入口を駈け抜ける、この時首尾よく追ひ戻して柵内に押込めた者は、實戦に臨み敵の甲冑を掻き取つたと功を同じうするのだから、血氣の若殿原は獅子奮迅の勇を鼓して暴れ馬に當る、果ては人も馬も汗塗るになつて沙塗れになる、四周の見物は手を拍つてヤンヤ／＼と囃すところは天下の壯觀である。

翌る日は藩主その他の面々は禮服用で、城内の靈廟に拜して、それが終ると柵内に入れた野馬を手捕にするのだ、其の方法は竿の先に細引を結んで馳け歩く馬を無暗やたらに撲くのである。其の中に細引の端が馬の首どか足どかに巻き付く、馬は不意を喰つてドツサリと倒れるか、或ひは人をズル／＼引き摺つて駈け出すのである、其の折り屈強の若者が大勢立ち現はれて、或ひは首に飛びつき或ひは尾に釣

る下りして捕へんとする、馬は死物狂ひであるから嚙付かれるもある、蹴飛ばされるもある、又蹂躪られて氣絶するもあるので、今の言葉で云へば衛生掛りとも云ふべき醫員が馳付けて介抱する騒ぎである、斯くの如くして柵内に入れた野馬は一匹も残らず捕獲するのだ、夫れが済むと今度は馬市と云つて其の野馬をヅラリ並べる其處へ身分ある藩士が来て馬を求めろのだが、それは今日のお祭に供へるまで、後には舊の處へ放つのである、馬逐の概略はこんなものであるが、無意義な遊戯ではなく、太平の永續して士氣の衰頹するを鼓舞せんとしての、一年一回の祭禮であつて一の演武であつた、處が現今のものは只だ其の面影を遺してゐるに過ぎないと古老は嘆息する者が多い。

鳥追ひく

(信濃)

地方くで同じ年中行事でも處變れば品かはるで、種々異なる方法を以て遣つて

ゐるのだ、信濃國上水内郡にて行はれてゐる鳥追ひも、亦たその一例で少しく變つてゐる點がある、各村々の少年は舊曆正月十五日の朝になると、惡戯盛りの面白半分手に手に羽子板と白樫といふ木の枝どを持つて、甲斐くしく扮装隊を組んで村内を押し廻るが、是れは云ふまでもなく田の收穫に害ある鳥類を追ふ厭禁にするので、少年が盡すべき義務の一つとなつてゐる、で、此の日の朝になると彼方からも此方からも、小供の居る家よりはヒヨコリくと色の黒い見るから親の手にも餘りさうな頑童が出て來て一團となるや、其の中でも餓鬼大將となつて常に村内の少年に敬意を拂はれてゐるものが、羽子板を彼の白樫といふ木の枝で、力任せに打ち叩きながら『さア鳥追ひちやく』と指揮すれば、一同が『鳥追ひちやく』と和してボン／＼カン／＼と叩き出して、村内の少年を残らず集めるのだ、それが此の羽子板を叩く音が聞えると、忽ち集合して一大隊の少年團が組織されるのである。人数がいよ／＼集つたとすると音頭取りの餓鬼大將が、鳥追ひの文句を並べて叫

び出せば一同が一生懸命大きな聲を張りあげ「雀ごの、鳥追ひだ、燕ごの、鳥追ひだ、二ツに割つて切りさいて、三ツに割つて味噌つけて、四ツに割つて湯を注いで鳥籠へさらひ込んで、佐渡ヶ島へほらアへ、佐渡ヶ島に席がなきや、鬼ヶ島へほらアへ」と和しつゝ、繰り返して唄ひ、例の羽子板をボン／＼カン／＼と叩きて調子を取り、又唄ひ出しては村内を巡りあるくのである、若し此の出で来ることの遅れた少年があるとか、又は顔を出さないものでもあると、此の一團はその家の前に往きて、羽子板を叩いて調子を取りながら「何某どの寝坊で、阿母さんのお乳を甜つて、粥の箸を甜つて、まだ鳥をも追ねえやア」と囃し立て／＼して嘲けり笑ふのである、少年としては仲間外れにされたやうな気がして堪へられないので、大抵な病氣で寝てゐるものでも、此の時は起きて十五日の朝は屹度鳥追ひに出るのだ、それが妙なことは如何に病氣であつても鳥追ひに出て、跡で病氣が重くなつたものは未だ嘗て村内に無いと云ふ事だ、果して其様靈威があるものか何うかは知らな

いけれど、土地の人は固く信じて疑はない處を見れば、萬更に偽でもあるまいが畢竟氣が立つてゐるからだらうと、或る醫師は言つて居たさうだ。之れが各村で遣るのだから、其の聲や羽子板を叩く音は山彦にひいき、彼方でもワ／＼と答へるやうに思はれ、埒にゐる小鳥は吃驚りして飛び立つさうである少年が斯くして其の居村／＼を回つて歩くうちに、村内に年男と云ふ役廻りに當るものがあつて、それがセツセと小豆粥を煮て、この少年等の勞を謝する爲めに喰せる支度をしてゐる、最う少年團の歸る時分と思へば、小豆粥の中へ粥柱といつて餅を入れ、グツ／＼グツ／＼煮出すのである、例の樫の木にて太箸を作りおいたものを用意し、之れを諸の神に供へて一同に揃ふて祝ふのだ、又個人／＼の家にもこの小豆粥は同じ事である。この粥を祝ひ了ると門松を取り注連飾をのけて、年男はイザ福をお迎へ申すと云つて、大きな杵を持出して來て之れを高く振振り、大きな聲を出し「むぐらもちら

谷へ行け、福の神は内へ来い、鳥は山の巔へ行け、蛇や百足は澤へ行け」と繰返し
くして高らかに唄ひ、家の外へ飛び出すと又もやむぐらもち谷へ行けを唄ひな
がら、家の周圍土をツドーンツドーンと杵で叩き廻ると、是れにて式例が済み、先
づ今年も鳥の害はないと喜び祝ふのである。

闘牛の惨劇 (隠岐)

闘牛の遊戯は和漢ともに古くからのことで、其の惨酷なるは云ふまでもなく非文
明的である、古來この遊戯で名高いは伊豫の宇和島と隠岐であつて、勇壯と云へば
勇壯であるけれど、惨鼻とすればまた惨鼻で牛こそ迷惑至極なものだ、此處では隠
岐に行はるゝ闘牛のことを述べやう。

隠岐の闘牛は古い習慣と近時種牛改良の方便と、飼主が闘牛に勝ちを制しやうと
する競走心とから、中々盛んに行はるゝのである、之れに用ふる牛は三歳以上八歳

までを限度とし、組合すには同歳の牛と牛とあつて、何れも催主の取組を定めるの
だ、當日會場へ集る牛には何れも怪力とか八剣山とか云ふ、力士の如き名をつけ
て百頭餘も寄つて来て、實に盛況を極めるものである、會場へ牽き出すには双方の
牛に一人づゝ綱取りと云ふ者も附くのだ、此の綱取りは牛の鼻に長さ七八尋もある
綱をつけ、之れが一端を手に持ち輪形に手繰つて、牛の鼻から一尺五寸乃至二尺位
の處を右手に振り、左手に輪形にした綱をもつて双方より進む、牛は其の場へ出る
と敵に對して突進の氣勢を示し、猛然として突撃せんとするのだ、綱取りは互ひに
其の氣合の熟するを待つて綱を弛めるや、忽ち奮闘が開始されるのである。

常にはノタノタとした姿で活潑な舉動などはしさうも無いが、イザと成れば其の奮
闘の状は實に物凄、その猛烈なること心膽を寒からしめる程で、角と角と相觸れ
る音は憂々と響きて疾風を生じ、奮激突進して砂煙を縦横に立て争へば、頭部より
鮮血淋漓として流出し、見るに忍びざるものがある、ますます争闘の烈しくなると

きは、外敵を防ぐ唯一の武器である角の折れることもある、斯ても中々逃げ出さうとはせず勇を鼓して奮戦する、其の状の勇壯なるは恰も古武士の戦場に臨んで一歩も退かず、一騎當千の勇を振ふに似て目覚しき限りである、綱取りは絶えず聲をかけて自分の牽く牛を勵まし、盛んに聲援を與ふれば牛は仆れて後止むの大勇を發しながら、争闘長時間に亘るも勝負の決するまで、自から退くことをせず、之れを監督するものも闘牛が如何に疲勞するとも、勝敗を著るしく見るにあらねば決して引き分けないのである、之れを見る者は各々その最負にする牛の方へ聲援し、聲を囁らして名を呼ぶなど宛然相撲を見るに異ならぬのである。

漸うにして勝負の決した時は、勝誇つた牛は前後左右から幾十人の人に圍まれ、物こそ言ねど得々たる色を見せてゐるも妙だ、左様すると今度は其の最負にした人々が、突如として其牛の脊といはず、頸のあたりと云はず、何處へでも構はず騎り得られるだけ吾れ勝ちに乗るのだ、夫より鼻綱は三十人も四十人も釣下がるやうに

持ち、ヨイサエツサで勝牛をして闘牛場中を牽き廻る、ます／＼迷惑至極な譯であるが、何れも聲を限りに囁し立て、引ツ張りまはるを、牛はいよ／＼得意氣になつて、常のごとくノソリ／＼と平氣で、多くの人を脊や頸のあたりへ乗せたまゝ歩き出すのだ、牛も争闘に勝ち得たことを自覺して、人々のワイ／＼囁すを喜ぶあまり重い煩いと云ふやうな感じも出ないで、嬉々として引き廻されるのだと土地の人は云つてゐる、扱て負けた牛は何うかと云へば、畜生ながら自分の負けたを耻づるかのやうに、コン／＼と逃げ出して姿を隠すは哀れである。

また闘牛の三役くらゐの處になれば、其の威勢は實に豪いものであつて、是れ等が土俵入りをする時の如きは、飼主は自分でこしらへた物やまたは最負の人々より贈られた幟や旗を幾本もなく建て、堂々として練りこむ様子は何とも云はれぬ光景である、只だそればかりでない、幾筋もなく翻へる幟や旗の後から必らず酒樽を擔ふものが附随するのである。

針歲暮のお焼き

(能登)

針供養といつて婦人が常に手にかける針を供養することは、古く行はれる年中行事の一ツであるが、能登の國に行はれる針歲暮といふも矢張この針供養の一種であらう、けれども此處に行はれるものは針に關しては何等の因縁がついて居ないで、常に針とは關係の薄い青樓にて専ら遣るのだ、で、其の故事來歴は更に分らないが能登の國羽昨郡邑知の遊廓にては、十二月の八日に針歲暮と稱し各青樓の女どもが盛んに行ふのである。

それが何様ことをするのかと云へば、何れの家でも前々から準備をして、いよいよ當日となれば朝未明より、俗に同地方にてお焼きと稱へる饅頭、生菓子、餡餅の類を知己は素より時によると一面識ある者なら、誰れ彼れの差別なく配することもある、配る方でも平氣であれば配られる方でも怪しみもしない、イヤ何うも有がたう

と頂戴してよく、併し對手が遊廓である、そこに住む女である、藝妓であるから貰ひ放しにされない、配付を受けた者は懷中を痛めるは當然であるのだ、此のお焼きと云ひて配る菓子は、中には菓子屋へ誂へて拵へさせる向もあるが、多くは家にて其の樓内の抱へ藝妓が手製に出るのだ、で、鼻の下を長くしてゐる連中は却つて珍重すると云ふ事だ。

此の配附するお焼きが出来揚ると、各樓では夫れ／＼馴染のお客に對し、特別の待遇を以つて勿體らしく、蒔繪の重箱に此のお焼きを詰め、それに馴染女の添文をして配るのである、これを受けては黙つて貰ふておく譯にも往かず、分外の祝儀を出さなければ、針歲暮の使物を受けるほどの色男の顔が潰れる、然りとて思ひ切つて出すのも何となく惜いやうで、此處一寸と思案に迷ふものが多いさうだが、結局は可愛がられたいと云ふ自惚から祝儀を奮發ものもあつて、存外澤山に金を集める全盛な藝妓もあると云ふ、そして此の日は素見客が遊廓へ溢れるばかりに入り込み

頻りにお焼きを請求する、之れを與へるを見得とし知るものでも知らぬものでも、オイお焼きをくれと云へば、惜氣もなくドシ／＼と遣るを全盛と呼び、氣前が好いと嘆かれてその樓の評判まで好くなる、素見連の中には随分このお焼きを貪り喰ふものがある、處で出すものには幾干澤山のお焼きを製造したとて、限りのあることだが、貰ふ方には對手が變つて往くのだから、左様無制限に好いわ／＼で出せるものでないので、若し求めて與へない藝妓があると、散々にこれを喰物の意趣で罵り口穢なく悪く云ふなど、遊廓は一層の賑かさである。

また粹士とか通客とか云はれる側になると、此のお焼きの貰ひ方が多いのを誇りとする習慣があつて、己れは何人より配付られたと自慢をする向きが多い、斯うした人々は只だ口頭で何軒より貰ふたと吹聴するばかりでは、氣が濟まないと見えてその貰ひ集めたお焼きを最とも人の多く寄り集る場所へ持出し、是れ見てくれ己れは此程に澤山貰ふた、何うだ豪からうと鼻をビョコ／＼動かして、多寡を競争しつ

、デレさ加減を吹聴する向きもあるのだ、處で斯ういふ處へ持ち出す粹士たちには若し貰ひ方が他より少ないと外聞が悪いと云つて、身錢を切つて饅頭屋へ誂へてお焼きをこさへさせ、之れを貰ふたもの、振りて持出すもありと云ふ事だ、而してお焼きの價は素より時の相場で一定はしないが、太抵一石二十圓前後で誂へるが多いが、一石未滿を拵へる小樓でないと、藝妓などがコツ／＼手を下すことはしないとの話もある、何れにしても此のお焼きを造る入費は、一切樓主の關係するものでなく、藝妓の負擔に屬する定めであつて、大樓になると四石も五石もお焼きを拵へると云ふにても、其の數の多く出で全盛なことが知れる、それが大抵馴染客の祝儀で償ふことが出来、尙ほ全盛な藝妓になると少なからぬ所得があつて、百圓以上の利益を占めるもあるとか、以て其の盛んなることを知るべしだ。

お祝ひの風揚

(土佐)

大風を飛ばす處は彼方此方に随分あるが、土佐の風揚げと云へば昔から有名なものである、今でも中々盛んな風習を存し、疊十二枚敷とか十八枚敷とか云ふやうな大きな風を揚げてゐる、夫れが男子の出産する時、又は運動會その他の祝ひ事のあつた時に、必ず大風を飛ばして大騒ぎを遣るのだ、風の形は大抵四角で風の強く吹く時でないで揚らぬ、それが到底二人や三人の力で揚げることは出来ず、三十人も四十人も力を合せて揚げるが、中々持ちこたへて居られるもので無い、疊十二枚も十八枚もあるから夫れに附ける尾も、太い繩を幾筋もなく綯合せて、一人の力では持ち上からぬ程の物をつけ、其の繩にまた幾條となく、四寸乃至五寸幅に切つた長き紙を附けてあるので、高く飛揚する時は其の紙がヒラ／＼として奇觀を呈するのだ又それに向つて幾百の小風を揚げて、ヒラ／＼する紙を取らせる、此の小風を俗に掛風と稱し、疊半枚位のものである、そして此の風揚を爲すには多く農事の閑な季節を選び、大方は舊曆の正月二月の間を専らとする、然すれば田に作物もなく、踏

み荒される憂ひもなく、風を揚げる人々に取つても差障りもない、萬事に便利な季節であるからだ。
近頃では何かお祝ひの事でもあると、直ぐ風揚の遊戯をするやうな風に爲つたけれど、元來土地の風揚げと云ふものは、男子の出産を祝ふが古來の風習である、生れた小兒が後には高く其の名を天下に揚げるやうにと云ふ意志で、小兒の成長を祝ふのが趣旨であるから、無暗に何でも構はず風を飛ばすと云ふは、其の本旨を誤まるのだと言ふものもあるが、夫れ等の理窟つばい理由因縁は何うでもよいとして、兎に角土佐に於ける風揚は天下に鳴り渡つてゐる、一つの奇風俗であることは争ふ餘地がない、三河の豊橋地方でも随分大きなものを揚げる、大風としては或は三河の方が大きいかも知れない、思ひ切つたのになると千枚二千枚と云ふ素敵なものもあるやうだが、或る意味に於いて土佐のやうな由緒があるので無いやうだ。
土佐は殆んど一般に此の風習が行はれてゐるから、高知市の如きでも其の近郷で

も、富豪の家で男の子がオギヤアと生れや、町内の若い者は某家で男の兒が生れたから、一ツお祝ひをせねばなるまいと相談を爲し、市内なれば町内の若い者、近郷なれば村内の若い者が寄合て、其の家の定紋を附けた大風か、或ひは舞鶴の龜を描いた大風をこしらへ、之れを携へて總代がお祝ひに往くのである、此のお祝ひの大風を貰つた家では、快よくこれを受け納めて之れを揚げる爲めの絲、尾にする繩や紙を十分に準備して、之れを若い者に交附し幅四五寸ほどに繼たり截たりさせる、若い者の方では其の紙を出來得るだけ、長く且つ多く製造して自分に持つどころの籠に詰めて、風を揚げるときに携へ往くのだ。

愈々風を揚げる段取になると、風の絲を持つ數十人の若い者は、風の吹き來る方向に向つて、野でも川でも沼でも田でも畑でも容赦なく、ドシ／＼ドシ／＼走らねばならない、又この大風に伴ふ無數の小風はその尾を取らんと、長く絲を伸して之れを追ひ駆け廻るのである、終日斯くの如くして日の暮れるも忘れるが、人面の見え

ぬやうに薄暗くなる頃には、銘々に風を下ろして勢ひよく歸る、さうすると何うも御苦勞さまでと風を貰ひし家で大酒宴が開かれるのだ、斯ういふ事が二日も三日も續いてお祝ひも全く済むのである、此の騒ぎは中々大仰であつて、祝ひ物を受ける方では容易な散財で無いのである、況して驕奢を誇る華美な家では、風の尾に用ふる紙のヒラ／＼の代りに、價の高い羽二重や縮緬の五色の切れを長く幾筋も附けるもあり、又風揚げをする若い者の中に數十名の紅裙隊を狩り集めて、手傳ひをさする富豪もあつて隆盛を極めるもあるさうである。

さいとう拂ひ (相摸)

相摸國松田と云ふ處に行はれる、さいとう拂ひと稱する行事がある、古く諸國に行はれる左儀長より變化し來たものらしいが、土地の者に其の意義を聞いても明答を與へる人がない、歸する處は歳徳神を祭るのだと云つて居る、穿鑿立てをしても

仕方がないから、行事の大略を述べて習慣を示さう。

此の土地にては例年一月十一日より十四日迄四日間が、さいとう拂ひと稱する日であつて、毎夜村内の各小字に於いては、六七歳より十二三歳までの小供を頭にしておいて、二十人或ひは三十人の團隊を組み、一組一組種々の面を被り、瓢箪な小供は滑稽の風を装ひなどして、小さき幣束を手に手に持ちながら、ドン／＼ドン／＼ド、ドンと鳴らす太鼓の拍子に連れ、此の幣束を或ひは左右に振り、または頭上に懸しなごして村内を巡るには、左の卑猥の唄をうたひつゝ戸々に就て、錢や餅を貰ひ歩くのである、其の俚歌といふは『ちかめ女郎、○のない女郎、猪のけば取つて膠でとッ付けろ』と唄ふのである。

只だ錢や餅を貰ひ歩いて踊り騒ぐばかりでなく、村内の家々で用ひたお飾の松や竹を集めて来て、大勢の小供等が寄つて集つて小屋を作る、其の柱とするものも屋根とするものも、總てを新年のお飾りに用ひた松や竹にて拵へ、中には祭壇の如き

ものを設けて、此處に歳神を祭る處と爲し、毎夜隊を組で村内を踊り歩いた後、此の小屋に歸り来て歳神の前にてまた／＼太鼓を叩き、例の俚歌を高々と唄つて踊り騒ぎ、夜の更けるも知らずに過すのである。

村内では太鼓の音が段々近くなつて来ると、ソラさいとう拂ひが来たと云つて女の子など飛び出して見る、門口に立てば錢や餅を思ひ／＼に出して遣り、誰れが道化た風をしてゐたとか、何さんほ面白假面を被つてゐたとか、彼の桃太郎の假面を被つてゐるのは、甚兵衛さんの息子だ、村長さんの坊さまは何だつて彼様鬼の假面など被つて居なさるのだらう、胸の處に叩き鉦まで下げてカン／＼叩いてゐなさるは厭だ、彼れで踊りは一番巧いさうだから、今夜は一所にさいとう拂ひの小屋に往つて見やう、毎晩屹度二度や三度は自慢で踊んなさるなど、村内には種々の噂が立つて賑かた、態々小供のあとを付き廻つて小屋まで踊りを見に来るもある。

さて最後の十四日の晩になると、此の小供の中でも踊り囃して歩いた連中が總掛

りで、このさいとう拂ひの小屋に火を掛けて焼き捨てるのである、處で之れを焼き捨てるには只だ火を點けてバツト燃して了ふのではない、之れを燃すまでには夫れ／＼の準備がある、準備とは何であるか、歳徳神のお祭りをするのである、別段に供物と云つて珍妙な物を捧げるのでもない、貰ひ得た餅やその他の物を少し供へるまでだが、小屋の前には一大裝飾を施すのである、裝飾と云つても廣目屋式の飾り立てでない、四日間に貰い溜めてある錢で、五色の色紙を澤山買込んで来て、七夕のとき笹に付ける網のやうな物を、大きいのや小さいのや無數に作り、之れを國旗または扇子など、一つに青竹の太い枝附のもの、ヒラ／＼ヒラ／＼と結び下げ、小屋の前は色紙で明るいほどに晝間のうち立てる、この準備が整ふと小供等はさいとう拂ひの小屋で、心ゆくまで騒ぎ狂ひて夜の来るを待つのである。

いよく夜になつた、最う小屋に火の掛る頃だと、老も若きも男女の差別なく寄つて来る、踊り連中の小供は豫の用意の燃草に火を點けると、火はバツト燃えあが

つて四邊は白晝の如く明るくなる、此の時この火で團子を焼いて食すれば、無病息災だとの言傳へがあるので、集つて来るほどの人は柳の枝に多くの團子を貰いたものを持って来て、争ひ焼いて喰ふ風習がある、柳の枝に貰ひいた團子と云ふは、東京で云ふ餅花のやうな類である。

餅貰ひと節季候

(陸前)

陸前國仙臺地方にては、一月十四日の夕方より十二三歳までの小供が、餅を貰ひ歩く妙な風習がある、一種の迷信から来て居るのであるが、小供は只だ面白さに駆け回るのが多いらしい、此の餅を貰ひ歩くを俗にチャセンコと云つてゐる。

當日は夕方になると小さいのは七歳八歳より、大きいのは十二三歳を限りとしてあるが、何れも晴れの着物を着飾り一様の鉢巻をして、五人七人或ひは十人も一隊を爲し、富豪の店頭に勢ひよく駆け込んで来て、一齊に聲をそろへ「錢持ち金持ち

寶餅、こちらの身上は昇り餅、チャセンコにお祝ひなされ」と節面白く語り切り餅を貰ひ歩くのである。此様無邪氣な少年が飛込んで来ると、其の家では延喜よしとして『さア祝つてあげます、此方へこちらへ』と招いて、之れを優遇して小供一人につき切り餅一ツに錢二錢くらゐ宛を與へ、お祝ひ申しますと云ふのである、少年は之れを貰ひて嬉々として其の家を走り出し、又次の家へ飛び込んで一齊に同じやうに錢持ち金持ちを繰返して、餅一切と錢とを貰つて駆け出して行くのだが、中には餅はくれたり祝の錢の少ないのがあつたり、全然チャセンコを拒絶する家もある、此様ところに出會ふと小供は大に激昂して、手に手に小砂利を掴んでバラ／＼投げこむ、泥を掴つて何處へでも構はず投りこむ、それが一人や二人なら制して追ひ散らすことも容易であるが、如何に小供だつて、最う七人も八人も黨を組んでゐるのだ、殊に十二三歳にもなると悪戯盛りの手も附られない年頃である、夫れが怒りに任せて行るのだから店頭も何も泥まつこにされて了ひ、之れを制せんと店

から屈竟の男でも飛び出せば『錢無し、金無し、寶無し、こツらの旦那は疝氣持ち身上はだん／＼下り餅』と、口々に罵り叫びて、一目散に逃げ去つて了ふのだ。少年等はこの貰ひ餅や錢を何うするかと云へば、餅は各自が持ち歸つて家の神棚に一先づ供へ、翌十五日の朝になつて粥に交て食するのだ、チャセンコの餅を入れた粥を十五日の朝食すると、其の年中腹中の病に罹らないと云ふのである、又錢は其の組合の人々が寄つて共同遊戯の資に供し、お賽日の小遣になるのださうである又仙臺地方の近在には節季候といふことが多く行はる、節季候と云ふものは現代では廢れたが、往時は各地方に随分行はれたもので、年の暮のもので俳諧などにも出てゐるが、此處では年末の行事でない、舊正月中は何時でも遣つて来るのは妙な習俗である、何れ節季候に出るものは有福な人では無いに極つてゐるけれど、此の土地でも下層生活をする人々が、四五人づゝ一組と成つて幾群となく遣つて来るのだ、其の扮装は赤い頭巾を被り手に破れ扇を持つ者一人、三味線を弾くもの一人

乃至二人、太鼓を敲くもの一人で、扇子を持つものが手拍子を取つて、目出度盡しの文句を喋舌り立てると、外の者が一樣に鸚鵡返しに之れを喋舌り、三味線は之れに合わせてペンペコ〜と弾きながら、戸毎に門口に立つて米や錢を乞ふのである、然れど之れは習慣でありとは云へど、一種の物乞ひに類してゐる、乞食と見做しても差支へないのであるから、一般より決して好遇されないで乞食扱ひをされて居る、夫れが幾組となく煩く來るので、農家などでは其の逐ひ拂ひ方に困り、若い者が四五人宛順番に村の入口に出て、節季候の入り來るを防禦する事がある程だ、斯様どきには衝突して随分喧嘩を引起す騒ぎなどもある、で若い者も節季候防禦の番人は誰れも好んで往くものが無いので、近頃は村費と云ふ譯でもないが、有志が醸金して日當を拂ふ制度が立つたと云ふことだ。

子供が神主に代る

(羽前)

小供が神主の代りになつて碓ひをするは面白い、また一の奇風俗と云つても宜いのである、處は羽前國田川郡の一部にては、一月の十二三日頃を小正月と稱へて、何れの家でも茶の間の天井裏へミツギと云ふ木の枝とヤドメと云ふ灌木とを一所に結びつけ、ミツ木の小枝に團子を串さしにするを、梨子と呼び、之れに黄金の餅や繭玉などを繫いだ祝ひの式は、近ごろ廢れて行ふものも更になつたけれど、町方にて行はれ來たつた「歳堂」といつて、道祖神を祭る習慣は尙ほ現今でも行はれてゐる、其の方法は別に奇抜な遣り方でもなく、珍奇な風習のあるでも無いが、小供が神主さんの代りをして、參詣人の求めに應じ子女の爲めに碓ひするのが、他國の人には一寸妙に思はれるのだ。

其の歳堂といふものを設けるには、各町々に依つて精粗大小の區別は素よりある中々立派に造り擧げて壯重を裝ふのもあれば、又至極簡易に造つて形ばかりのものもあるが、其の歳堂といふは大概三間に二間ほど神樂堂か、さうでない踊りの舞

臺やうなもので、御神體には削掛を用ふるのだ、御神體と云つても別段に神主を頼んで祝詞をあげ、分身の式作法を行ふのでも無く、削掛を只だ漠然と御神體に据ゑて神と崇めるまでに過ぎない、そして歳堂の祭神は道祖神として、之れを祭りが済むと直ぐ壊して了ふのでなく、一年中はその儘に存して置くが例で、此處に奉侍するものは七歳位より十五歳までの男兒で、此の邊では其の年頃の男の兒を歳之神に入ると稱し、歳堂の總ての行事を大人の手を假らずして小供で行ふのである。

何れの町々にも年番の設けがあつて、前の年に新たに嫁を迎へた家、また聲を取つた家、また小兒が産れた家などから、其の金持と貧乏の程度に應じて酒や肴を寄進せしめるのだ、土地の習慣であるから是れ等の喜び事のあつた家は、進んで其の寄進につくを身の祝ひともすれば、酒や肴を澤山に出したを見得ともするのだ、前年に喜び事の多くあつた年であると、寄進の物も多く上るので別に勸化をする必要もないが、時としては存外に少ない年もあるので、其様折りに小供たちは他の地

方に於いて行はれるやうに、町内から餅や米や炭や薪や、味噌やまた錢やを始め、一切の食物費用を徴集して歩くのである、歳堂を建てるにも同じく町内に喜び事のあつた家で負擔する定めであるのだ。

斯ういふやうにお膳立が出来ると、小供は此處へ集り堂の前または堂の内にあつて、昔時は往來の人よりお賽錢を促したものであるが、近頃はお賽錢を促して上げさせる弊は止んだけれど、小供等より促さないでも古くからの習慣である、土地の人々は歳堂へお詣りして來やうと參詣してお賽錢を上げる、左様すると小供等は之れに報ゆるに御神酒を侷めるが例である、特に餘計のお賽錢を奮むものゝ爲めには通り神樂を奏して報ゆるのである、雖しは頗る簡單で笛と太鼓で、鹽吹やお福の面または獅子を被つて舞ふのだ、尙ほ又參詣人が子女の爲め祝福を祈つてくれと頼むと、小供連は太鼓で調子を取りながら『某さんの嫁(女の子ならば婿と云ふ)は、メッコ(砂)で、タッコ(陂)で、鼻耳ハンで、えー嫁どるよに、ヤーエノ、ホエ……』

と唱へて囃す、十五日には餅や酒を振舞ふて賽銭を分配するのだ、今は此の行事も平穩無事なものと成つて、何等の危険も心配も無くなつたが、昔は随分荒つぽい活劇が演ぜられて怪我人などの出来るは珍しくない、と云ふは夜分になると小供でない町内の壯者が出て、隣町または町々組合をして太鼓合せと云ふ競争があつたのだ太鼓合とは互ひに太鼓の奪ひ合をするので、奪はれた方が負となるのだから騒ぎは大變である、大喧嘩をして頭を割るなどは数々あつて、血を見ないと納まらな言はれた程だつたが、今は之れを禁じられて了つたのである。

松飾りの奪合ひ

(肥後)

左義長には古來から土地に依つて變つた習慣があるが、肥後國熊本にも奇習があつて、壯快な飾取りと稱する男性的危険な行事がある、是れは一月五日に少年團に於て爲される壯觀な奪合であるのだ、此の飾取りと云ふは各町内の松飾りを奪ふ

て、各自の有となし十四日の左義長に使用するのである、で、五日の朝から各町内の少年は一町毎に寄合して黨を結び組を立て、或ひは京町組とか唐人組とか又は通町組とか云ふやうに、幾組にも分れて多くは其の町名を組の名とし、互ひに協力して手勢を出張らせ、戸々の門飾りを奪ひ去るのである、然るに自分の町内のものばかりを奪ひ去るには、更に何等の衝突もない、何等の苦情も起るものでない、例年門飾りは少年組の爲めに奪ひ去られるものと、昔からの慣習になつて居るので、奪はれる方でも奪ふ方でも約束済みの物を取つて来るに均しいのだか、只だ自分の町内の物ばかり取り集めるのでは、一定の材料より得られないのである、材料を多く集めて他町の組に誇らんとするには、自分の町内のみの分にては幅が利かないから、勢ひ他町へ突貫して奪ひ來らねば材料を多くする譯に往かない、各組々の隙を窺つては進撃突貫を試み、他町の物を奪つて持ち歸らんとするのだ、假令は唐人組の屈竟の選手が一隊通町へ進撃し、戸々の門飾りを片ツ端より奪ひ去らんとすれば

通町組は之れを迎へて奮闘して撃退せんと必死となる、何れにしても自分の町内へ他の組の者を入れ、假令一本の松飾りでも奪はれては、其の組の名譽に關するから之れが防禦には全力を注いで力めるのだ。

進撃して來る程の者は皆手腕拳の優れた勇士だ、敵壘の内へ乗込んで活動せんとする猛者である、中々撃退されるものでないから、是に於いて一大活劇が起つて争闘が始まる、相格し相打つこと宛も戦争に異ならざる騒動となつて、血を見る事などは決して珍しくない、互ひに氣が勝つてゐる時だ入り亂れて奮闘する、其の虚を窺つて我が町内へは又他より襲撃さるゝ等、宛然一場の修羅の巷となり終るのである、斯くの如くして相互ひに奪ひ合つた飾りは、各自の本陣に堆積して其の高さを誇り、翌六日になると昨日警敵となつて争闘した事はサラリと忘れ、今年は何町組の戦士は能く働いたから成功した、何某組は抜けがけの功名で何町の飾りを奪ふたなど、言ひ合つて、十四日の左義長を待つのである。

十四日に成ると朝早くより、各町内の少年は奮闘して集めた門飾りの中、門松の太きを心木となし、周圍に夥だしき藁を積み重ね、殆んど二間四方もある者を作りあげる、乙町の者は又甲町に負けて堪るものかと、豊富に集めた材料を以つて、それも同じく門松を心木となし、藁を數千把も運び來て段々と積み上げ、前に劣らぬやうな物を作る、丙町のもの丁町の者も何れもセツセと支度して、同じやうな物が三ツも四ツも造られ、いよく出來揚つたとなると、若い着等は一同に各自の作つた前に並列しつゝ、之れに火を點けるのである、而して其の火がバツト燃え上るを見るや、一同ドット突進して心木とする處の門松を抜き取らんとする、之れが頗ぶる危険な藝當であつて、藁に火を點けるのだから左なきだに燃え易く、火は忽ちに炎々として上がる中より、心木の松を抜くなどは容易の事でないのだが、之れを抜き去らんとして火中に眞ッ逆様に落ちるもあり、また焰に巻かれて遁げ場を失ひ焦熱地獄の苦を嘗めんとするあり、或ひは煙に咽びて將に絶息せんとするもあるなど

瞬間の危険は驚くばかりであるが、斯るときは用心とて多くの若者は其の周囲を透き間なく守り、突進したものが危険と見れば忽ち持ちあたる處の鳶口にて、其の者を引き出して危きを救ふのだと云ふが、壯觀は中々壯觀であるけれど火中へ飛び入るは危険此上なく、見るものをして悚然肌膚に粟を生せしむると云ふ。

白眼の達磨市

(武藏)

延喜物には随分奇抜なのがあるし、稼業によつては馬鹿くしい延喜物に大騒ぎをやるもので、彼の酉の市の熊手のごときも其の一ツである、此の熊手に類似したのが達磨市であつて、賣物は起上り小法師の達磨である、而して眼球のない達磨さんだから一層滑稽であるのだ、其様妙なものか何で延喜になるのだ、何處に其様馬鹿くしい市が立つのだ。

之れは東京より多く離れない北多摩郡拜島村の大日堂境内に於いて行はるゝ市で

ある、此の市は例年一月元日に執行さるゝので、丁度東京の延喜を祝ふ稼業柄の人々が恵方詣りと云つて、其の年々の恵方に當る神社佛閣に參詣するのと同じ意味らしい、そして此の日に達磨を賣る店が澤山出るので、それが當日唯一の賣物であるから達磨市と呼ぶのださうである、田舎の事ではあるが近郷よりも近在よりも押出して来る、又遠く八王子の町あたりから遙々參詣する者もあつて、中々雑踏するど云ふ事だが、就中養蠶家、製絲家、機織業をする者が最多數を占める、何れ延喜を祝ふと云ふことゝ慾の皮の突張つてゐると云ふ事は、お隣同士でなければ御親類筋であるから、元日早々大日堂に參詣して達磨さんを買つて福を授からうとする、虫の好過ぎた連中のみである。

此處で賣る達磨は毎年十月頃から製造に着手し、十二月廿七八日頃までには仕揚げて持ち出すので、自分で製造するものは稀れで大抵受け賣りである、大きいものになると二三尺の高さのもあり、又二三寸の小さいのもあつて、撰取り見取り何れで

も幾千／＼と云ふ譯には往かず、玩具の達磨さんで一個二錢とか三錢とか云ふ位の物でも、此の市へ出て延喜商人の店頭にごたく並ぶ時は、三十錢の四十錢のと云ふ素敵滅法もないお價值を吹ツかけ、お客次第で十錢にも賣れば又七八錢にも賣る殆んど縁日の植木と同じ格であるのだ、それで三尺からになると五圓と言ひ十圓と吹き付けるは怖いやうだ、お負に此市の達磨さんに限つて眼球のあるのは一個もない、皆白眼に成つてゐて所謂開き盲目である、足のない上に眼球まで取り揚げられて嘸ぞお困りだらうと同情に堪へないが、之れには斯ういふ理由がある、此の眼球のない達磨さんを買つて来た人は、之れを神棚に飾りおき、其の年の春蠶の當るを待つて片眼入れ、また秋蠶の意の如く出来れば、また残りの片眼を入れて満足なものとし、其の前に酒や肴を供へ一家擧つて祝盃をあげるのである。夫れから最う一ツ此の達磨市に就て、餘り感心した習慣ではないが、此様延喜物の市などに得てあるチヨロマカシ、店頭に並べある賣物を手早くチヨロマカシて持

逃げをするのだ、商人の隙をねらひ達磨さんチヨロマカシて持つて来ると、其の年は必ず福徳があると云ふ迷信の傳説から、今も尚ほ此のチヨロマカシを遣らうと鵜の目鷹の目商人の隙を覗ふものが多い、偶々商人もこのチヨロマカシを見附け追駈けて引捕まへるは安いが、店を留守にしたら得たりかしこしで、我れ勝ちに達磨さんを攫つて往かれるから、えゝ忌々しいと思つても其の儘にして了ふのである、併し一錢で仕入れた達磨さんが七八錢から十錢に賣れるのだもの、五ツや六ツの達磨さんを奪はれたとて平氣なものであるのだ、また白眼の達磨さんを賣るは此處ばかりかと思つたら、左様でない駿河國藤枝町地方にも同じ達磨さんが、矢張り毎年一月に商人の店頭に飾られて慈の深い人達に買はれてゐる、此の地方では初め買つて来ると先づ何れか一方の眼に、點睛を加へて一眼の達磨さんと爲し、惠美須棚に飾り、御利益をお與へ下されば一ツの目も入れて上げます」と唱へ祈言を凝してゐるうち、利得があると無論一眼を加へ、假令利得がなくとも歳の暮には一眼を點して

兩眼となし、之れを川へ納めると稱へて流して了ふ習慣があるさうだ。

どんたくの松囃し (筑前)

筑前國福岡市の舊城下に松囃しと稱する最も奇異な習慣がある、毎年舊曆の正月十五日に執行するもので、當日は土地の人は「どんたく」と稱へ、福岡全市二萬餘戸は何れの家でも軒に提灯を出し、店頭を美しく飾りて一同業を休み、酒肴の用意をして常に親しきものでも、一面識のない者でも、差別なく來る人ごと馳走して、主人も客も歡樂に耽るのである、一寸早く云へばお祭禮とでも云ひさうな光景であるのだ、其の賑ひはまた格別で一年中で此の日ほど上下おしなべて楽しく面白く遊び暮すことは無い。

處で市中の若い者や小供は、頭に烏帽子に似た頭巾を被り、社袴を着て短冊をつるした篋を負ひ、手には各自扇を持つて數十人一組となる、其の組々はそれづくに

組合の文字を表す、それは鶴組とか龜組とか或ひは松、或ひは竹または梅などと、思ひ／＼の組合の名を記して市中を練り歩き、成るべく美酒があつて御馳走のありさうな家と見ると、案内もなくドヤ／＼と押懸け、一同が聲を揃へて可笑き唄をうたひ、手を拍つて目出度／＼と祝ふのである、此の團隊に押込まれた家では酒肴を出して振舞ひ、手の届く限りの待遇をするを例となつて居る、又は傘鉾なるものを數十どなく飾り立て、擔ぎ廻る者もある、之れは東京で云ふ樽御輿に似たもので、小供などの喜んで擔ぎまはるのだ、是れ等にも同じく馳走はするのだから、此様連中に二組も三組も押込まれたら臺所は大騒ぎである、尙ほ又趣向を凝したのにならど、七福神に扮装たるものが得々として騎馬に跨り、大勢な壯者に取圍まれたつゝ市中を騎り廻して、毎戸の門口に佇立みて異句同音に、其の家の福徳を祝ふては通り抜けるもあれば、又日が暮ると一層この騒ぎは大袈裟になつて、右から滑稽な形をした者が一隊練りこむ、左からも不思議な姿をした一連が練り來ると云ふ始末で、

往來は通行もならぬ人の黒山となつて了ふ。

其の中へ市中または柳町遊廓の藝妓やお酌が、今夜は天下晴れての浮れ時と思ひくゝの服装を凝らし、婆ア藝妓がお酌の着物のツン／＼ツルテンな派出なのを着て赤い蹴出しを引摺るやうに締め、小供の聲色をつかふもあれば、お酌が老妓の風をして小間じやくれたのもあり、滑稽なるもの諧謔なるもの、有りど有らゆる假装をして押出して来れば、ソレ藝妓連だ遊廓の連中だと、往來は忽ち雪崩を打つて動揺めき騒げば、三味線太鼓、笛鼓鉦まで加へて陽気に騒ぎ立て／＼、調子も面白く練り歩くに一層賑ひを増すのである、そして此の連中は常に最負にされるお客の邸前に至れば、ドヤ／＼ドヤ／＼立關より無断で座敷へ闖入し、鳴物で囃し立て、舞ふもあれば唄ふもあり、一場の藝盡しを演ずるのである、斯うなると流石に酒を飲ますばかりでは濟まない、主人は祝儀を奮發ねばならないことになる、藝妓連は其の祝儀を貰ふが目的であるから、それを貰ふと現金にも直ぐ其の家を飛び出して、次

なる家へ押し掛けて行くのである。

又各町内／＼では皆趣向を凝らした飾物をする、踊り屋臺を出して踊りまはる、其の騒ぎと云つたら逆も筆にも口にもされるものでない、一年三百六十五日中福岡全市を騒がすこと此の『ごんたく』より盛んなるは無いさうだ、であるから近くの者は勿論のこと、態々遠い／＼所からも親類縁者へ泊りがけで、此のごんたくの盛況を見に来る者が最も多くある、此の日は取りも直さず福岡全市に亘る無禮講であつて、旦那も御新造も、丁稚もお焚も娘も年増も齒ぬけに成つたボク／＼婆さんも腰の曲つたお爺さんも、日頃厳しくして權柄づくの官吏も軍人も同視一列に浮れまはり、夜の更けるも忘れて翌朝旭日の昇るに驚きて皆家に歸るので、翌日は夕方まで誰れ一人市中を彷徨するものなく、寂々寥々として無人境の如しである云ふことだ。

花廻の美観

(根室)

北海道と云ふ處は各地から人情風俗の異なつた人々が集合した、新開の郷土である故でもあらうが、内地に於いて往々見られないやうな異風が行はれてゐる、根室地方に行はれる『花廻り』といふ行事の如きは、格別に珍らしとするに足らないが荒くれた人々の集合地の如く考へられてゐる處で、斯うした優しい風習があるかと思へば又捨てがたい、根室あたりでも處によれば、五月になつて梅や櫻が一所に咲くほごで、四月と云へばまだ中々花を見ることも難いころ、花なき里に花を咲かせて娛樂に耽けるも、越年の無聊を慰める一手段でもあらうが、残んの雪の消えやらぬ四月中旬に、根室町内の寺院で『花廻り』と云ふ優美な行事がある、夫れは各地に行はれてゐる處の花供養として、佛前に花を供する行事から來てゐるのであらう。此處で行はれるのは花のやうな少女幾十人或ひは幾百人、美しく化粧立て着飾つ

て手にく目の覺るやうな美麗な造花を捧げ、寺院佛堂の周圍を二周するが一の儀式とされてゐる、此の花廻りには少女に依つて行はれるものと、年頃の娘によつて行はれるものと二種あつて、初日が可憐な少女の一群が楓のやうな手に花を捧げ、重さうに廻る如何にも愛らしい姿に見惚るものである、二日目は若い娘だから一層人氣が立つて見物が多い、年齢は十五六から二十一の娘盛りばかりが、幾十人となく幾百人となく盛装を凝らし、化粧三昧に耽つて美を闘はし研を争ふのだから、實にその騒ぎは豪いものである、殊に手にく捧げる花は、艶麗なるもあれば淡泊なるもあり、種々に美しい上に之れを持ち行く者が、また何れも年頃の娘ばかりで何れもくも今日を晴れと美を競ふのだもの、天女の天降りて關廼の花をさげけるのかとも思ふ、氣高くして美しいのもあれば、愛嬌こぼるゝばかりで豊頬圓満の相を備へるもあり、面羞げに蓮歩する奥床しいのもあれば、蕭洒にして何處どなく馥郁たる梅花の香りを發するもあり、ア、最う一寸丈があつたら彼の標致も引立つに

と惜まれるもある、千差萬別百花爛熳たる光景を呈して、二日目の盛況はまた格別であるのだ、そして少女にしても年頃の娘にしても、之れを引き連れて寺なり堂なりを廻る先導は、僧侶が朗かに讀經しながら行くのである。

この花廻りは根室地方の若い婦女が唯一の娛樂日であつて、又男子が其の日の來たるを指折り數へて待つ行事である、で、此の花廻りに出る娘は化粧に意を用ふること絶大で、何うしたら他を凌いで特り優秀の評を得られるだらう、材料は何を用ひたら調和が取れるだらうなど、寢食を忘れる騒ぎ、それに着るものが又大變である、之れには當人よりも親々の心配が一通りでない、何でも我が娘をして當日の名譽を得させるには着物にある、顔がいかに美しくても何百人と若い娘が集まるのだから、見物には目移りがして容易にその美醜を仔細に比べることは難い、こんな時に着物の華美にしてバツト人目に立つに限る、と云つて安ものを着せては彼れの肩身が狭い、家の外聞になつて世間から笑はれると夢中になるのだ、然ればその美貌

と優姿を誇るばかりでない、着物をも見せねばならぬ、要するに富の程度をさらけ出して、我が娘に掛ける事になるのである、門外漢から見ると馬鹿／＼しさで物も言れないが、其の衝に當つて夢中に騒ぐ人は、また一種の趣味とするのだ、之れを他より彼れ是れ云ふも餘計なお世話であるのだらう、そして今一ツ此の花廻りに當人は素より親々までが騒ぎ立つのは、當事何處の娘は美人だとか、如何にも柔順しさうだとか、評判を立てられると其のお嫁入に大關係があつて、假令資財はなくても上流の資産家へ嫁に貰はれ、お蔭で親々たちまで幸福が來たることのあるから、射伴的から競争を産出して居るのだとの説もある、其の眞偽は編者の知る處でない

島田の大奴

(駿河)

一度見ないは馬鹿、二度見るは馬鹿だと、土地で云ふ島田の大奴は、駿河國島田町にある大井神社の祭禮に出る、古くよりの神事の一つである、此處のお祭りは三

年に一度本祭りをするが例となつてゐて、寅年巳年申年亥年がその祭典執行の年順である。

祭日は新暦を用ひて十月十三日より十五日までの三日間である、神事には往昔より大名の行列を組織し、道中の模様を爲して練り歩くを例とする、其の大名道中のうちに「大奴」と稱する假装者がある、それが尤も立派で尤も滑稽で、何等に由つて起つたのか、理由は明らかでないが、行列を出す町内にて體格の優れて肥満した若者二十五人を撰擇し、これを往昔の奴風俗に仕立てた處は、如何にも尾緒がついて幅もあり、顔の形こそ餘り感心したのは無いまでも、態度は天晴伊達奴。一諾千金假令火の中なりとも水の中なりとも、受合ふたら最後、生命も身體も捨撥に俠氣を貫く姿を見せ、六尺豊かの木刀を兩腰にドッコイショと挿し、大股に闊歩するさまは殊勝しく見える、これに扮する者も亦た大奴に成り濟して威張るも面白い、只だそればかりでない、この木刀に下げる下げ緒といふものが頗ぶる奇抜だ、刀の下

緒ぐらゐだから如何に奇抜だといふ處で、別段に吹聴するだけのものであるまいと思ふに、豈に圖らんやこの下げ緒は、島田町全町に一大影響を來たし、土地で富貴を誇るもの、名譽を重んずる婦女子の雙肩に懸る奇習があるから妙だ。
昔より此近くの土地では、斯ういふ俗諺がある『島田へ嫁入りするなら、良品帯もちな、縞珍緞子は何のその』と云ふのだ、縞珍や緞子の帯を持つてゐる位では、花嫁御寮の見得にはならぬ、好支度とは云へないのだと諷したのである、何故にこんな事を云ふのかと思へば、實にこの大奴に關して來たる處の一の警報である、忠告である、扱てこの大奴の木刀に懸けるところの下緒は、女の丸帯の頗る上等なもの一本の木刀に二筋宛かける、懸けると云ふより寧ろぶら下げるのである、而して此帯は市中の資産ある家のお嬢さんや奥様の帯を借りるのだ、女として衣類や帯は生命と釣代に大切にすることも、此様お祭などの行列に貸しては、損じを生じ忍び難いところであらうが、何家の何某さんの帯は流石に立派であつたとか、何處の令

嬢の帯は島田町中第一の柄だとか、忽ち評判の立つを名譽とし、争ふて高貴なものを惜氣なく貸すものである、堂々たる大家とか素封家とか云はれる家より、此の祭禮に大奴に帯一本出さぬと云はれては、面目玉を踏潰すことになるのだ、で、他の土地より三島へお嫁に来るものは、何はなくとも帯ばかりは立派なものを持ってゐないど耻をかくと、前の俗諺が謠ひ囃されるのである。

横道に外れて肝腎の大奴の説明がお留守になつたが、着衣の襟は大筋の袷天を揃へ、列を爲して廿五人が手を上下に振り、其の後へは大鳥毛の槍を五六人で振廻し其の次には八九歳より十五六歳までの男子陣笠を被り、紋附羽織に立附をはき大小を挿す者百人許りつき、次に殿様が七ツ蒲團を置いた馬乗で行く、此の殿様は町内財産家の息子で十歳以下のものだ、其の撰に當つた家は莫大な費用が懸るが、之れを無上の名譽として金を蒔くのが多い、そして此行列は凡そ三町も續き頗る大懸りだ、祭日の十三日、十四日に神社へ繰込み、また行列を出さぬ側の町にては笛太鼓

で十歳ばかりの男子が手にサ、ラ鼓など持ち、鹿島踊りをして社へ繰込んで来る、又各町々の若者は揃ひの半纏で山車を引き出し、屋臺を引き出すなどは何れも同じ事である、十五日は神輿の渡御であるが、愚にもつかないものだが大奴は兎に角評判なものだ。

丹生川の白及飛

(伊勢)

伊勢國員辨郡丹生川村に鴨神社といふ一の古い社がある、此處のお祭りは毎年十月二十日の夜を以て行ふので、其の十日ばかり前から一村の男子は三十歳までのものが總出で準備に掛かる、何様ことをするのかと云へば、大松明をこしらへるのである、それが中々生優しい物でないのだ、凡そ大きいと云つて此様大きな松明をこしらへる處は恐らくあるまい、三河の大提灯と好一對のものであらうと思ふ、土地の人は日本一の松明だと云ふが、強ち無理のない言分であるらしい。

扱てその大松明を何うして拵へるか、村内三十歳以下の男子たるもの、即ち屈強の壯者が一人残らず定め場所に集まつて、各自に菜種莢のやうな燃え易い材料を彼方からも此方からも寄せ集めて来て、先づ之れを山に積むのだ、小山の如きものが三ツ四ツ出来て稍や材料が蒐集されると、今後松明の製造に着手するのであるが其の長さが十間あつて周囲が三十尺以上あるものを二本作るのだ、であるから之れを作るにも中々容易な業でない、村民のうちでも例年松明を作るに馴れ切つた者が一定の指揮をして取纏めて行くので、左もないと逆もテンヤワイヤでは纏めの附くもので無い、大抵チャンと出来揚るのはお祭りの前日位である。

お祭りの當日になれば日の暮れるを待ち、大勢の壯者が一定の服装をして鉦をカン／＼鳴らし太鼓をドン／＼叩いて、エイヤサ／＼エイヤサ／＼の掛聲勇ましく、數十人が彼の大松明を擔いで社頭に運ぶのだ、それが何をいふにも十間の長さがあつて三丈まはりからある物だ、左ほど重量はないにしても取扱ひに不便である、丁度

都會の壯丁が御輿でも擔ぐやうにエイヤサ／＼を續出して、兎も角も二個の大松明を社頭まで運びこむは夜の十一時となるが、いよ／＼松明が着したとすると今度は「七度半の使ひ」と云ふ滑稽な式例が行はれるのだ、それは瀬古半兵衛といふチョン番の爺さんを迎ふるのである、此の爺さんが當社の祭禮に何等の關係があるかと云へば、爺さん其の者には縁は薄いがその先祖が大洪水のとき、此處に祀つてある祭神を拾ひあげて鎮坐したのだと言傳へられてゐる、夫れが幾百年昔のことか更に解らないが、其の家は代々瀬古半兵衛と云ひ、今の爺さんも尙ほ半兵衛を名乗つてゐるのだ、此の爺さんが壯者の使者を受けると、社杯を身に纏ひ片手に杖をつき片手に提灯を提げてテク／＼出懸て来るのだ、處でこの提灯が貴重なものだ、瀬古家に取つては家寶である、それは小田原提灯であつて極めて粗末な品であるが、其の古物なる點に於いては何代以前の半兵衛の頃に造つたのか知れない、火袋は眞黒になつて煤き切つてゐる、中に蠟燭が點いてゐても外から其の火影が見えないのだから

之れを提げて歩いたとて道を照すことは出来ない、明るい爲めに用ふる提灯だと云へば、既に其の本體を失なつて居るのだが、當社のお祭りには大切な品である、チヨン鬘の爺さん此の眞暗な小田原提灯をブラ／＼提げて、鴨神社へ參詣し社前に額づき三拜九拜した後、その提げて来た提灯の火を例の大松明に移すのだ。

大松明は燃易い燃料であるから、火はバツト付いて火勢盛んに燃え出す、壯者は聲をそろへデヤ／＼デヤ／＼と掛聲をして、二個の松明を立てるのである、之れを夜鉦松明と稱する、斯くして之れが燃え盡ると、一人の壯者が神前より一本の刀を持ち來り、鳥居際で鞘を拂へば閃電一過ビカ／＼と光る、その白刃を兩手に持つて之れを膝下に提げて兩足をそろへ、前より後へ、前より後へと廻しながら神前に進む。之れを『トビ』と稱へて當日主眼の行事としてゐる、壯觀なる大松明の方は閉却されてゐるも妙である。

山入り鉦入り (下野)

下野國芳賀郡中村と云ふところには妙な風習が今に存じゐる、山神を祭るとか地神を祭るとか云ふ慣例は能くあるが、此の村にも夫れがあつて若し一年之れを怠れば山に入り幸なく、田を耕して幸がないと言つてゐるのだ、今時そんな事があるものか、餘計な迷信は打破して了はなければ成らぬ、如何山村僻邑の地とて何時までも迷信の囚れと成つてゐては外聞が悪いなど、中には理窟つばい事を云つて慣習を破らふとするが、數百年の仕來りは容易に改めることが出来ないさうである。

其の慣習とは何様ことをするのかと思へば、成程側から見ると愚につかないやうであるけれど、之れを行つてゐる村人は事實が證明すると云つて止めない、夫れは正月の六日と云ふから無論舊曆に據るのである、七くさの前の日、即ち六日年越と云つて今日山神を祭るのだ、此の日を山入りと稱し、また東の白んで明け切らな

頃から、餅、白米、魚類の三品と白紙と斧を携へて各々その持つてゐる山林へ入るのだ、よく寒中の夜明方だから、其の寒さは一通りでない、朔風凜冽鼻も耳ももげさうになる、手や足は凍えて覺えの無いやうだが、其様ことには頓着はしない、當年の山による幸福を得やうと云ふ慾と二人連れでドン／＼遣つて来て、例年山神を祭る處に達すると、白紙は其の一半を幣のごとく切つて立木に吊し、一半は之れを又三ツに切つて、餅と白米と魚類を一枚づゝに載せ、木の下へ三ヶ所に置き、て幸福を祈り、携へた斧を振つて手頃の生木を截つて持つて歸る、之れは歸ると直ぐ薪にして、それを燃して雑煮を煮て食するとか、餅を炙つて焼き食するとか、或ひはまた此の地方にては雑煮の代りに、鹽麴を焼いて食する所もあるので、餅を焼いて食するとかするのだ、斯うさへして置けば何時山林に入つて仕事をしても思ひの儘で、決して怪我をすることも無ければ、立木も安全に發育すると云ふのだ、是れは樵夫でも農家でも山稼ぎをする者の行ふ處である。

又鋤り入と云ふも殆んど是れと同じやうであつて、十一日に農家に於いて行ふところの式である、此の式も早朝に行はれる寒式であつて、農家にては何れも一升樹に山入りの時のごとく、餅、白米、魚類の三品を調べて、一々是れを白紙に包みて入れ、外に門松の枝と鋤を携へて畑や水田へ出懸けるのである、夜明けの風はビュー／＼と吹き荒み、田の面には刈取つた稻の朽株に霜を置きて白く、畑にはサク／＼霜柱が立つて踏めば足の甲まで潜る、今年の收穫をふんだんに得やうと思ふ一心に、水涕を垂らしながら出懸けるのだ、いよく場所に至れば樹と松の枝とは下において、鋤を握つて畦を打たねば成らないが、其の時は最う寒いので冷いと云ふ處は通り越して、我が手で我が手と思はれない位に知覺を失ふてゐるが、勇を鼓して長さ四尺ほど畦を三筋鋤いて、其真中のところへ携へて来た松の枝を倒れないやうに立て、其の前へ山入りの時と同じ風に、樹に入れて来た餅と白米と魚類の紙包にした三品を、早稻、中稻、晩稻に擬して三ヶ所に置き、夫れより四邊を見廻すと

夜は全く明放れ、東の空に太陽の上るも間もなき頃と成るのだ、若しまた早く手順の出来て太陽の出るに間がありさうだと、暫らく休息して時の來たるを待合せた後、力一杯の聲を張りあげて「からすく、からすく、からすく、からすく」と三四十回も續けざまに呼ぶのだから大きい聲をあげて叫び呼ぶのだから咽喉は苦しく聲は嘎れて了ふのが例である、其の頃になると不思議な事には、何處より飛び來るともなく一羽か二羽の鳥が屹度來る、其の鳥は人間の居るのも平氣な面してゐる、是に於いて農夫は片影に身を隠して、暖きもせず鳥の舉動を見てゐる、鳥は例の紙包を嘴で突つき出し、初めに白米を食すれば、其の年は五穀が豐熟すると云つて喜び祝ふのである。

金輪投げの遊

(薩摩)

小供の遊戯も土地に依つていろいろ異なるものがあるが、自から其の國々の氣風

を發揮して居るから、人情風俗を観察するには面白い處がある、遊情に耽ける土地の小供は其の遊戯にも亦たそれが現れてゐる、薩摩の少年間に行はるゝ遊戯を見ても、其の國風の自然を表現して居ると思はれるのだ、夫れは金輪投げと云ふ遊戯である。

薩摩國日置郡串木野村あたりにては、例年一月になると男兒の遊戯に金輪投げと云ふこと行はれる、夫れが如何にも薩摩準人的の處があつて、其の氣分が自然に深ふてゐるから妙である、金輪投げと云ふ遊戯は何様ことをするかと云へば、數十人の兒童を左右等分に別ち、夫れに頭目を定めて餓鬼大將が之れを占め、多くの兒童を指揮するのであるが、彼の小供の能く演る戦争ごっこを稱する、打合なぐり合をするのとは違ひ、最も規律正しく整々堂々の陣營を張り、競技の上で勝敗を決するのだが、其の決し方が秩序が整つてゐる處に、國風が發揮され薩摩人の氣分が發露して居るのだ、そして此の頭目になるものをダイユウと稱し、双方に一人宛あるの

だがダイユウとは大王の訛であらうと云ふが、兎に角其の組の大將であるのだ、又配下に屬する者をセコと云ふ即ち勢力である、兵士と云ふの意である、斯うして役割と組合が極まると、双方の餓鬼大將は所謂セコを引率して、通路を隔て東西に陣營を構へるのだが、其の双方の隔ては凡そ四五十間である。

陣營が整ふと先づ東の方より、徑五寸ばかりある鐵の輪を敵の方に向ひ、地上に抛ちてコロ／＼轉じて投げ遣るのである、西の方にも列を立て、之れに向ふ戰士は、何れも竹竿を構へて鐵の輪の轉げ至るを待ち受けてゐるのだから、敵から輪を投げるや一層緊張した態度で我れこそ功名手柄を現さんと、競ふて竹竿を握り詰めて轉げ來たるを待つ、而して竿の届くやうに成ると一同争ふて之を貫き刺すのだ、首尾よく鐵輪を竹竿に貫き得れば、今度は西方より東方へ投げ送るのである、東方に於いて物馴れた戰士を撰抜して、列を組んで例の竹竿を構へ、さア來い來たれと手腕を扼して待ちかける、地上を目がけて勢ひよく投る輪は、またコロ／＼と轉げ

て東方の陣に向つて來たる、戰士は忽ち竿を繰つてチヤリ、と貫き止める、又投げる投げ返すのだが、中々二の輪を毎回刺し貫くことは容易でない、東の方より送つた輪を西方で受け損じると、若し今度西方より投げたものを東方で見事刺し止められては、此の勝負に於いて西方の負となるのだ、此様ときには最も強く輪を投げて東方で受け止める機會を與へないやうに、味方の力があつて輪を投げる妙手を撰び敵を狼狽させて輪を貫かさず、失敗を與へて味方の負を差引しやうとする、東方にては見事刺し止めて閑聲を揚げんと一層緊張して來る、勢ひ鋭く轉がり來る輪をチヤリンと受け止るや、ドット閑聲を揚げて負けた西方より一人を東方に降參させる幾度も／＼斯ういふ様な事を繰返し／＼して、一方にて首尾よく貫きし折に一方にて貫き損せし時は、敗者より勝者に對して味方の一人を降參せしめるのだ、其の勝負のあつたときは勝つた方より閑聲を揚げる、敗けた方は忌々しさに堪へず、今度は負かして遣るぞと罵り、双方負けじ劣らじと争鬪數十回に及ぶうち、味方の段々

と滅じて心細くなるもあれば、又勝ち誇つてますます元氣を増し、投げ出す輪にも精氣充滿して勢ひを加へ、貫き止めんとする間に横に反れるもあり、斯くなりては敗者はいよゝ惨めな境遇に陥り、之れを回復するは到底難きに至りて、味方の總勢悉く敵の奮ふところとなり、大將一人にて如何に奮闘すれども能はず、面目を失して一敗地に塗るのである、此の遊戯は中々大悪りで兒童の意氣緊張した光景は實に勇しい感じがするさうである。

豊年祝ほうじやり

(上總)

上總國市原郡地方に『ほうじやり』と稱ふる一種の豊年祝ひがある、何れの地方にても祝ひとか祭禮とか云へば、多く之れに伴ふのが酒食である、夫れは殆んど千遍一列であるけれど、只だ酒食の料を集める手段方法が種々になつて、其の間に奇習慣俗が抱擁されて居るのである、此の地方の『ほうじやり』も亦た御多分には漏

れないが、只だ大人が關係しないで小供本位に成つてゐる處に、變つた風習が現はれて居るのだ、此の豊年祝ひは舊曆正月元日より十日までの間に、十二三歳以下の小供によつて行はれるもので、男の子ばかりで無く女の子も此の行事を幫助するのである。

ほうじやりを行ふには先づ毎年宿とすべき家を定める、夫れは其の家に小供の有る無しに關係なく、また貧富の差別なく隣りから隣りと、順番に宿を當てられる事に成つてゐるのだ、然れども年に一回の催しであるから、一村を順次に廻して往くと一人が一代に當番の來ない處もある、小供等は相談を極めて今年は何日より『ほうじやり』を遣らうと、其の日を定めると宿主へ申込む、素より否むことの出來ない村内の行事である、宿主はそれは御苦勞さまでと挨拶をするが例だ、斯うなると小供等は豫定日の前の一日は、一同當年の宿とする家に集會して、細繩で藁を結んだ小さい米俵の形を幾個となく造る、又栗の木を剥いて來て鍬、鎌、熊手の三品の

形を模し、俵へこの三品を挿し添へるのだ、是れにて準備が成るのであるから、其の翌日が乃ち『ほうじやり』の初日となる。

小供は隊を組み俵へ三品を挿した物を携へ、軒別に門先きより割竹をガチャガチャ鳴らして、ほうじやりの來た事を案内する、其中例の俵を一升掛に置いて差し出すのだ、之れを受けた家では資産の有無、貧富の程度によつて報酬は異なるけれど、俵を納めて神棚へ供へると同時に掛の中へは米二合以上一升を限度とし、錢は五厘以上十錢以内を入れて返すのである、之れが初日の巡回であつて、二日目と三日目とは午前と午後二回づゝ廻るが、今度は唯だ割竹のみを打ち鳴らし歩いて物を乞ふのだ、此の時は別に極りはない、米錢を始め何物でも施主の心の儘の物を與へるので、小供はその貰ひ溜めを宿へ運び歸れば、此處にはまた女の子が大勢待ち構へてゐて、貰つて來た米を磨ぎ飯を炊くものもあれば、又集まつた錢を持つて副食物を買ひに行くものもあり、料理をするもの味噌を摺るもの、ゴツタ返して三度

の食事を準備に怠らないのだ、此の行事が初まると村内の男の子も女の子も家に居るものなく、皆宿に來てワイ／＼騒ぎながら、其の職責を盡して居るのは餘程奇觀で、他國に於いて見ることの出來ない光景である。

美味ものや好きな物を饅腹飲んで食つて、夜になると宿の庭に火を焚き、大勢の小供がその周圍を繞つて坐り、手に手に木片を取つて之れをカン／＼コツ／＼打ち鳴らし『ほうじやり／＼、ほうじやり／＼』と不思議な節をつけ、聲を揃へて面白さうに唄ひつゝ、夜を更かすのである、斯うして三日を過ぎると貰ひ溜めた米が残る、錢も貰ふただけ消費するもので無いから餘る、處で米は賣つて錢に代へ、餘つた錢を一纏めにして、之れを年齢に準じて割り當て清潔さつぱりにするのだ、例年この割當配當金が多きものは十五錢に至り、少なきものは二三錢に過ぎざるもあるさうだ、兎に角小供が此の一切の始末をするのだから面白いではないか、近頃はまた十三歳以下の者でなく、十四五歳以上の者が若い者と云ふ名で、此のほうじや